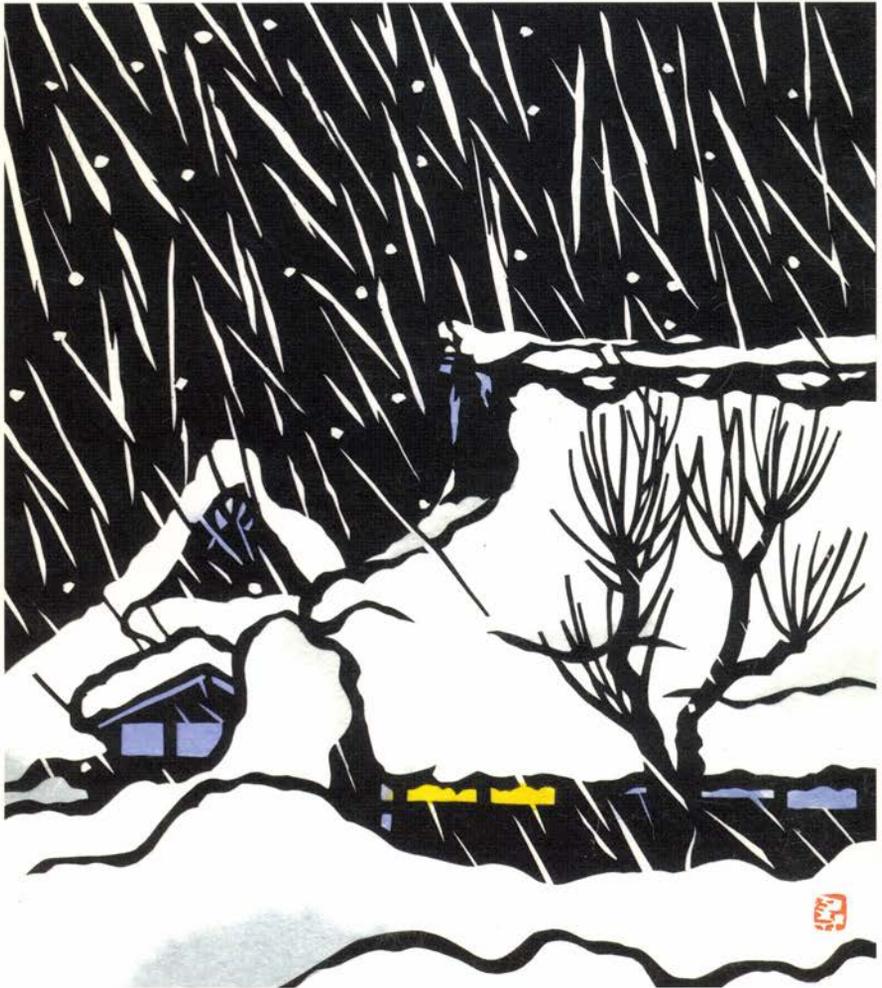


川柳塔

昭和四十一年一月九日創刊
平成十八年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九四五号



日川協加盟

No. 945

二月号

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

第7回 文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市)

募集作品 文学ルート周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳(未発表のオリジナル作品に限ります)

宿題・応募先(宿題に応じてご応募下さい。各2句)

松江市「縁結び」「牡丹」	松江市観光振興部 観光文化振興課	TEL(0852)55-5293
	〒690-8510 松江市末次町86	FAX(0852)55-5564
尾道市「灯り」「波」	尾道市企画部 観光文化課	TEL(0848)25-7366
	〒722-8501 尾道市久保1-15-1	FAX(0848)25-7293
今治市「瓦」「塩」	今治市教育委員会 文化振興課	TEL(0898)36-1608
	〒794-8511 今治市別宮町1-4-1	FAX(0898)25-1700
松山市「神輿」「マップ」	松山市総合政策部 国際文化振興課	TEL(089)948-6634
	〒790-8571 松山市二番町4-7-2	FAX(089)943-9001
瀬戸内しまなみ海道「しまなみ」「多島海」	尾道市企画部 企画課	TEL(0848)25-7316
周辺地域振興協議会	〒722-8501 尾道市久保1-15-1	FAX(0848)37-2740

応募方法

- ・専用の応募用紙、または官製ハガキ、封書に書かれた作品(FAXによる応募可)
- ・応募作品には「宿題」及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。(柳号の場合は本名も明記)
- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。一人2句以内。

応募締切 平成18年3月31日(金)(当日消印有効)

出品料 無料 選考 平成18年5・6月

発表 平成18年7月、入賞者に返却します。(表彰式は平成18年10月を予定しています。)

選考委員

(第二次選者) 今川乱魚・塩見草映・河内天笑
(第一次選者) 松本文子(松江市)・定本イツ子(尾道市)・渡邊伊津志(今治市)
丹下茂夫(松山市)・合田悦子(瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会)

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

曖昧ことば

河内 天笑

カタカナ語があふれるほどに出回っているのには閉口しているが、もっと困るのはカタカナの略語。ちんぷんかんぷん分かんことばには辟易だが、あるいは「分かつとうとしていない」のかも知れない。あんまり愚痴や文句を並べると「おじいちゃん分かんでもええやんか」と一蹴されかねない。それも淋しい。しかし、このごろもつと気になっているのは鼻持ちならぬ曖昧なことばだ。

「なるほどネ、でもわたし的にはピミヨー（微妙）かも」。あるトーク番組のワンカットだが、「ピミヨーかも」は如何にも曖昧である。これを分析すれば「あなたの言うこともなるほどとは思うけど、私としてはそれが正しいかどうか判断し兼ねますワ」と言う事だ。「ピミヨー」と言うのは多分に否定的なニュアンスのある曖昧語であると認識せざるを得ない。

ことばは生き物だから時代と共に変化して行くのは自然な流れで、一概に否定すべきでなく受け入れられるものは修得して行かねばならない。しかし、

カタカナ語や省略語と少し性質の違う曖昧語は少々厄介である。例えば「嫌い」を「好きじゃないかも」、「好き」を「好きかも知れない」など、すぐには否定も肯定もせず相手の反応を見ながら次に移る。つまり彼等にとつては「コミユニケーション」が最も大切で、言葉によつて、表現の仕方によつて友情が壊れる事を恐れるゆえの曖昧語なのだ。「それ、フツウにすごくない」とか「それかなりよくなくない」などのことばが会話にポンポンまじると、私としては前後の反応で判断するしかないなど感じている今日この頃である。

二月十六日、いよいよ「川柳塔八王子支部」が発足する。やる気と元氣印の播本充子さんをみんなで応援しよう。

自選句

いそがしい人にいたたく年賀状

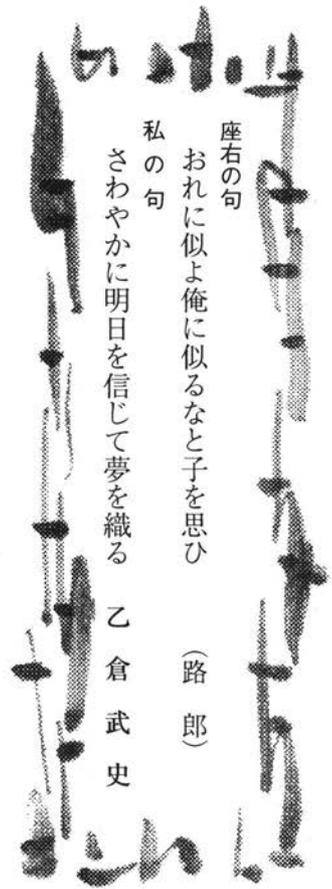
天笑

飲みすぎんようにとくれるビール券

九回の裏で嘘みたいなホンマ

どっこいしょ言うとしゃきつとする腰よ

君頬笑めばモナリザが逃げだした



座右の句

おれに似よ俺に似るなと子を思ひ

(路 郎)

私の句

さわやかに明日を信じて夢を織る 乙 倉 武 史

川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「余呉湖の雪」

■巻頭言 曖昧ことば	河内 天 笑	:(1)
ゆとり	奥田みつ子	:(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	:(4)
川柳塔の川柳讃歌 (14)	木津川 計	:(51)
自選集		:(52)
水煙抄	板尾岳人選	:(56)
■句集紹介『父の一言』(正畑半覚句集)	小島 蘭 幸	:(78)
愛染帖	新家完司選	:(79)
誹風柳多留一一篇研究 6		:(82)
檸檬抄「油 断」	仁部四郎・藤田泰子共選	:(84)

ゆとり

奥田みつ子

「川柳は人間である」と言われる。その人間が作品に表われ、たとえ言葉を飾っても、その人物以上の作品は出来ないらしい。また文章にも、歌にも、句にも品格がある。

草の芽が出たぞおしっこさせながら

葉屋でうんこのかたさなど申し 蕪 風
尿はつめたしおしっこはあたたかし 史 好

「おしっこ」とか「うんこ」とか下掛かった言葉を使いながら、決して句品を落とさない。文章でも句でも上品な言葉を使えば品格が出るものではない。

昭和五十六年、私が川柳を始めた頃には会計係の高杉鬼遊さんと橋高薫風編集長、編集実務担当の谷垣史好さんの三人がスクラムを組んで「川柳塔」発行に力を尽くしておられた。それぞれお忙しい三人だが、佳い句をたくさん遺しておられる。前述の三句にしても多忙な中に対象を見つめる静かな目がある。ゆとりがある。人間性が表われるのだろう。

麻生路郎先生は最期の病床で薫風先生の第二句集「檸檬」の序に「視野無限この言葉に尽く」

「夜寒」	和田つづや選	(86)
一路集「呼吸」	清川玲子選	(86)
「じれる」	高島啓子選	(87)
初歩教室「プレゼント」	三宅保州	(88)
秀句鑑賞「同人吟」	吉岡修	(90)
「水煙抄」	江見見清	(92)
一月本社句会	穴吹尚士	(94)
■エッセー「川」の字なりに」	小西雄々	(98)
各地柳壇(佳句地十選/堂上泰女)		(99)
本吉宗光さん さようなら		(114)
柳界展望		(115)
二月各地句会案内		(116)
■編集後記(ひとこと/播本充子)	楓葉・恵子	(118)

座右の句

止まったらあかん私は回遊魚

私の句

風も凧ぐ傍観者と決めてから

(天笑)

星野 きらり

とだけ記された。まさに視野は無限であり、川柳の句材は限りなくある。

何を感じ、どのように表現するか。

とりがなければ何を見ても心に響かない。面白い形の石を見ても、それから想像をふくらませることも出来ない。単なる石ころとして見過ごしてしまふ。逆に心にゆとりがあれば、感覚は次第にとぎすまされてゆく。

昨年末のある日、ふとしたことから、こうべ輪太鼓センターで「川柳の魅力」人生としての川柳」と題する木津川計先生のお話を聴く機会があった。

先生は「人生を川柳から学んだ」と言われる程、川柳に深い深い理解をお持ちの方でいらっしやる。

川柳の魅力として、万人の夢を描く・人生の機微をうがつ・負の真情を詠む・歎きを代弁する・告発の短詩型である・時代をとらえる・人生の真実を詠む・希望のうたである等十項目、それぞれ例句を挙げて説明される。ユーモアを交え、聴く人一人一人に語りかけるように話された。改めて川柳の幅の広さ、奥行の深さを教えられたひとときであった。

いろいろな「もの」を見て、聞いて、試して、ゆったり広い視野で川柳と向き合う。心のゆとりの大切さを思う。

川柳塔

河内天笑選

和歌山市 堀畑靖子

貧しくも笑顔あふれていた昭和
元氣だけ取得だなんてバチアタリ
おしゃべりな雀も見かけない寒さ
許せませ料理の手抜きぐらいなら
お正月用かとパーマひやかされ
組みやすい相手はモチのロン夫

大阪市 板東倫子

戦争もバブルも過去になった初春
お正月誰も読めない軸を掛け
いい朝だお地蔵さんが笑ってる
悲しいが性悪説になって来る
人の世や悲劇喜劇の繰り返し
石割って自己主張する白大根

羽曳野市 徳山みつこ

永田町も構造検査受けなはれ
いってらっしゃいICタグはつけたかい
落ち葉にも美人とそうでないものと

争った私をすすぐ冬銀河
明日はまだずっと続くと思わぬ
立春よ日本を覆う厄祓え

佐倉市 岡井やすお

初午や武を待つてるインパクト
温室で選抜目指しピッチング
合従連衡アジアはちよつと広すぎる
吠える犬 吠えさせとこう棒持つて
ロボットは人の意見に耳かさず
受験子にあと二日欲し二月尽

横浜市 菊地政勝

江戸っ子の父で遺産は期待せず
長生きの薬ときどき飲み忘れ
嘘ひとつつけぬ男のまわり道
弱点を突いて勝とうと思わない
一徹に生き流行に目もくれず
体重を減らせと医者の方箋

大阪市 古今堂 蕉子

結論を言えば話は終ります
根腐れをおこすほど孫かわいがり
あんなにか嫌い向い風に叫ぶ
幸せのとびらは自動ドアでない
帰らないの電話こちらは眠れない
誘惑に弱すぎ酒に強すぎる

弘前市 高瀬 霜石

四捨五入いつでもされる側にいる
どうみても数字に弱い監査役
例えばの話で人を釣り上げる
不完全燃焼のまま日が沈む
お茶の次コーヒーが出るAクラス
不機嫌な顔で体重計に乗る

堺市 志田 千代

災難はちゃんと歩道を歩いてた
そり残しの鏡がわりの妻がいる
言わぬが花鮮やかに切り返される
太極拳あれも運動なんですね
晩酌は試合終了まで続く
捨てないで買うことばかりしています

鳥取県 録 沢 風 花

冬枯れの砂丘恩師の句を偲ぶ
はかなさに沈むときには空仰ぐ
寒月に癒され今日を閉じていく

傷ついた過去から学ぶ人の道
鈍行の旅 道連れとよく弾む
夕焼けの神々しさに立ちつくす

出雲市 岸 桂子

心にも時には欲しいサロンパス
約束の一つ二つに絡む義理
言い訳を素直に聞いて領いた
ゴキブリのいなくなる日を待っている
難聴でないから盗みぎきになる
得意ではない裏切りをしよう

東かがわ市 伊勢 八重子

心音に親子の絆確かめる
胸の内明かした日から温い仲
賑やかに騒いで孤独紛らわす
知らぬ間に妻が旗振り鍵握る
精一ぱい明るく見せて子を帰し
苦も楽も生きてる証今が華

海南市 三宅 保州

あなたまで消してしまった雪景色
原点に戻るのも前向きである
イルカたちも好きな人間ウォッチング
名前だけ貸してくれとは失礼な
温室の中で通用しない季語
耳貸した途端共犯者にされる

和歌山市 田 中 み ね

おばちゃんと他人の君が言うなかれ

西高東低トイレも近くなるわいな

甘い話へみなさんお金持ちなんだ

接骨院へ通う途中でまた転ぶ

あれでよくやっついていけると思う店

パソコンやケータイ無いが生きられる

寝屋川市 森 茜

胡同にはほえむ遠い日の祖父母(北京)

アカシアの道ゆく李香蘭になる(大連)

頭から乾く目刺しへ浜の風

野ほとけが紅葉の錦着てござる

わが影をはなやかにして散るもみじ

夕暮れがすぐきてしまう砂時計

和歌山市 楠 見 章 子

熱いお茶飲んでこころを温めよう

ポインセチアの赤はサンタのおくりもの

外見は二の次なんて嘘でしょう

茗荷きざんで忘れたいことばかり

失くしもの探す新年くる前に

生き生きと老いたし影を赤く塗る

尼崎市 田 辺 鹿 太

関白を固持して妻に叱られる

情けないいつから俺は傍観者

一合が余る酒量と成りにけり

身体より気の衰えが気にかかる

赤ちゃんに上げしげ見られつゝ会釈

頑張れと言う外にない見舞客

大阪府 米 澤 俣 子

散ることを知らぬ椿のもの思い

劳いのひと言苦勞忘れさす

まだら呆けへそくり管理まだ出来る

いつ死んでもとは言えこの世捨てがたい

うるさ型には当たり障りのない話

電話口ワタシで解る間柄

鳥取市 福 西 茶 子

泣いた日の五倍笑って元をとる

張り詰めた空気怖くて三枚目

佳いことは夢占いを信じざる

信心をするかしないで揉めている

信心はせぬが神棚だけはある

私が死んでも夫は経読まぬ

堺市 村 上 玄 也

殺伐なニュースに日毎慣らされる

税務署を恐がるうちは儲けてる

気休めの嘘を包んで行く見舞い

ネーミング良くて思わぬ大ヒット

ライバルがいたからこそトップの座

三角のもつれを他人囃し立て

竹原市 正畑半覚

竹原市 岩本笑子

何年振りの美酒飲んだのがとどめ

出るものが出ぬ人間の命乞い

この世にも神様がいた名医N

採尿という術があつてよみがえる

前立腺肥大ひとりの友ができ

竹原市 時広一路

腐れ縁かも点滴の雫見る

いい日悪い日 足一日も休めない

ボールペンインクが駄々をこねはじめ

色一つ何か足りない僕の画布

布団干す男一人と言わざぬぞ

竹原市 森井菁居

取り決めに立会人が一人要る

パソコンにもまれて大きくなる子供

ガソリンの値下げ少うし喜ばせ

睡眠が一番医者も言うてくれ

曇りのち晴れの予報を信じよう

竹原市 石原淑子

山茶花の紅い筵に雪の積む

茶柱に背中押されて朝が出る

戦後史が自分史団塊と呼ばれ

握った手離し病室出る重さ

日溜りの猫のびのびと夢をみる

いろいろとあつた今年も餅をつく

正月は正月らしい顔で起き

戌の年曲り角です休みます

もう少しがんばつてみる戌の年

嬉しさの御裾分けして年が明け

広島県 福島万年

野仏に給食のパン供えあり

受験生に聞けばビミョウと笑み返る

ゴミ出せばカラスが上でお待ちかね

検査値が下がりお医者と笑み交わす

シルバーが立つ通学路道祖神

宇都部市 平田実男

付けホクロ一つで夜の顔になる

ひとり身になった自由に縛られる

ヤスリでは落ちない錆を句で落とす

日の丸の邪魔をしている星条旗

絶滅の危機に瀕して来た預金

美祿市 安平次弘道

外面にくらべモラルが欠けていた

道草をすればアイディアわいてくる

勘定に弱くて妻にみなまかし

ドナーカードゆれているのはわたしです

自由とはいいいな綿毛が空に舞い

熊本市 永田俊子

耳よりな話へ補聴器寄ってくる

耳遠い真似を老人武器にする

マンション浪人性善説を捨てました

責任転嫁自分の尻尾に気がつかぬ

実権を嫁に渡してから無口

熊本市 高野宵草

遠からぬはずの春の日待ち遠い

タイムスリップ畳が覗く家具移動

二人して通院金婚記念の日

座禅して己にも鬼が棲む怖さ

天井の露に賑わう冬の風呂

熊本市 岩切康子

黄砂舞う窓閉め籠る他はない

緊張抜けその後の宴踊り出る

干し柿作り指にアク染み腰に来る

コレステロール低下の努力もう少し

忘れ物コンビニで揃う街豊か

唐津市 坂本蜂朗

小柄でも二児の母です偉大です

二日酔いの時から妻がタクト振る

もがいてた流転の渦が懐かしい

婦省子の肩幅少し広くなり

近所との紐補強する旅土産

唐津市 山口高明

反骨の父の肋が透けて見え

過去ばかりなぞり明日を見失う

孫からの拙ない文字のお札状

一度なら笑って済ます恥もある

安楽死願うベッドの二度童子

唐津市 井上勝視

抑えてもどこか綻ぶ一人勝ち

傘寿には想定外のことばかり

怒らなきゃ老いの生甲斐ない世だな

まかせ切り妻は永年戸主である

つきあいの機微は三枚上の老妻

唐津市 宗水笑

人間が練れたと老化褒められる

自爆テロ止そう神さま疲れてる

火あぶりの刑にスルメは香を残し

感性が目まいを起こすピカソの絵

ウォームピズ親爺ゆずりのちゃんちゃんこ

唐津市 久保正剣

一族の団子が揃う通夜の席

ベレー帽が外に出たがる文化月

モンゴルのあとは欧州ブルガリア

推薦がなくても唄うバスガイド

靖国の道で誤解を拾うてくる

唐津市 樋口輝夫

孫たちに弾んだつもりの五百円
自惚れも愚痴も聴いてる屋台鍋
謙遜のつもり自惚れ見え隠れ
露ほども罪の意識の無いやから
正論を通してわびし一人酒

唐津市 市丸晴翠

一日を喜怒哀楽の波で生き
門柱にSECOMを残し屋敷消え
寅さんの恋の流転の絵巻物
年金も人も呑んでた事務局長
携帯の通話道路で聞かされる

松山市 丹下美津子

教えたり教えられたり老いの友
打ち明けるチャンス背を押す花時計
こっそりと破り捨てたい過去がある
試着室ヒップバストが愚痴を言う
北朝鮮火種が怖い核疑惑

松山市 宮尾みのり

円形脱毛ペットも病んでいる過保護
口下手を誠実とみて騙された
内にある決意無言を押し通す
サラダではパワー全開とはいかず
その前に打つ手はきつとあつたはず

松山市 古手川光

原発に追い風が吹く原油高
死んでから世間が値踏みしてくれる
朝刊もテレビも腹が立つニュース
親思うほどには子供感謝せず
滝水柱 魔法をかけたのは寒波

松山市 高橋宏臣

花束のデフォルメされて届く朝
無題の日ドアを閉めればドアの音
歳末の空にベーターヴェンが舞う
永遠のリターンマッチは砂時計
来年も生きるつもりでこよみ買う

大洲市 中居善信

十二月みんな無口で駆けている
音一つしない闇夜に雪が降る
石鎚の初冠雪や神無月
淋しくてうっかり心許してる
焼鳥屋すずめ三匹冷や二合

西予市 黒田茂代

食べられるだけ挽ぐ旅のりんご狩り
温過ぎて眠れなかった羽根布団
ストレスに負けてヘルペス偏頭痛
秋がゆく自分探しの旅に出る
洋服から和服わたしの冬仕度

東かがわ市 清川 玲子

陽の当たる場所に着地の刺客達

抜歯したせいか声までしぼんでる

ブランドの財布にしてはしぼんでる

後輩の前ではミエを切る財布

晩酌も冷やから爛にかえて秋

東かがわ市 原 賢

農一途流した汗に嘘はない

同行二人煩惱捨てる鈴が鳴る

茶柱が心に余裕くれた朝

一人では何も出来ない児に還る

ときどきは煮え湯吞まされ生きてます

東かがわ市 神保 坊太郎

元日は一年の苦の始まる日

目で飛んで二の足踏んだ水溜り

予定など立たぬ余生を刻んでる

九十はステッキガール欲しい歳

哲学の道で会ったはソクラテス

東かがわ市 川崎 ひかり

メール打つ子の指先に見とれてる

許さねば明日の光が見えてこぬ

ケセラセラ今日は生命の洗濯日

日本の安全神話総くずれ

月とスッポン互いに月と思ってる

東かがわ市 成重 放任

荒波が新人生の貌を変え

もう一度リング丸ごとかぶりたい

古びても礼服普段着にならず

少子化が温もり過ぎた子を育て

利き酒の新酒杜氏の魂満つ

東かがわ市 池内 かおり

良い人はもう止めましたあとが無い

度を越したお世辞にこにこ背なで聞く

地球より重い生命を軽く見る

鍋磨くようにはゆかぬこのお肌

老母の背の高さで流し台がある

高知市 小川 てるみ

ひと時を花と対話の移植饅

砥部焼の夫婦茶碗が手に馴染む

頑固さも少し崩れる祝い酒

月満ちて女に戻る影法師

情報のシャワーの中の甘い罨

高知市 北川 竹萌

教え児も老人組で集い寄る

飲めないが酒ばかりくる十二月

掴むものなくて急には立つを得ず

昼めしを忘れて年賀書いて居た

花八つ手今日も見てますガラス越し

高知県 赤川 菊野

豊かさが他人の痛みを知らぬ子に

四万十に薫焼きタタキ土佐の旅

初対面親しみやすい丸い鼻

一人居の私惚けたらどないしよ

他人から見れば私もおばあちゃん

高知県 小澤 幸泉

散乱の部屋に埋めた青春譜

どうしようもない生きざまに添うてみる

捕えられし者ひたすらの愛を知る

エンドレスな老友の話聞きつづけ

自画像に長寿ほくろを描き加え

砂川市 大橋 政良

傘立てにせずくしている傘のうつ

割り切ってしまうと肩が軽くなる

洗い浚いぶちまけ男骨を見せ

どの指も逆らうつむじ曲がりです

題のない絵から小石が飛んでくる

弘前市 福士 慕情

情けない顔だと思ふ歯科の椅子

抜歯して息が洩れてるサシスセソ

前歯治療中キッスは遠慮する

口中にガチンと義歯が嵌められる

歯磨きのチューブ絞るだけしほる

弘前市 岡本 花匠

かじかんだ児の掌いたわる愛の母

水洩のむごさ晒して雪を掻き

剪定の雪焼け貌の瞳が嗤い

寒泳の老若男女頼もしい

建国日軋む論議に黄昏れる

弘前市 須郷 井蛙

無農薬捕殺名人いる畑

三味線の中に地吹雪見えてくる

車椅子どんどん増える未来像

役付けを下りて静かな年賀状

夕食へひと足早いコップ酒

弘前市 今 愁女

ポインセチア一鉢買ってクリスマス

笑みつづけたいたモナリザも古曆

夢があり心に叶う日記買う

大掃除とおせち手抜きが上手くなる

まよいから覚めて新し日を拝む

弘前市 櫻庭 順風

往来に人っ子見えず寂しすぎ

薊にはあざみの描く自己主張

重くなり貴重な水を捨てました

ネクタイの背広で登山するなんて

どっと押し寄せ山頂が狭くなる

弘前市 高橋 岳水

平川市 小寺 花峯

父と子が碁仇となる松の内
補聴器の電池を替えて新春を聴く

悲しみを踊るピエロの赤い鼻

水壁へ男のロマン彫りに行く

職安に天狗の鼻が屯する

弘前市 相馬 銀波

雑学をかじると揺れている脳波

音域は広いぞ母の子守唄

ときどきは語尾でりさんでいる本音

補聴器の妻に何度も確かめる

この先も雪の予報に弱音吐く

黒石市 相馬 一花

天下り好きでたまらぬキャリア組

土壇場で知った女房の底力

酒飲むとつい触れたがる癖が出る

正義派が押え込まれる多数決

お化粧で賞味期限が延びますか

十和田市 阿部 進

夢でよい貴男のそばでつくししたい

豊作に案山子はとでもうれしそう

処世術全くかえた当りくじ

坊さんも欲しいだらうな極楽キップ

子等巢立ち茶の間二人に広すぎる

ひとり身の強い味方はフライパン
木枯しは木守り柿さえ邪魔にする
切り札を使いそびれた木偶坊
小さな風私の過去を洗い出す
軽い嘘でした本音をさらけ出す

さいたま市 星野 育子

不便だが不幸じゃないと車椅子

四季問わず野菜作りはピルの中

番付は納税者より脱税者

ブーニンのピアノに酔った二千人

平凡がいいと知りつつ物足りぬ

さいたま市 八田 敏

脳出血またもや妻は脳梗塞

片麻痺の妻このままで寝た切りに

菊作り介護ストレス癒やす日々

菊展示してマンションに友がふえ

わが余生介護と菊と医者通い

日高市 根岸 方子

絶対に音痴を直す気の月謝

真実を知らぬ幸せあるらしい

油断したつもりはないが虫歯増え

智恩院ライトアップで見たい顔

洛西のイメージ壊す人の波

東京都 清原悦子

咲く頃を忘れていない四季の花
病室にそつと優しさ置いてくる
飼い主に似てきたなあと犬を見る
それぞれの道に向かつて元家族
褒められて今にも顔が崩れそう

東京都 岸野 あやめ

子に孫に遺す一句を創らねば
例えばと言つて伝えている本音
昔娘にした説教をされる母
祖母ちゃんも学習してるカタカナ語
窓際の椅子で欠伸は出来ません

東京都 小川 賀世子

五十代の私もすでにセピア色
まだ帰らない子ヘシチューまた温め
粕汁が美味しい今日もよく冷える
ふぞろいのコロツケもよし母の味
久々の読書三昧 目に感謝

八王子市 播本 充子

目の玉を時どき温める夜更け
神妙に食べてるエゾシカのたたき
御多分に漏れず私も浮き沈み
強烈な個性で常に浮いている
雨風に打たれて冴える旗の色

武蔵野市 亀井 円女

饒舌な人が黙ると気味悪い
天国の呑屋に亡夫は入り浸り
嫁姑話弾んで鍋焦げた
やっただぜ優勝あつぱれ万歳
はんなりこてこて やっぱり宜ろし大阪弁

横浜市 小野 句多留

読み切らぬうちに次号が出る始末
大根がなに迷つたかアスファルト
ダイケアーされる立場が追つてくる
設計の手抜きに罪のなすりあい
出て行けの権利は妻も持っている

静岡市 安本 晃 授

過去の夢静かに眠る古日記
風物詩いびつな籠に花の束
野の案山子小意気にかぶるハンチング
心まで老いたくはない句をひねる
アイドルの狼煙を揚げる風の街

静岡県 蘭田 猿 杏

白星につながる飯のてんこ盛り
肩書きは支店長なり都落ち
忘年会赤提灯で締めくくる
蟻さんも僕もあくせくしない冬
過疎の町落した物がそこにある

愛知県 早川盛夫

京都府 都倉求芽

住み馴れた家を涙で売りに出す

戌の句が出来ず遅れている賀状

言い足りぬことがまだあるコップ酒

狒犬の役目に甘んじる亭主

草ばかり食べて大きくなれる牛

寒風を突き突き膝小僧健気

不便さは覚悟のうえの広い庭

無いはずの尻尾を見えるほどに振る

木曾へ来て食わぬ手はなし五平餅

人間も骨なしマンシヨンも骨なし

可児市 板山まみ子

京都市 高島啓子

洋蘭の咲くのを待つて朝の水

喉の奥で宥めすかしている言葉

こんなにも忙しいのに風邪をひき

兜煮のごぼうの方に箸が向く

女にはつらい高値の宴会費

どこ行つてたのと嫁さんに聞きません

旅ゆけばお茶と弁当チョコレート

知らぬ人にも歳を言うおばあさん

餅花がならぶ朝市ほほかぶり

奥向きのことには触れぬおつきあい

大津市 中宗明

長岡京市 山田葉子

身の破滅知らずやつてるダイエツト

神さまの手加減ちよつと甘えとく

ガン告知あの日境に煙草やめ

魔法の靴履いて飛びたい高い空

ゴキブリが夫婦喧嘩を中止させ

来年も元気なつもり株を分け

豪語した自慢崩れてごまあみろ

揺れながら明日のわたし模索する

嫁の顔般若の面でおお恐い

メールから楽しい絵文字踊り出る

富山市 島ひかる

亀岡市 井上森生

新年の小殺界と向かい合う

傷つけた枝には美味い柿なが生る（栽培家の技）

どの望み叶えて良いか迷う神

これからがもつと楽しいパートⅡ（祝還暦米友人へ）

願い事すると不思議に叶えられ

和ごころが気高く胸に『蟬しぐれ』（藤沢周平作）

密葬の願い息子は軽く聞く

豊かさの目安にならぬ衣食住

酸欠の都市に隠れていた美談

ブランドの値打ちを誇る間人（たいさ）がに

大阪市 前 たもつ

万歳をしてるまんまる女の子(四人めの孫生まれる)

0歳に用意しましたお年玉

きびしさに負けず大きくなってくれ

とまどえば恩師に出会う夢の中

大工さんを夢見る孫と話す

大阪市 鶴 田 遠 野

折鶴に命吹き込む見舞客

まだひとり ただいまハート分譲中

たかが女とこぼす男の屋台酒

歳時記を狂わす地球温暖化

置き去りにしたかされたか倦怠期

大阪市 川 端 一 歩

さて今年どんな夢見る古希の春

山の風腹いっぱいという年賀

新品のズックが山を急かすなり

名医さん脈も取らずに飲み過ぎだ

帰ったら夕飯できている幸よ

大阪市 本 間 満津子

ニツクネームで呼んで再会若返り

その下の戦い知らぬ青い空

認知症かも同じこと何遍も

子供殺害どんな心で出来るのか

呼んでいるのに運は背中を向けて行く

大阪市 川久保 睦子

一人旅秘密を一つ作ります

身の丈に合うた出会いを待っている

笑顔だけ映る手鏡みがいてる

大根がおいしいだけで冬が好き

本音吐く女に敵がふえていく

大阪市 奥村 五月

クラス会期待の彼もバーコード

閻魔には山ほどワイロ持つて行く

パトカーを先導してる子の車

嫁姑敬語使わず仲が良い

骨のない男で酒が止められぬ

大阪市 岩崎 公誠

雑踏で自分の顔とすれ違う

増床にお客うろうろ百貨店

チルドレン床の間に据え戊の歳

かなり変猿がスカート穿かされる

定年後 五年も経てばどこの誰

大阪市 川原 章久

冬の朝煙が上がる落葉焚き

食パンの耳がうまいとかじるくせ

帽子飛ばすビルの谷間のつむじ風

あんた誰母が顔見て言いました

酒煙草やめて減塩腹八分

大阪市 榎 本 日 出

ご来光無信仰でも手を合わす
満足にできずにどっと疲れ出る
落し穴掘って自分を苦しめる
いい事が続き痛みが消えている
これきりの人生だとは思われず

大阪市 榎 本 舞 夢

やんわりと言ってはるけど刺がある
美しい言葉に金はかからない
同窓会私のボケに花が咲き
目と鼻の先でケータイかけている
ただだいてうれしいカードクリスマス

大阪市 熊 代 菜 月

ホームラン打って募金をまた増やす
天国へメール打ちたい雨の夜
性格の違う二匹の猫と住む
アカシヤの歌が十八番の友が逝く
借景の庭に抱かれて露天風呂

大阪市 星 野 きらり

町外れブルースに酔う珈琲屋
団塊の世代も白髪見え隠れ
遊園地孫と一緒に燥いでる
秋夜長落ち葉踏みしめポストまで
美しくやがて裸になる紅葉

大阪市 伊 藤 博 仁

賽銭の不時着もある初えびす
許可でたら飲める手立てもして手術
見える目がみえないようなふりもする
誕生日ケーキも歌も照れ臭い
カモの数だんだん増えて冬はそこ

大阪市 西 川 更 紗

一人旅期待はずれた赤い糸
欲の皮突つ張りすぎて損をみる
一票に握手求める知らぬ人
ボロボロの血管のぞくMRI
モヤモヤがくすぶる時は食べすぎる

大阪市 近 藤 正

耐震の偽装許した民営化
張り替えた障子に響く除夜の鐘
総理の相シヤモからチンに早変わり
改革の名で増税はもうごめん
沖縄でたらい回しの基地移転

大阪市 小 泉 ひさ乃

初春に覚えたメールでおめでと
まだいける自惚鏡見てポーズ
木漏れ日を浴びて素直になつていく
激励は要らぬやさしさほしいだけ
禁煙を勧め淋しい背に詫げる

大阪市 大川 桃花

大阪市 津 守 なぎさ

こんなもと嬉しさ隠す男親
免税店大阪弁が値切つてる

満天の星空消したニユータウン

お向かいの席もずらつと高齢者

指切りにいつも遅れる男の手

大阪市 中村 叡子

笑つてた来年がくるもうそこに

夫病む先に逝くなど喧嘩する

こんなにもひとりの夜の恐ろしさ

病人をかかえ身内の暖かさ

ラ・フランス一人で食べる味でない

大阪市 岡本 久峰

マンション騒ぎ鶴の一声なぜ出さぬ

星条旗無理難題をふっかける

ぎやあぎやあと腰の座らぬ野党席

思いつき政治のツケの重い枷

受け皿が欲しい政治の貧しさよ

大阪市 井丸 昌紀

思ひ出が浮かぶ確かにこの辺り

お茶代わり言い訳しつつ飲むビール

胃の痛み宴横目にウーロン茶

切り札を持つてゐるような顔をする

テレフォンカードやがては死語となる気配

咳込んで車中の目線背中さす

よく食べて動ける幸に日日感謝

花活けて女らしさを取り戻す

白良浜静かな波に癒される

蜜柑山一つ一つにある個性

大阪市 津 守 柳 伸

古寺めぐり椿の塀の人のいさ

湯豆腐ののれんあれこれ南禅寺

柵ごしにデジカメ競う永観堂

紅葉とみかんだわの阪和道

小春日の汗はんなりと白良浜

大阪市 松尾 柳 右子

羽子板に小犬も弾む新春の空

残り物食べて母さん二段腹

定休日チンして残り物で済み

団らんの鍋の具が減り唄になる

かこまれた鍋がふつつつ笑い出し

大阪市 神夏 磯 典 子

ひと言のやさしい言葉元氣出る

子の世話にならない意地は捨てました

上手してあべこべ上司に叱られる

苦しみも時が解決してくれる

熱爛にカニスキ命足している

大阪市 小谷集一

親友と同じ数ほど敵がいる
住所録喧嘩相手が減ってくる
ハンドルを握ると個性顔を出す
真っ先に歩く癖まだ治らない
夕焼け小焼け二人っきりの孤独

大阪市 津村 志華子

絵手紙に母のざくろが爆せている
ペランダで咲いた菊です仏さま
童謡を唄うと亡母のこと想う
寒椿冬を明るくしてくれる
ピタミンCいっぱい食べている炬燵

大阪市 小糸 昭子

あちこちを直し過ぎてる花鉢
お犬様しゃれた服着て床暖房
雑種でもうちのが一番別嬪や
人間もお犬様まで長寿国
まん中で大平楽な猫軒

大阪市 渡部 さと美

買物を頼むと夫量を買
われながらうまく隠した探しもの
年末の寒気中国製だろう
ジャンボくじちよつと迷うて花を買
う
カレンダーと頭の曜日ずれていた

大阪市 清水 絹子

保険加入亡夫へ内緒またひとつ
手をつなぐ夫婦絵になる共白髪
泣きながらママ呼ぶ孫にかなわない
ほとけさんまだ呼ばないで孫の守り
またかいな辞書もあきれる忘れ癖

大阪市 安達 はじめ

窓際の椅子で揺れてる心の灯
猛犬も餌を貰えば尻尾振る
身のほどを知らぬ男の勇み足
背伸びして風を待つてる影法師
目の届く範囲に夫泳がせる

大阪市 町田 達子

一年なんてほんとに早いボロくそだ
いつの間にこんなに歳を取ったかな
元旦のプランこつてり練っておこ
大らかな初日堤防から仰ごう
歳のせい温い正月待っている

大阪市 中村 れんげ

せせらぎを枕にやすむ里帰り
お寒い体が呼ぶよ鍋料理
なんでまたと叫びたくなる今朝の記事
しがらみは追っかけて来る影法師
十二月飲めぬ自分に言い聞かせ

池田市 栗田久子

茨木市 藤井正雄

牙をむく魔物は鬼と限らない
焼酎と鰯で軽く鬼やらい
冬バラの棘は鋭さかくさない
夕暮れの幻想さそう雪げしき
好きだからひそかに贈るチョコレート

和泉市 西岡洛醉

大阪狭山市 矢野梓

白い画布赤い絵を書く反抗期
束の間の秋を訪ねた散歩道
日向ほこ安楽椅子に老いかこつ
3Kの暮らしに慣れて四十年
屋根のある幸せ温さ嘸みしめる

和泉市 横山捷也

六十年七ツのクセを持つたまま
昼寝から覚めて定年日の長さ
八ツ当り妻にしている物忘れ
子離れて妻がゆっくり毛糸あむ
父の忌は少しうす目の味にする

泉佐野市 山本蛙城

ようやるわ声も絵も出る電子辞書
サムライが泣くぞ弁護士建築士
粹な人通販で見たシャツだった
ウイルスが霊長類をテストする
歳だねえ付け替え用の面がない

交野市 田岡九好

終業ベル合図にマグマ噴く男
目を閉じて心の奥の意向聞く
滝紅葉猿も見上げる水しぶき
実力差棚に不運と言うている
立場上何も言えぬが煮える腹
積明とお詫びトッパは忙しい
せかせかとした足音で師走来る
第九聞きまらずは心の大掃除
冷蔵庫に貼られたメモにせかされる
スパイスのように時時する喧嘩

交野市 森本弘風

古希の坂昨日の事は今朝忘れ
お披露目にブツシュを招く迎賓館
デパートで駅弁の旅北南
混浴にスクール水着着てる妻
若い娘の笑顔信じて買うジャンボ
風の音その日はきつと不意に来る
じつとしていても説教されるほく
お歳暮に送る自分の好きな物
朝の駅旧知の人もいなくなり
老いぬれば時の遠近感消える

交野市 山川 日出子

四捨五入私は今も古希仲間
大木を二人で抱いて気をもらう
影法師一人ぼっちに助け舟
平安の百人に会うかるた取り
大丈夫の一声を待つ検査の日

河内長野市 山岡 富美子

スキヤキへ英語の牛が攻めてくる
毒すこし呑んで兜の緒を締める
らんらんと偽善を射貫く仁王の眼
晩学の亀は仕上げを急がない
児等の危機回覧板も立ち上がる

河内長野市 植村 喜代

独り言いってストレス返しとく
人の波より稲穂の波に癒される
携帯に心取られてうれしそう
くもの巣も一緒につれて植木屋さん
週一回ご近所さんと会う生協

河内長野市 井上 喜酔

名鐘へ沈む夕陽が美しい
中国は嫌いパンダに罪はない
パソコンで冷や汗かいて老いの夢
へんくつで筋金入りの太い眉
厳冬の寒さにたえる鬼瓦

河内長野市 村上 直樹

負担増また描きなのおす老後の絵
骨抜きマンションを売る悪魔の手
もう一杯飲むかやめるか えいつ飲むか
お願いというあれこれのご命令
昼夜なき鼓動いのちにまた感謝

河内長野市 坂上 淳司

鯉鮠はしない朝陽はまた昇る
ライバルの焦りは愉快王手飛車
並ばれた師匠の怒髪天を衝く
踏まれると痛いといった影法師
並ばれた師匠黙って畑に出る

岸和田市 岩佐 ダン吉

どん尻でよし完走で終りたい
幻想だろうか九条倒れる日
ヒヤッキンの下請いつも泣いている
節くれた指で最後の菊を編む
愛一字わからぬことが多すぎる

岸和田市 井伊 東吉

住宅のイルミネーション競い合う
オイル高 床暖止めてストーブに
命より儲け優先ビル偽装
どの局も頭下げてる記者会見
通学路貴方出番と妻が言う

岸和田市 土橋 房枝

岸和田市 原

さよ子

娘を誘い初句会へといざゆかん

同じ趣味感動出来る友がいる

大木も見えぬ根っ子で支えられ

求められてるうちは幸せ母性愛

大勢で過ごした家も今独り

岸和田市 森 元 ふみよ

新聞を読めば世間が怖くなり

それなりに歳の重みが枷となり

秋深く名画の梯子美術館

歳重ね発見が有りまたたのし

美人には何故か優しい駅長さん

岸和田市 雪 本 珠子

銀杏の葉ラストダンスは風まかせ

好きなのに気のない素振りわざとする

さよならをするたび脱皮するわたし

人生譜見直し粹に生きてやる

寄せ鍋は色んな味の遊園地

岸和田市(敬) 亀 井 皎 月

先ず腰をおろすよい場所選ぶ歳

物忘れ誤魔化し笑いばかりする

賞味期限切れた女でまだ女

何もかも慎しみ急に老けました

何時終る三百六十五連休

珍しく妻も酔ってるうれしい日

短気者人の短気に苦笑い

恍惚のいましめ笑っておれぬ歳

正直に言ってしまった後の悔い

真似された癖が上手で怒れない

堺市 加島 由一

いざと言うとき逃げられるよう鍛えてる

銀杏散る会って別れるばかりなり

チヨコレート騒ぎわずらわしいばかり

ペアルック三日続かぬウオーキング

ままごとのように七草二人だけ

堺市 西村 りつえ

グルメ国犬のおせちも売っている

尻尾振り転ばずいこう戌のとし

暗すぎるニュースに憂う寒鼻

ふわふわの毛布が癒す冬ごもり

一年中笑って癌細胞潰す

堺市 近藤 豊子

小走りの小犬のあたまリボンゆれ

蟻の巣の奥にしずかな冬の日日

耳の奥に鐘の鳴る丘 里の秋

空の奥ひみこの鏡照るのかも

奥ふかくお育ちになり笑みさやか

堺市源田 八千代

少子化へ追討ちかけて来る惨事

要支援なれど我が国火の車

我が家でも無病息災大根だき

宅配便りんごとみかん往き来する

剪定の庭に水仙香り立つ

堺市神原 文

酌み交わすやからが増えて若返り

残り酒祖母黙々と引き受ける

庭紅葉ほんのり映えるコップ酒

夫より永く輝く庭紅葉

極月を何をそんなに死に急ぐ

堺市山本半 銭

言い草を思い出してる古日記

のんびりの付けが回って来る師走

冬日和離婚届が視野にある

躰きが大きくひびく冬の靴

金魚鉢ひっそりとして冬仕度

堺市和田 つづや

日が暮れてしまうと別れつらくなる

ひと呼吸おいて失言しなくなる

窓際も悟りきれたら温い席

海外の油抜きする梅茶漬

達成感のない人生で終るまい

堺市齋藤 さくら

スランプへ肩の力を抜いてみる

ご近所で貰う大根に葉っぱあり

足痛い昨日の正座こたえてる

マイベース追い越されてもマイベース

メモ取っていたメモ探す小半日

堺市宮本 かりん

上ずった声で強がり言うている

割り切って進んでゆけるのも若さ

母さんの自慢話も愚痴まじり

癒されぬ心も金で計られる

エンジンがかかった朝の台所

堺市石堂潤子

良い方にとれば四の字ありがたし

マイベース崩さぬ友のおだやかに

地下街でがんじがらめに迷いけり

手招きで貧乏くじを引かされる

赤ちゃんが笑うとゆるむ固結び

堺市柿花和夫

鎮魂のあらん限りのルミナリエ

孫が来た日は許される昼の酒

熱燗をウォームピズと呼ぶ夫

妻という鵜匠が僕を放し飼いの

銭湯に富士がそびえていた故郷

堺市 國見 蘭香

蒲の穂が伝説かたる白兎

口止めをされてから鬱せおいこみ

隅っこまで心を詰めた便届く

見なくても元氣とわかる靴の音

常識が違う世代へ口をとじ

吹田市 山本 希久子

初占いまだ立ち去らぬ黒い雲

友達になれそうにない雲の位置

第一子長女が急に威張りだす

赤ン坊の泣き声をする若い街

戻れない歳月があり冬薔薇

吹田市 瀬戸 まさよ

十二月八日の憂い今もなお

高齢の多忙歎いて自慢する

顔よりも心の皺を伸ばしたい

ときどきは梅干し入れてにぎりめし

庭石のこれも登山の記念石

吹田市 早川 棲世

人の性へ宗教はみな地獄説く

人生は漫画の五コマ目からあと

昭和生き来て歳晩の空気好き

並の顔だけで恋下手父に似る

尻の形に貧と富と卑と

吹田市 穴吹 尚士

陰ながら応援すると口の先

奥の手は甘えて拗ねて泣いて見せ

頭から足まで虎の血が流れ

奥深い話になると目を伏せる

からからの頭に給油する日暮れ

吹田市 太田 昭

捨て犬に雑煮ひと口分けてやり

おみくじの嘘を信ずる初詣で

気の弱い鬼の背中を押してやる

硬化した脳が妥協をしたがらぬ

揺りかごの中で覚えた自己主張

吹田市 大谷 篤子

ジョーカーを掌にあたためて願うこと

古希すぎて干柿いびつとおしむ

お茶室の広がる宇宙覗き見る

気が合わぬ友の思わぬ助け舟

酒好きでどこか憎めぬ古き友

吹田市 岩屋 美明

叱る手の痛さを知って親になる

鶴ばかり折った母の歳になり

風の子が街にいっぱいいた昭和

肩すかし何度食つても一本気

だんご虫羽根が欲しいかだんご虫

吹田市 木下敏子

十二月綺麗な線で締め括る
ぽかぽかとゆず湯につかり生きかえる
年寄りの耳で掴んだ健康法
枯枝もまた来春の芽の用意
来年の犬の夢見て宝籤

吹田市 野下之男

改革の太鼓響けば上機嫌
虎の子が株価ニュースで目を覚ます
思うほどベンが走らぬラブレター
色直し鬼の居ぬ間のエピソード
嫁はんには立ち読みされた日記帳

吹田市 須磨活恵

何度でも待ちます春という季節
加速する老いに負けまい本を買う
墓を買えエステ如何と鳴る電話
年金の枠でやりくり竹しゃもじ
空びんに野菊一枝冬を挿す

四條畷市 吉岡修

脳天がまだ覚えてる師の拳
目いっぱい天こ盛りした愛あげる
俺の子によくぞ生まれて来てくれた
いつまでも旗はたたまぬ志
このままで何も変わるな鬼は外

高石市 浅野房子

身辺整理 過去はなかなか捨てがたし
あれこれと内緒話が多すぎる
水たまり気付けばもはや越せぬ川
心病む友に言うべき言葉なし
疑心暗鬼これじゃストレスたまるわけ

高槻市 江原秀夫

屠蘇の膳夫婦勝手に誓い立て
去年今年曲りくねった道続く
年金兄弟元気で揃う初詣で
闇の夜いつ明けるのか病む地球
法律も金で買います酒政連

高槻市 傍島克治

愛の鞭なら手加減してもいいものを
初耳のふり知ったか振りに花持たず
足腰を浄土の旅へ鍛えとく
風邪引くな母の電話は風邪の声
暖冬の予報に背く寒気団

高槻市 乙倉武史

種の意地処嫌わぬど根性
人心の弛みあちこち檻褌が出る
腹八分量より質へ替替えす
老醜の肌へクリーム思いやり
息巻いて見ても米寿の空元氣

高槻市 井上 照子

妻を見る兄の優しさあれが愛

あま酒をすすり京都の風情恋う

古き良き店のシャッターまた閉まる

建物も見かけの良さに騙されて

眠られぬワインゆつくり喉通る

高槻市 生田 義一

平成の子に大正は大昔

何気なく触れた一言命取り

眠れない秋の夜長をもちあます

日本一君が代うまい朝青龍

いたいけな子等をどうしてあんな目に

高槻市 西谷 治三郎

故障せず買い替えもなく金婚式

スリーエル買って毎度と礼言われ

皇室も婦唱夫隨の感じする

孫ほどの主治医に注意受けている

いつかゴミ名著逸品コレクシヨン

高槻市 瀧 本 きよし

突風が天国行ける地図攫う

古傷に触れられ疼き月仰ぐ

足繁く通い貰った前の妻

出不精に拍車をかける稲光

わっと泣き衝動買いの妻の乱

高槻市 執行 稲子

勘違い背中冷やりと赤信号

声かけて相手の名前出て来ない

不作法な私の汚点真似してる

今日も無事御苦労様と足を撫で

迂闊にも金にルーズと知らなんだ

高槻市 富田 美義

先のこと神に任せて一人旅

人様の欠点気になる暇な人

あの頃の夢は下絵のままに古い

蔵の絵は見せたらあかん贋物や

すぐ傍の宝気付かぬ果報者

高槻市 左右田 泰雄

目尻下げうまい話にぶら下がる

置き去りにされた孤独なさくらんぼ

落葉舞うそろそろ鍋の季節だな

余生いまあまり急がぬことにする

山肌を透かして見せる枯木立

豊中市 安藤 寿美子

この町が好き いやなところあるけれど

シャンソンをハミングしつつ枯れ葉掃く

子を産んで育てた家は手離さぬ

腹の底にしこり残したまま握手

おばちゃんて埋まる名所も旧蹟も

豊中市 山門 タミ

あつたかい綿入れ絆天ウォームピズ

カレンダー重たくなつた大根煮

世は情け他国に住んで友が出来

仏前にコーヒー上げて二人飲む

願わくば散り際だけは花の如

豊中市 藤井 則彦

平らかな道でも上る河原町

鮮やかな記憶にむせぶ定年日

這い上がる気迫を生んだ鳥流し

正直な鏡が怖い風呂上がり

豊中市 吉田 あずき

命の重さ知らぬ世代にうろたえる

人間のルールも知らず子が育つ

命の重み痛いほど知る戦中派

越えて来た山を思えばこれっぽち

人氣出て最早仮面をはずされぬ

豊中市 岸田 知香子

冬の庭ハイビスカスが狂い咲き

腹八分一汁一菜戦時食

出歩けず季の移り見るガラス越し

腰くだけ案山子歩けず籠の鳥

木枯らしに落葉色そえアスファルト

豊中市 水野 黒兎

札の束重く感じたことはない

割箸の袋に書いたメモで買う

信号が目立つ真冬の御堂筋

年齢の早見表から明治消え

いそいそと待てば雪降る法善寺

豊中市 江見 見清

弟が叱られ姉が泣いて詫び

母よりもより母らしくしてた姉

もう何度妻の王手をかわしたか

逆転の勝ちがボロ勝ちより嬉し

近所まで出かけた隙に締め出され

老人会ニューフェイスが増えてくる

カルテには恋わずらいと書いておく

はんなりと藤十郎がよみがえり

平坦な道で油断の骨を折る

マジックのように政治家ボロを出し

富田林市 中崎 深雪

同窓会の名簿に没がちらほらと

亡き友のあの日あの顔鮮やかに

気がつけば老い病死に囲まれて

平凡な一日を抱きしめてやる

吸いこまれても悪くはないね空の青

富田林市 池 森 子

芒野に秋の答えが置いてある

立場少しずらしてからの深呼吸

コスモスよ萩よ秋へ誘うのはやめて

無言劇がつづく明日は雨だろう

ライバルがわざと外してきた急所

富田林市 大橋 鐘 造

気休めに言った一言怪我のもと

果てしない興味が老いを若くする

ゆつくりと炎を消していく暦

人気者裏で孤独に耐えている

よくすべる口で煮湯を飲まされる

富田林市 中井 ア キ

新築の実家他人の顔をする

贈られた真珠に首を締められる

何やかや言うても妻に惚れている

人恋いのグラスへ届くボジョレーヌ

ひとことのメールでぐっすりと眠る

寝屋川市 籠 島 恵 子

東の空を楽しむ夜明け前

白黒をつけてますます眠れない

渋柿もわたしも甘くなつて冬

とり敢えず皆が向いてる方を向く

下ごころあつて楽しい酒の席

寝屋川市 富山 ルイ子

弟妹の助けを借りて年忌終え

満席でヒコキ三十六人

何時の日か強い願望果たしたい

幸せを胸いっぱい書き留める

ありがとう今年も感謝して生きる

寝屋川市 坂上 高 栄

木枯らしの夜は団欒のキムチ鍋

振り込めの電話は来ない侘び住まい

偽物が枚挙にいとまない時世

日めくりを剥がす鼓動が早くなる

嫁さんは家の大事な羅針盤

寝屋川市 平松 かすみ

心配はご無用でしたご安産(産)

おまじないしても飛ばない皺白髪

七歳の無視は成長した証拠

道徳を説けば刃が向かいそう

カレンダー出番がたと付いている

寝屋川市 太田 とし子

繋がれて子供守れぬ犬の乱

本よりも番犬入りたいランドセル

寒風うなり聞いている水中花

わたしの故郷股のぞきとは失礼な

善人の心も凍てる寒の月

阪南市 森村美花

傷つけた言葉と気づく苦い酒
みそ汁の香り元気をもらう朝
卓球で繋ぐ仲間の温い汗
てっちりの湯気に心底溶けてくる

広告に弱い私は貧乏性

羽曳野市 吉川寿美

立ち読みで昨日の続き読み終える
同情はしてもお金は貸しません
なぐさめの言葉ゆたかに他人さま
いも蛸なんさん好きな女でたわいない
何彩が似合う人生曲り角

羽曳野市 酒井一壺

この地球害虫だけが生き残り
責任のない吠え方の解説者
先に目をそらした方が負けている
白黒を付けて残った孤独感
永田町黒いカラスが威張ってる

羽曳野市 三好専平

悩むことなく母じゃは娘を忘れ
二十年かけてアホーの芸みがき
留守やでと大きな声で怒鳴りつけ
消しゴムで消えないウンをついてきた
わたくしも水母になってみたい時

羽曳野市 安芸田泰子

年金に合わず歩幅が乱れがち
こつそりと儲けた金の後始末
無病息災風邪引かぬなら馬鹿でいい
貝割菜土の温みはわからない
植え替えた桜の花芽確かめる

東大阪市 谷口義

絶対にないと思ったとこにあり
勘違いしたまま颯爽と帰る
高い方は奥義極めた炊飯器
一年が手品のように消えていく
キオスクが他人行儀になって来た

東大阪市 北村賢子

山の端が白む地球が目を覚ます
若い日の思い出辿る故郷の旅
同じ服友は半値で買うたらし
別れ際握り返した手がほてる
粘り勝ちわたしを妻にした男

東大阪市 西村哲夫

嵐吹く昨日の顔で見送られ
師匠から恋の手ほどき聞いてない
今日こそは一年前の障子貼り
綿帽子拭いきれずに地蔵尊
同窓会期待はずれの紅並ぶ

東大阪市 中岡 妙

自画像に曇りガラスが丁度良い
ついポロリ本音出してる独り言
ヘソ曲がりしてます還暦過ぎてから
ネジ少しゆるませとこう楽になる
肌が合う合わぬこの世のすれ違い

東大阪市 米田 水昇

同窓会年輪を経て丸い顔
入院はパジャマが晴着花もよう
朝日燦々術後の眼まつすぐに
病室をぬけてカラオケ娑婆の風
術後の目この世ひらけた心地して

東大阪市 安永 春

冬將軍春を待ちます青テント
よわいの差あべこべになる車椅子
のんびりと夫唱婦随で年の暮れ
サーピスがよく追加まで食べ切れず
二の舞を演じぬように心する

枚方市 丹後屋 肇

蒼穹に人さし指で大の文字
フリスビー銜える血統書のジャンプ
くらわんか耳をかすめる河内節
旅の傘畳んで入る菊の宿
錠剤を寄せて向き合う夫婦箸

枚方市 二宮 山久

お勤めを終えて気楽に朝ねばう
ふと足を止め秋風に酔う散歩
野仏に両手合わせて郷の秋
紅葉もまつさかりなりペアシユーズ
六十歳ころがるように年の暮れ

枚方市 宮川 珠笑

満期まで約款知らぬまま保険
母子手当受けて同棲する夫婦
太ももで足りずへそまで見せ歩く
にやにやと生きる私のロスタイム
目も耳も口も達者で道迷う

枚方市 安達 忠央

税上げる医療費上げる国に住み
皿洗いシエフへと上がる夢で耐え
あんなええ人にも難儀ふりかかり
賽銭にほんのかけらの夢託し
凜とした姉の正座にかなわない

枚方市 海老池 洋

お袋と呼ぶ温かい日本語
仏像彫るノミも心も研ぎ澄まし
タッチの有無で採める野球もセクハラも
輸入再開怪しい牛を食わされる
銀行だけ儲けすぎて低金利

枚方市 森 本 節 子

藤井寺市 鈴 木 いさお

千両万両色づきだして秋深まる

なし遂げた瞬間の涙朝青龍

伏目勝ち琴欧州に見る笑顔

月と駱駝の絵葉書求め美術館(佐川美術館)

アメリカからフランスへ猫ひとり旅

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

禁煙の席へおいが揺れて来る

納得のいかぬ拍手が揃わない

お顔見て耳遠いとは窺えず

咳をする好きなひとには同情し

眠つての夢より恋の夢を抱き

藤井寺市 高 田 美代子

楊貴妃も卑弥呼もあつた更年期

指切りの指がこの頃惚けてきた

低温火傷に気付いていないから怖い

思わず頭を撫でたまるいポスト

愚痴零しながらも五体まだ動く

藤井寺市 太 田 扶美代

十指みな節くれとなり古稀の坂

いつの世も発言権を持つお金

土に慣れ土に学んだ事ばかり

冬のバラじつと誰かを待つ形

自己チェック膝のあたりにある翳り

立ち退きの畑最後の葱を引く

正月かそうかと独り青テント

乗せられてやったハハハと負け惜しみ

買わぬふりしてこっそりとジャンボ籤

嫁いでも娘わが家のバラサイト

藤井寺市 若 松 雅 枝

謹厳な父も案外愛妻家

お喋りの上手な友が羨やまし

甘酒が迎えてくれた寒の入り

旅の宿枕変つて眠れない

何よりも茶粥が好きな里の母

藤井寺市 中 島 志 洋

冗談を言いつつ腹の探り合い

甲斐性が無いので尻尾振っている

福娘五年たつても未だひとり

口先の反省だから同じミス

百歳の笑顔に傘寿励まされ

箕面市 出 口 セツ子

リサイクルしたい男が一人居る

大掃除しない男がやかましい

共稼ぎ父権が軽くなつてくる

潤いが欲しくて独り聴く第九

わたくしを真っ白にする除夜の鐘

守口市 井上桂作

風さそう銀杏黄葉の華やかさ

秋たけなわ琴の音聞いて紅葉がり

銀杏黄葉受けてお手前古風なり

ジীবンのひざぬき少女うれしそ

ささやかな自負がなければ生さられず

八尾市 高杉千歩

二ノ月の鬼へ雨戸はあけておく

赤飯をチンして傘寿祝う箸

戒名に雅号あの世の句座予約

信号へもう走れない要介護

雑学をヘルパーさんが聴いてくれ

八尾市 山本宏至

先生は赤エンピツが好きらしい

絵本見る孫から何故の機関銃

妻の留守ビールのついた昼御飯

栄冠は汗と涙のピラミッド

ライブも苦しい今が正念場

八尾市 村上ミツ子

薄味に元氣もらって生きている

木枯らしへ桜もみじも走りだす

リハビリへ手応えみえるきのうきょう

不器用でノルマの海は泳げない

幸せになる戦争なんてあるもんか

八尾市 宮崎シマ子

桜島と秋田の友をおもう冬

働けば温かくなる冬が好き

あの人を誘ったことはロスだった

丹田に力入れても字がゆがむ

口慎む生活力が落ちてから

八尾市 生嶋ますみ

生きている証毎年風邪をひく

冗談も言えぬ男へビール注ぐ

悪気ないと分かっているも腹が立つ

主婦を脱ぎ家族忘れて旅の風呂

食べに行く話無言で回るメモ

八尾市 吉村一風

破る孫おらず障子の褪せてくる

生きていく笑顔鏡で確かめる

来年会う約束をして種を蒔く

ピーマンの青パツクリと口へ入れ

妻達者これが何よりありがたい

八尾市 長谷川春蘭

夜は夜なべ子に生く母の強さもて

寸陰の誤差なき水車赤トンボ

鶏頭や墓は朱の文字墨の文字

中流の暮らしを自負し秋刀魚焼く

死者生者見送る畦のまんじゅしゃげ

大阪府 初山隆盛

バラ色の夢捲き戻す春の酒
答弁に見え隠れする二枚舌
嘘かくすことばの語尾が荒くなる
反戦の誓いもやがて風化する
色あせた虹が浮いてる水溜り

大阪府 澤田和重

なに食ても旨い長生き出来そうだ
限りある生命笑って過ごさねば
ダイエットばかりしている貯金箱
頼もしい妻だが甘えてもほしい
医療費にひびくニュースは逃がさない

大阪府 野田栄呼

どちらかが穏やかで居て夫婦の和
携帯に娘は青春を奪われる
リハビリは元氣貰える憩いの場
年齢に関係はない再出発
白雲の煙吐いてる焼却炉

大阪府 前田ゆい

芋ソムリエなどと平和な芋人気
翳のない子等の歓声守りたい
駆け巡る内緒話は蜜の味
人情の希薄癒しのロボが待つ
ガラガラと地球崩れる音がする

大阪府 桑田ゆきの

ルミナリエ景気を煽る街の風
幼な名を呼び合い酌んで同期会
アスベストまだ天井から覗いてる
三秒の呼吸法覚えティータイム
三代代戌年揃う家の幸

大阪府 林子

助からぬ命へなおも注射針
コンビニの前で胡座の女の子
藪医者であつたらいいね癌告知
今晚が山場と言われはや五年
ぬくもりのある藪医者が大はやり

神戸市 山口美穂

風に乗ってくるコーランを聞く朝(イスタシブルー)
エーゲ海照らす満月艶めかし(タシヤダス)
床暖房もあつた古代の文化知る(エフェソス)
洞窟住居IT機器もある暮し(カッパドキア 2句)
キリストの歴史悲しい地下の都市

神戸市 山光久

飾っても飾っても嘘尻尾出す
我がままを許さぬ友の温かさ
酒一合こんな至福は売ってない
愛してる論吉さんには嫌われる
早天を仰ぎ感謝の朝ご飯

神戸市 伊勢田 毅

尼崎市 長 浜 美 籠

節分の鬼も内へと老い二人
妻の試歩三步離れて従いてゆく
足音が揃って怖い風が吹く
通販でまた無駄を買い悔い残す
太鼓持ち増やし総理がラッパ吹く

神戸市 木 村 貴代子

元旦の計は忘れて師走入り
クリスマス犬に断熱小屋を買う
目をつぶり耳押さえたくなるニュース
一日のプラン考えまた寝入る
一生のプランまさかに狂わされ

相生市 中 塚 礎 石

履歴書は傘寿を迎え一度だけ
何色にしようか爪を研いでいる
枕木の垣根が残る無人駅
よく慣れた私の影がついてくる
反抗の孫に無言のまま一日

芦屋市 黒 田 能 子

ひと眠りすれば紛れるほどのこと
糸切り歯もうあの頃のものでない
咳ひとつしてもバランス崩れ出す
足腰の機嫌うかがい弾んでる
芯ひとつおんならしさの邪魔をする

サイフォンの香と漂うて小半時
気難しい向かいの席は避けておく
さすが大器急がず騒がず時刻む
モノクロの頃へ人情置き忘れ
ことごとく先入観が邪魔をする

尼崎市 春 城 武庫坊

妻と買物足に感じる季節感
今日も生きてる朝の光の中に佇つ
新曆掛け老いの未来を思索する
紅い紅葉奇麗に見せる青い空
来春の新芽を信じ紅葉散る

尼崎市 春 城 年 代

師走の川をじつと見つめる忙中閑
思い出は浮かんで消えてそのまんま
お嫁さん候補のトップ笑顔良し
この道はみんなが迷いぬいた道
カレンダー一枚軽く吹かれて師走

尼崎市 軸 丸 勝 巳

久しぶり背広を着れば肩が凝る
玄関で性悪説に切り替える
初雪を喜ぶお山薄化粧
大根だき味にひと役寒気団
蜜柑剥くそろそろ炬燵出しますか

尼崎市 松下 比ろ志

慣れてくると思わぬものが見えてくる

晩秋の山は日本の秋の色

桜木も秋には秋の色を着る

球を蹴る少年の目は夢を蹴る

十二月八日耳鳴りの音消え去らず

尼崎市 林 昭三

カレンダーに書いた予定が昨日過ぎ

叩かれてラジオの右脳動きだす

主役とも知らずにパンダ木から落ち

幸福が忘れる頃にきつと来る

母にだけ全てを話す彼のこと

伊丹市 山崎 君子

青信号園児の首にマモルツチ

病室の日射し明るく外は紅葉

サンタクロース空駆けてくるホスピスに

木枯し一号赤い山茶花置き去りに

路地裏で蕎麦食べながら除夜の鐘

川西市 西内 朋月

階段を手摺で上がる酔っている

震度五へ夜も眠れないとこに住み

ジョーカーを引いた目玉が動いてる

宗教の標的になる独り者

二次会が好きで必ずついていく

川西市 米原 雪子

紅葉に寄り道すれば足が泣き

冬枯れの一本道の長いこと

熟女の会皆シングルで盛り上る

同い年友の元気に背を押され

白黒をはつきりさせて疎まれる

三田市 久保田 千代

妥協して自分の花が咲かせない

まあまあと許す心に人の味

本心が行き交う茶の間罪がない

いい夢を見たい布団に陽を貰う

抜け殻のふりして母はまるく住み

三田市 北野 哲男

金持ちになる研究に賭けて貧

案外なB面を聞く披露宴

嫁にだけわかる片言喋りかけ

ゴール前金切り声の母の声

手も足も脳の指図に後れとる

西宮市 門谷 たず子

炊きすぎた関東煮から冬になる

八種九種 胃に託びながら飲むくすり

胸底にふたりで描いた絵が消えず

淋しさを脱いで演歌を道連れに

いくばくの命か今日は布団干す

西宮市 山本義子

雪はらはら熱爛もよし寒つばき

南天は野生に生きてこそその朱

はにかんで癒してくれるシクラメン

福寿草と小さい星の話する

春だ春だユキワリソウのご注進

西宮市 西口 いわゑ

神様に毎日テストされている

泥舟に乗らねばならぬ時もある

掌に自分をのせて見ています

眠ったら損するようない日

外遊び出来なくなった子供たち

西宮市 牧 潤 富喜子

愛という今年もつとも欲しい文字

ちよつとだけ元気にさせる美容院

インターホンこんな時代の神の使徒

順調にあのそのあれで日が動く

さし木した山茶花伸びて花ざかり

西宮市 緒 方 美津子

走れるか非常袋に問われてる

菊の酒なかなか飲ませない娘

バカ話椅子もケーキもいりませぬ

嬉しければ涙を拭わなくていい

青テント掃除してはる年の暮れ

西宮市 井上松煙

悔い淡くして新年の夢にかけ

見えてきた米寿へ傘寿坂上る

災難はいつも弱者を狙い撃つ

紛れです慎ましやかに言う自信

父母おわす浄土へひびけ除夜の鐘

西宮市 菊池 トミエ

はねられたリングに意地の甘さあり

ガラス戸に映る姿に背を伸ばし

室生寺のみみじが照らす五重の塔

命日にちよつと気兼ねの秋刀魚焼く

陽だまりへおしゃれ談義の老い集う

西宮市 秋元 てる

南天を主役に据えて床決まる

どう工夫しても少ない髪に泣く

三日坊主と呼ばれたくない瘦せ我慢

偏頭痛亡母の膏薬わらつたが

トップには謝り上手据えて置く

西宮市 坪井孝一

豊かさが今幸せ度低くする

騙されても馬鹿正直で進むだけ

失敗を例えて釈迦の故にする

ふりかえるほど母に似た声のひと

迂闊にも般若の妻に酒を注ぐ

西宮市 亀岡 哲子

子機持つて家中歩く長電話

丁重にベントツ断りウォーキング

同窓会出て来た人は皆元氣

すきやき鍋も土鍋も大きすぎて冬

品種改良主役となつたかすみ草

姫路市 古川 奮水

母からの指輪を受ける誕生日

焼いも屋ティツシユサービスしてくれた

パンツ履き美女が橋立股のぞき

ウイニングボール握つたのは主役

最終節哲学見せたVゴール

兵庫県 大谷 幸次郎

光る瞳に囲まれ先生冥利なり

児の描く夢に画用紙狭すぎる

いたわりの嘘を素直に聞いている

蟹の足ゆらゆら揺れる鍋囲む

来年も命貰う氣日記買う

奈良市 天正 千梢

深いえにしか一行詩にも涙

人の血の音に聞こえる大太鼓

みちのくの文学館で興奮し

簡単な言葉で深い句を作り

ふる里でゆつくり鎧ぬいでいる

奈良市 米田 恭昌

ライバルを飛び越えてきたいい噂

みたらい溪谷心臓破りの遊歩道

錦秋の彩り競う光明寺(洛西にて 3句)

善峯寺燃える全山人の群れ

秋燃えて池面にゆらぐファンタジー

大和郡山市 坊農 柳弘

人徳で当り障りのないえくほ

朝露にさらり山茶花いい笑顔

裏漉しにされた男にある空虚

人許すイエローカードにある絆

梵鐘の余韻が急かす二月堂

生駒市 飛永 ふりこ

百均で子供に還り買い漁る

神棚へもしやまさかと宝くじ

御機嫌を問う眼孔に笑み返す

人込みと幻想に酔うルミナリエ

不機嫌をぶつつけてくる柔な人

橿原市 居谷 真理子

おっこちりゃいいだけのこと恋なんて

ヨン様で女の損を取り戻す

この道に缶捨てる人拾う人

背もたれに背中をつけたままの詫び

大空をサブプリメントとして食べる

檀原市 安土理恵

和歌山市 桜井千秀

しあわせな顔で好み焼ソース
引力の法則恋になる予感

手も口も出さぬと決めた姑の位置

四輪駆動どうもバランスとりにくい
骨拾うこんなにもろいものだとは

香芝市 大内朝子

古い忘れバレンタインの日へ期待

ちよっとだけ見栄をはったら出た元氣

極楽へ行く途中ですボランテИА

今頃になって不良がしたくなる

いつもかもにこにこしてる苦勞性

奈良県 渡辺富子

愛の字が師走の街で凍えてる

耐震偽装責任めぐり闇となる

年賀状ほほえみ連れてやってくる

秒読みになると燃えてくるやる氣

この世の旅にっこり感謝して終える

和歌山市 福本英子

景氣良い町は合併したがらぬ

他人だと開き直れば肩軽い

セールの粘りに負けた羽根布団

床の間のお軸鑑定には出さぬ

年金に見合った義理を果します

どっぷりとつかり逃げ道見失う

焦点を絞って明日の処方箋

最新式の掃除機に喝入れられる

陽当たりで花と喋って小半時

自転車で5Kの米がまだ買える

和歌山市 木本朱夏

財産のひとつ私の笑顔です

古寺巡礼ポケットにあるひとり旅

寢床から出るに勇氣のいる寒さ

脇道でそれなりに咲く冬の花

皮一枚残して望みぶら下がる

和歌山市 福井桂香

ダルメシアン オセロゲームもほどほどに

番犬はロボット犬を飼うことに

律義者やつぱり君は年男

ブルドッグいやはや飼うことに

少子化対策犬に教わろう

和歌山市 古久保和子

ひんやりと北の香りできた林檎

見られても困らぬように書く日記

お茶しましょ他人の恋路はおもしろい

あなたはチン私ディナーへ友達と

お肌にも異常乾燥注意報

和歌山市 榎原公子

初雪は自信過剰に舞い落ちる
ポケットに燻ったまま志
道程の中ほどにある消去個所
華のある言葉搜している虚ろ
冬野菜育む土のいい匂い

和歌山市 玉置当代

人前の笑顔帰ってから萎む
DNA出好きお喋り好き家族
秋風が頬撫でてゆく菊花展
わたくしと共に歩んできた山河
へソクリをいっぱい貯めてすみません

和歌山市 上地登美代

おばさんに変貌させる掴み取り
しつぺ返し怖くてイエスマンになる
世渡りが下手で纏れる豆の蔓
家族みな揃って安堵する夕餼
安心を買った保険で火の車

和歌山市 細川稚代

カニサボテン律義に花をつけてくれ
小春日がつづけば足もかるくなり
途中下車しようかここは亡母の里
これ以上聞けば空気がまずくなる
再会を夢見た彼も今は亡く

和歌山市 松原寿子

新年の扉に触れてはずむ胸
蒼い絵になったら翔んでみるもよし
血の濃さよどうやら氣質似たらしい
心の傷ふれず素通りしておこう
ほころびをぬくい言葉で縫い合わす

和歌山市 山口三千子

寒風に花は健気に返り咲き
宜しいと言われ気を抜く齒科の椅子
セールの電話傘寿と鯖を読む
庶民にはきびしい仮の世に生きる
紅葉に一息入れる道の駅

和歌山市 牛尾緑良

雪舞って亡父を故郷へと招く
昔話をしようお互い輝いて
新米をいただくありがたく食べる
義理で出す弔電だから聞く費用
祝電を忘れてましたこれも義理

和歌山市 松尾和香

オール電化モダンな妻のフラダンス
般若心経上げて笑顔の認知症
空気澄み彩艶やかな里に住み
子育ての母の思い出道標
原点へもどろう除夜の鐘を撞く

和歌山市 武本 碧

雲の上の話はいつも謎だらけ
神様の死角で気合い入れる鬼
視野誇るとんぼ眼鏡のしたり顔
善人もそれぞれ過去の二つ三つ
ストレスの極みだろうか海が哭く

和歌山市 喜田 准一

毒舌の根っこに触れる温かさ
いつまでも笑っていたいこの喜劇
深読みが過ぎて結論出て来ない
老いらくの恋でも髭は剃って行く
回り道した者同士鉢合わせ

和歌山市 宮本 三喜夫

戊年よどんな年かと気になるよ
初夢で明るい年に成ってます
オイルショック物価が騰がる気になるよ
株騰がりニンマリしてる人もあり
球界も監督かわり楽しみね

海南市 堂上 泰女

懐の寒さへ染みる初冠雪
萎んでも来期があると笑う薔薇
鍵盤をかけるシヨパンにのり翔ける
イブの夜は無風地帯で二人酒
第九の歌へ平和を祈り込む

鳥取市 植田 一京

損得になると計算よく出来る
褒め上手なあなたに笑顔返しとく
運不運謎のまんまに歳重ね
風ばかり読んで方角定まらず
忘れぬあの日は胸の奥にあり

鳥取市 武田 帆雀

雪玉を握って投げてゆく甚会
銀行を出立ての札が気前よい
老妻が投げ込む市場車押す
そもそもの因はチラチラする簪
孫いで寂し障子の穴の風

鳥取市 土橋 はるお

人前でそんなに時化た顔するな
爺ちゃんも僕もくるくるパーじゃない
嬉しくて涙の声になっちゃうよ
綱渡り風がなくてはつまらない
チラシよりなんて小さな松茸じゃ

鳥取市 土橋 睦子

初耳と膝を乗り出すひとりの灯
水仙の蕾無残になでる雪
生き甲斐と自分自身に言い聞かす
いかなごの釘煮私のお箱です
伝統を受け継ぐ子等も高齢化

鳥取市 奥谷彩子

いい今を皆積み上げて冬囲い
娘も十五恋の二葉をのぞかせる
糸切つて息子は冒険の風を選ぶ
追い風に押され余生を走り出す
ちぐはぐをつまみ合つてる夫婦箸

鳥取市 夏目一粋

ジェラシーがつめたく当たる玉の輿
携帯を持たぬ男女の愛の糸
睨まれて箸は隙見てつまんでる
花の種風に吹かれて親離れ
負けて勝つ手の内ならば許されよ

鳥取市 倉益一瑤

寒い日はふる里が呼ぶ母が呼ぶ
ベットにも介護保険が今にいる
三食昼寝無理よとトドのダイエツト
ど演歌を唄いわたしを丸洗い
あああの日買った苦勞が咲きはじめ

鳥取市 春木圭一郎

話すなら自分の言葉用意する
せつかくの過去に学んで今を生き
懐の深さ周囲を和ませる
胸の新しい風満ちてくる
あるがまま自分を許し気楽なり

鳥取市 杉本孝男

遺言のさらさら書けぬウツを溜め
行つて来ますまさか別れになろうとは
腹心の部下にまさかの弓引かれ
ハイテクへ無縁の過疎に住むひとり
へそ曲りまつり上げると名座長

鳥取市 美田旋風

日々老いる頭洗つて活入れる
少子化でシナリオ狂う老夫婦
失敗談話す講師が好きになる
どっこいしょ声が手足を軽くする
改革で増税なんて真つ平だ

鳥取市 西村黙光

炊事中に聞こえないかと妻怒鳴る
人前では喧嘩するなど孫笑う
口喧嘩女房に勝てるはずはない
喧嘩した夜のお酒の美味いこと
諍いの夜のお酒は魔女の美酒

鳥取市 有沢せつ子

やがて古希さあこれからへ螺子を巻く
たこ焼を目当てに孫の初詣で
子供会に溜めてる古紙が山になり
エンピツもうとうとしてる午後八時
また傘を一本増やすにわか雨

鳥取市 岸 本 宏 章

上品な盛付け腹は満たされず
減量の成功例は嘘だろう

冷蔵庫の中の隙間に知恵がある
マニュアルがないと使えぬ電子機器
孫と見るテレビ笑いがかみ合わぬ

鳥取市 岸 本 孝 子

似顔絵を孫に描かせて気付く皺
席譲るセーラー服にありがとう
十指みな動く幸せ忘れまい
盆暮れに子が帰省する家守る
波風が立たなくなつて気付く古い

鳥取市 田 村 邦 昭

正面を突破するから敵にされ
嫁ぐ娘へ親の心に変わりない
食べることなら一食だつて忘れない
貧しくも偽の真珠が輝やいて
箸二膳揃えいつもの朝が呼び

鳥取市 鈴 木 一 弘

辛かった長い生涯惚けて終え
自分史にそのまま書けぬ爪の跡
化粧して下りた終点無人駅
胸の内化粧おとして打ちあける
役終えたゴミに感謝の香を焚く

鳥取市 永 原 昌 鼓

好きな人できたか化粧念入りに
赤ちゃんを抱くとやさしい顔になる
アスベスト吸わせたツケがぶら下がる
順序よく逝けぬ掟に泣かされる
にこやかな遺影悲しみつのらせる

鳥取市 吉 田 弘 子

鉛色で描く山陰の冬景色
カニグルメ養生訓をつい忘れ
行列が証明してる旨い店
満腹になればストレス消えていく
躓いた路傍の石にありがとう

鳥取市 山 本 益 子

前向きに脱皮の風と歩を合わせ
原爆忌集まる人の数ふえる
御時世の変化の声に耳澄ます
賽銭に集まる金は不揃いだ
おれよおれ電話の詐欺に怯えます

鳥取市 福 田 登 美

冬枯れにシャッター降りた店もある
愚かにも転んだ靴は暇を出す
赤い靴気分を替えてべたを買う
嬉しいと命の枠が延びたよう
例会後反省こめて喫茶店

鳥取市 上田 俊路

飼い主の好みと違う犬の恋
耐えている男に流れ変わりだす
吹けば飛ぶ軽さ小泉チルドレン
環境博の会場ゴミの見本市
マリアシヤラボワあえて見せたいつけ乳首

鳥取市 西川 和子

感謝感謝今朝も元気に目が覚めた
お食事はくすりを飲んで締め括る
小脳が衰えて来た手の動き
足腰を宥めすかしてまだ生きる
ストレッツチ今日の疲れは残さない

鳥取市 塔 寛子

老人クラブ見守られつつパトロール
孫たちをうばう悪魔の来ぬ年を
手の内に入れた孫さえ手に負えぬ
もう止める歳におどされつつ走る
虎の子の九条ゆれてキナ臭い

鳥取市 宮脇 道子

若い一人食卓の花凜と咲き
冬の窓辺南天の赤覗いてる
百点をもらう人生夢だろか
姉妹で老いを曝けて納得だ
冬の海洋画の景色抜けて出る

鳥取市 加藤 茶人

死の恐怖拜んで唱え手を合わせ
イエスマンいいえ私はチルドレン
極楽に行ける教義は金が必要
人脈も金脈もなく五時退社
加害者の権利殺され損ですか

鳥取市 福島 庸二

わくわくは心の若さ保つコツ
どん底で起死回生の助け舟
笑いすぎなみだ涙で顔くずれ
寒風にしがみつく葉がいじらしい
山頂の眺め夢見てまた一歩

鳥取市 近藤 佳子

夢に来ていまだ優しく諭す母
クラス会百まで生きん顔ばかり
ちぎれ雲人のしがらみ見て通り
子供らの情けにいつも支えられ
過ぎた日が美化されてくる冬の虹

鳥取市 中村 金祥

検診の数値に胸が震えてる
無免許でいいよ三途の渡し舟
民営化歯止めが効かぬ人が決め
どんげつの僕に美人の嫁が来た
トップの座登り孤独になつていく

鳥取市 富山 檳榔樹

涅槃會のお釈迦供養に経彈む
不器用に生きる夫に妻は弥陀
働いた汗をいたわる妻と住む
神木におみくじ結び幸祈る
トランペットが咲いたと犬に話する

鳥取市 山宮 愛恵

玄関の落葉そのまま掃かずおく
人生七十代晩秋とも思う
おだやかな春でありたい朱を入れる
陽の当たる家でずい分ほめられる
洋洋と陽に癒されて友帰る

鳥取市 下田 茂登子

離別した嫁の写真が家にあり
血液型言つてはならぬ時もある
癌よお前何故こんなにも寄つて来る
お喋りが無口になった呆けていた
山の湯に浸かり我が家の恥も言う

倉吉市 野口 節子

裸木になつても夢は持つている
あの頃にかえつて見たい柳腰
血流を少女に戻す祭り笛
手応えはあつたウインク返された
孫や子のエールで喜寿を支えられ

倉吉市 山中 康子

十三年未熟な駄句でおわりそう
鳥たちの餌にはならぬ万年青の実
強がりも世評におぼれシャツポ脱ぐ
打ち明けてより透明なガラス窓
長電話すつきりしたが一時間

倉吉市 猪川 由美子

小泉まんじゅうお味はいかが議員殿
人見れば味方が敵かすぐ測り
冥土みやげに宇宙旅行をやつておく
殺しに値上げ寒風すさぶ毎日だ
外国勢が国技角界席卷す

倉吉市 米田 幸子

国民が納めた税に胡坐かく
二日酔いある朝妻の仁王立ち
六畳の海に鯨が横たわる
骨壺の中がからころしゃべり出す
我が家には我が家だけしかないカラー

倉吉市 松本 よしえ

花時計葉はたんも添え冬化粧
愛されて精いっぱい花が咲く
神経痛千年灸も買つてみる
震度六うちはマンション十二階
掌中の珠にととう羽根が生え

倉吉市 最上和枝

神の技同じ指紋の無いドラマ
屋形船時には浴びる水しぶき
ゆつくりと介護の道を車椅子
きしむ日もあり両輪として歩む
キー付けたままで車のドアロック

倉吉市 牧野芳光

魂があつて腐葉土にはなれぬ
特別な日々ではないが生きている
雪国に生まれて雪の温さ知る
牡丹雪天使の羽根のように降る
健康器具が役に立たないまま老いる

倉吉市 山本玲子

歯をむき出して笑う石榴の気味悪さ
農道をベントで走るのは愚息
隠し事ばれてうれいこともある
見て食べて両手に花のディナーショー
八十路坂やつこらさつと踏み入れる

米子市 政岡日枝子

自画像を描けば重なる母の顔
お互いに許され合つてありがとう
七人の敵も薬を呑む時間
苦い根を持つ花だから友になる
土地売れていかにも倅せそうな家

米子市 林瑞枝

金銀の犬が舞い込む年賀状
笑い播く茶の間にしたい初日の出
首筋に音楽のある屋根に月
珈琲の美味い画廊を出て散歩
きつと神はいる太陽の沈む海

米子市 白根ふみ

宮さまにあやかりケーキカットなし
太陽が小まわり師走いそがしい
山茶花が拗ねた姿でおもしろし
カラ籤でまたカラクジで笑い合う
ひよつとして仮面はずしている湯船

米子市 澤田千春

なにはともあれ忘れてならぬ水の思
旅で見た虹の光が住みついた
ジंकスを気にせず詰める旅かばん
人の名が喉で遊んで出てこない
忘れたい事が壺から顔を出す

米子市 木村春枝

気を抜くと風邪の悪魔がねらい撃つ
歳の差か話が少しずれている
日にち薬心を癒やす妙薬だ
ポケットを叩いて鍵を確かめる
早朝のテレビ明るいニュース待つ

米子市 中井ゆき

小休止いろんな事がありすぎて
さんご玉にぎって母の声をきく
ジンクスを鼻で笑った若い日々
今からはジンクスさけて回り道
なごりまだつきぬ木の葉を風さらう

米子市 青戸田鶴

東京のいちよう並木に息をのむ
白髪まじりの息子と歩くのも楽し
白菜もカニもおいしくなってきた
深追いをしてジンクスにつき当る
切り替えて楽にゆつくり歩こうよ

米子市 門脇晶子

大山が雪の帽子で人を呼ぶ
床柱森の秘密は喋らない
にぎり飯明日の命のつながりに
昔の町並なごりとどめて書きのこす
百人一首掛軸もらい正月がくる

米子市 野坂なみ

初春の犬恵方参りの列に立つ
狛犬も今年の縁起かっ出て出る
玉の輿一寸わるさがしたくなる
進む世の光に影も濃ゆるなる
ジンクスを担ぎ何やら揉めだした

鳥取県 佐伯やえ

流木に春の乙女がのつてくる
二月の雪うれしい童話しきつめる
詩囊空っぱ冬のお宝つめておく
娘のデートささり嫉の糸をとる
逝きしものみな美しい雪となる

鳥取県 石谷美恵子

劣等感あれこれ持つて弾めない
イエスノー遠慮するからややこしい
老け込まぬように少々毒も食べ
心ないジョークへ沈むデリケート
夫婦でも違つた虫を腹に飼い

鳥取県 国森武子

食べる事一番はじめになる時間
歳のせいとびらふかない婆さんに
格子まで磨いた若い日もあつた
風呂たきで煙にむせた幼い日
同窓会なごり惜しんでいつまでも

鳥取県 蔵本悦子

ウインクに機嫌よくして雨上がる
生き恥に歯止めをかける策がない
コケコッコー風邪でニワトリ歌えない
気の弱い鬼が朝方やって来る
オレオレと言つても神は金出さぬ

鳥取県 深田 俱久

軍国の三倍平和生き八十

安全は何処へ行ったの塾学校

おーい雲よ楽しい話聞かせろよ

東証ミス一瞬マイナス四百億

六十年前の雑炊味遙か

鳥取県 鳥羽 玲子

月曜日緊張感を呼びおこす

骨折が変えたか足がたくましい

あどけない顔みな同じ異民族

満員車まん中あたりいて不安

月光の曲に夢路をさそわれる

鳥取県 山下 節子

ほらあれとあの日の事が出てこない

冗談も聞く身になればぐっと刺す

葬送の曲も六甲おろしです

逆上がりようやくできたうれしい日

老い二人忘れたことも忘れてる

鳥取県 太田 幸枝

色気より食いが強い独居老

鈴の音に心のとびらたたかれる

風呂上がりビールに心洗われる

骨拾う箸がふるえてつかめない

なごり惜しいレターを焼いて嫁に行く

鳥取県 平尾 菜美

ひっそりの番犬見舞う朝一番

垣根こえありがとさんが飛んでくる

粗相ないようにと朝に気を配る

逃げ水を追って幸せ事もなげ

米研げば命を削る音がする

鳥取県 谷口 次男

霜焼けのお手々が消えて国冷える

重石取り今にも出そうあの本音

石綿に頭を下げた過去もあり

一本の目葉を待つ国と子ら

デジカメの脳か残像残らない

鳥取県 竹信 照彦

ギックリ腰癒えて畑の守りとなる

いちご苗やつと植えたら降る氷雨

正直な玉葱遅れても植える

温暖化でも雪は降る風も鳴る

雪ちらちらタイヤを換えて身構える

鳥取県 盛田 夢路

年の瀬に諸行無常の花が散る

大合併しても日本はスマー卜だ

ぬくぬくと脂肪まとった影ほうし

聖書さえ読まぬ日本のクリスマス

思いっきりストレス飛ばすハックション

鳥取県 山本 正光

松江市 三島 崧 丘

日の丸が恋しと吹雪く北の島
明日寒波来るらし鉢をとり入れる

喫煙は悪いとJ.T言つて売り

財布から出たがる銭を我慢さす

義理で行く葬儀は目立つ場所であつ

松江市 津川 紫見

ふるさとへ僕の割り符が置いてある

お互いに老いの部品を磨き合い

切り替えたはずの頭にある未練

潮騒と語り灯台詩を綴る

駅弁に民話がひとつ詰めてある

松江市 小川 注湖

看板も名所みやげのいわれ売る

裸婦像は僕より背丈高かつた

自販機はビール内緒を破る音

哲学書それとなく見せコーヒー飲む

I.T機器悪に使う子独り部屋

松江市 川本 畔

ひとり言ひとり転がる縁の下

つくづくと親に似てくる背格好

煮てほしい焼いても欲しい鯛迷う

おでん鍋最後の豆腐武者ぶるい

右脳の奥に哲学の散歩道

わたくしの物差しがある衣食住
節くれた指に逆らう蝶結び

シナリオの中に私が見当たらぬ

水晶に負けるものかとガラス玉

正直に生きてお金に縁はない

松江市 松本 知恵子

ラムサール世界にねぐら持つ野鳥

道草もできず列成す登下校

原流を結ぶ匂いに鮭帰る

生きた味地産地消でパワー出す

告白をきいていたのは昼の月

松江市 安食 友子

ぺちやくちゃも凶に乗りすぎておかんむり

侮った罰か鋭利な紙を知る

ブライドも見え見えですよ粹と野暮

シャンソンも口遊むのね赤ワイン

当てるなる出世払いがあるかしら

松江市 佐野木 みえ

洗い髪さらりと嘘を言つてみる

久し振り電話の声にときめいて

初咲きの水仙少年の夢に似て

干柿がふつくら午後のお茶にする

干柿を送る優しい気になって

出雲市 園山 多賀子

誤作動が続く人生黄昏れる
人間で終る喜劇が未だ続く
過去型の愛を反芻しています
饒舌は憚りましょう酔芙蓉
諦観を高嶺の花に嗤われる

出雲市 森 茂美

駐在所いつの間にやら消えていた
日が暮れる猫も寂しい顔をする
犯人の写真が出る無人駅
装いも新たに冬の蝶が舞う
去ぬ人の車が山に消えてゆく

出雲市 吉岡 きみえ

海荒れて島の便りを遠くする
背伸びして限界知った冬の花
トンネルの長さうんざりして師走
大根の白さに負けているわたし
ちゃんちゃんこ赤を着るまで生きぬこう

出雲市 小豆澤 歌子

内緒事みんな晒している雀
屋根と屋根黙って見詰め合うばかり
輪の中ではぐれぬように飛ぶカモメ
茜雲あしたまたねと消えていく
ちぎれ雲噂を聞いて走りだす

出雲市 久谷 まこと

空欄も出来ずうまつた日記帳
たつぷりと時間あるのにせかせかと
おちよほ口鏡が笑う皺の数
指輪には手が届かぬがダイヤ婚
居心地が良いのか鬼も出て行かぬ

出雲市 多々納 テル子

融通のきかない入歯よくずれる
ぶらんこに乗ると昔が蘇る
駐車場女性トイレはいつも混む
玄関に香焚いておく古い二人
ラジオから時どき知恵をもらつてる

出雲市 小白金 房子

一刀彫新春の縁起を買ってくる
老母の手で男結びの荷を送る
一日が始まる大工の指図板
天職と思う焼いも路地を行く
搾乳へ順待つ牛の安堵感

出雲市 佐藤 治代

ガラス窓拭いて冬陽と向かい合う
熱いお茶静かな午後のつるし柿
階段を上がるガクガク膝小ぞう
困るけど貧乏神が出て行かぬ
くい違う会話になった遠い耳

出雲市 富田 蘭水

考えよう丸く治まる八十路坂

いら立ちは眼鏡のせいにしてしまふ

カセットのお経だけれど手を合わせ

道徳の授業つくづく見たい親

いらだちと悲しみ多くみるテレビ

出雲市 石倉 芙佐子

寒冷前線こつちを向いて居るらしい

大雷が轟き出雲の雪起こし

ちゃんちゃんこシベリア帰りの夫でも

老い二人氷柱の溶ける春を待つ

吹雪く夜は鍋をはみ出す蟹の足

出雲市 持田 多輝子

生涯を専業主婦のつつかい棒

予想だにしないまさかの訃の報せ

浮き沈み人の噂もうすれゆく

病んで知る人の心の温もりを

見え透いた弁解尻尾が見えかくれ

出雲市 小玉 満江

町角で亡母に似た人振り返る

嫁さんが一事が万事ラッパ吹く

損な役いやと言えないお人好し

季は巡る仏守って五十年

仏さまに供えて嬉し庭の菊

出雲市 多久和 敬子

ふる里で大きく背伸びして帰る

ルビー婚山川越えて共白髪

思い切って私さがしの旅に出る

釣りに出て男同士の話する

約束が果せぬままに母は老い

出雲市 伊藤 玲子

ザワザワの風の言いぶん聞いてみる

風に道あけて静かな夜もらう

朝シャンの爽やかな香と腕を組む

石鹸の命移して美しく

同郷に出会いとび出す出雲弁

雲南市 毛利 幸

山よりも私支える父母がいる

香水が一寸気分を若くする

どうしてか呑気な人の傘にいる

いい女隣に座りそわそわし

こつこつと黄泉の世界の音がする

高根県 伊藤 寿美

悲しみを沈めた海が夕映える

透明になろうなろうと墨をする

一騒ぎあって森から出たカラス

青春の残滓を探す古本屋

ケイタイの圏外に居る亡母の墓地

岡山市 井上 柳五郎

真庭市 福嶋 智恵子

賀状読みお正月が始まりぬ
年一度戦友と会う年賀状

大事なことまた度忘れしてぞつとする

肩書きのとれた名刺は大あくび

手も足もまだいうことを聞いてくれ

倉敷市 井上 富子

人情の川を流れる花筏

補導歴悲しい指を持つ少女

子の尻を叩いてるのは親の見栄

自信過剰の耳に届かぬかねの音

毒のある花に痺れた旦那様

倉敷市 撰 喜子

長い貨車宅配便が競い合う

省エネがこたえて来ます老いの部屋

少子化に五つ子を生むわが娘

職退いて料理の腕をあげた夫

おしゃぶりの指がリモコン操作する

真庭市 国 米 きくゑ

言葉出さずノートに書いた血の想い

再検査の通知に揺れる小さい胸

地下茎を信じて伸びている小枝

木守柿支える小枝風に耐え

知恵の輪が解けて眠たくなる枕

だんだんと空白めだつ我が日記
携帯の機嫌とるのはむつかしい
餅三つケロッと食べて元氣出る
下駄箱に亡夫のなごり未だ並び
アスベスト我が家の壁はいいのかな

美作市 山本 玉恵

娘は戻らぬ百の花束積んだとて

うつむけば言訳よりも美しい

どの羽も翔び立つ夢をひしと抱き

目を閉じて聴く冬の音水の音

デザートを食べる頃には打ち解けて

美作市 小林 妻子

体力も氣力も失せて頑固だけ

初雪へ老いのハガキも濡れて着く

花粉症ですがシラノに負けぬ鼻

先輩が付けた霞ヶ関の悪い知恵

天変地異まだその上に偽装ビル

美作市 大石 あすなろ

古い手紙で熱い思いがこみあげる

クールビズ笑顔で夏をかけぬけた

でこぼこの道でひと皮むけました

日本茶でフツとひと息入れました

メールうつ無骨な指がもどかしい

川柳塔の

川柳讃歌

⑭

木津川 計

選ばせていただいた句のすべてはご自身を詠んだと解して、今号は評させていただきます。嘘偽りなき吐露こそ人間の真実は表わされるのですから。

毎日が王手のような暮し向き

田 辺 鹿 太

鹿太さんは、切羽詰まっているのです。一手の余裕もない「王手」をかけられ、もう逃げ道もふさがれました。お手上げです。その「王手」が毎日というのですからこの一家の貧窮ぶりは並や大抵ではありません。人並の正月も迎えられないだろうと思うにつけ、先月の師走、鹿太さんの家庭でないことを願いました。「王手のような」、切ない表現です。

雑巾しぼる不意に夫の首根っこ

安 土 理 恵

体は名を現わす、と申します。「理」は「倫理」「道理」の理でして、人のより行なうべき道を心得て充分な女性（よしな）、それが「理恵（りえ）」さんなのです。孔子の言う「矩を踰えず」の

道徳の鏡のような女性（にじょう）であらせられます。

が、女にもジキル博士とハイド氏がいますのです。僕は理恵さんの何も気づかないご主人にはらはらします。「不意に」ですから衝動的に亭主の首をひねりたい。怖いひとです。

押し売りに強情ぶりをほめられる

宮 川 珠 笑

さる日、「○○文科大臣より格別のご紹介をいただきました」と低音で莊重なもの言いの男性から、結局は「○○名鑑をお買い願いたく」。文科大臣が引き合いに出されますから油断も隙もありません。強情な押し売りにひるまず、珠笑さんは諦めさせた押し売りに「おまはんの強情ぶりに負けた」と感嘆させたのです。諸兄姉に申し上げます。珠笑さんに逆ろうてもすべては無駄なことです。

なんぼやと値札見ながら聞いてくる

鶴 田 遠 野

何百億円の取引きに「なんぼや？」と下世話な聞き方をする人はいません。失札ながら遠野さんの小商いです。値札を見ながら「なんぼや？」と聞くしたたかな大阪人です。「それがまかりまへんのや」では愛想がありませんから、あらかじめ勉強できる限度を遠野さんは決めています。「あきまへんあきま

へんで蔵が建ち」と言われた大阪です。遠野さんも大阪の商売人、「川柳塔の誌友やさかい負けとまっさ」も信じてはあきまへん。

ダイエツトやめたきつかけルノワール

星 野 育 子

ようルノワールを見てくださいました。美術展で世界最高人気はルノワールなのです。日本の版画家で一番人気だったのも棟方志功でした。二人とも豊満が好きで、ことにルノワールの裸婦のお尻は、並の男の二、三人兩宿りができるほどでした。男はみんな母の乳房への郷愁があるのです。皆さん、育子さんがむくむく肥られますよ。僕は歓迎です。

辛子を効かすんなり老いてなるものか

楠 見 章 子

刃従の生涯でした。苦勞の塊を背追ってこの年になったのです。ゴテもせず、拗ねもせず、ひとさんのついでに生きてきたのです。コケにもなぶりものにもされたわたくしでしたが、すんなりおとなしく老いると思つたら大間違ひよ、と生まれて初めて声を大にしたのです。山椒如き小粒の辛さではありません。一味唐がらしを効かせて老いに立ち向う章子さんの胸のすく見栄です。いよーっ！

（立命館大学教授・「上方芸能」誌代表）

白選集

田中正坊

目録を作り愛着湧く蔵書

枯葉散る三代生きた人送る

初恋の人に逢おうと思わない

春蘭秋菊 冬には冬の花が咲く

人生にハッピーエンドなんかかない

玉置重人

笑つても泣いても自分だけ頼り

ストレスの種を持つて来る絆

スパイスをすこし効かしたアドバイス

雑草の気持ち判る発泡酒

肩書きの数だけ枷が重くなる

恒松町紅

つくづくともラルに欠けたニュース見る

シナリオのとおりめでたく納め酒

老人の財布の中は衝動買い

折角の縁をど忘れしてしまふ

畑にも老化がすすむ秋の雲

遠山可住

喧嘩しても笑ろても枕二つある

あかんたれ毛虫が怖い街の孫

ノスタルジー異郷の駅の祭笛

なるようになるさと決まり飲みに行く

七十の不惑勲章ほしくなり

土橋螢

悪人が慈悲の光に照らされる

報恩感謝 万両の実も赤くなる

五七五の風景を描いている

柏手を正しく二つ初詣で

ゆつくりと二千六年 春がくる

西出楓楽

愛憎のはざまに川が蛇行する

逆光に透かすわたしの過去未来

三丁目の夕日に二胡を聴かせたい

サラダボールも男も深い方がよい

悪あがきするから水が臍を越す

仁部四郎

定石が株の世界でいじくられ

定期券の資格は問わぬ改札機

定刻に涙出るから二枚目だ

定型の祝辞拍手もよく揃い

日替わりの定見君に借りたのだ

波多野 五楽庵

なんとなく生きてたしなむ喜寿の酒
希望どおりモグラになった冬の章
神になるつもりで木靴履いている
サフランの匂いが残る自動ドア
待ち切れぬ言葉を選ぶ朱の小指

芳地 狸村

素うどんの鉢がならんだ楽屋裏
情のある酒はじわじわ効いてくる
じわじわと効いてきました母の灸
あじさいが雨のしずくに映えている
街道の昔をしのぶ道しるべ

宮口 笛生

耳遠くなつて長生きだと言われ
ふる里はいいとこ不便さを言われ
自慢するだけの事あり菊見事
使うのが惜しい新札別に入れ
十二月早い一日暮れて行く

宮西 弥生

先頭と歩幅を合わせている師走
押して退くまじめな男の眼がこわい
太陽と向き合う冬の骨粗鬆
命乞いなどほしない雪嵐
死に金は持たぬつもりの預金帳

森下 愛論

空一杯いろはいろはとセレモニー
秋の色山は競って背伸びする
野仏の崩れにひらひら紅葉散る
バラ一輪変わらぬものに恋の唄
六文銭握る手のひら温かい

八木 千代

ティーチャーは孫 八十の笛を吹く
多重音出てきて笛を驚かす
泣いて吹くのに音だけは喜劇めく
経よりも愉快と位牌宣うた
もう少し狂えと意地悪な仏

八十田 洞庵

ふと歳のせいとも思う白昼夢
竹光も切れそうになる凍てつく夜
傷口を洗う女のまだ未練
夕暮れの鴉山頭火も急ぐ
啖呵切る男浅瀬で溺れそう

両川 洋々

土に生きた偏平足だ恥じはせん
コーランに自爆テロなど書いてない
貧乏が僕の習慣病らしい
女であることに女が疲れ果て
漂白剤で洗うわたしの罪いくつ

阿萬萬的

雑学に明るいわりに世に疎く
屁理屈と駄洒落で人気下り坂
世話好きの癖に忘れっぽい女
何とかなるだろうと軽く足固め
何もかも半熟のまま八十路過ぎ

石川 侃流洞

部品もしあつたら苦勞しません僕の脚
六十一万株一円僕の懷露知らず
倒れても咲いて見せます秋桜
一合の酎でぐつつすり夢も見ず
ゴハンだよ孫の呼び声待つ日課

板尾 岳人

喪に服すひとへ千本黒いバラ
僕も亡母偲びて昼の月仰ぐ
流れ星亡母から届く父のこと
相談をしたいことあり流れ星
親切な人に出合つた渋い柿(四郷の里)

奥田 みつ子

誕生日 自分に送る感謝状
苦手な人 一人や二人許されよ
やさしさをたつぷり浴びた顔やさし
床の間の忍の一字に癒される
生真面目の衣を脱いで何を着る

河井 庸佑

体力の衰えを知り無理はせず
控え目な言葉に自信感じさせ
スタートへ締め直して靴の紐
不思議がる子の探求の芽を育て
なまじつか知つて氣遣う社の事情

川島 諷云児

初雪や有情無情をてのひらに
忘却の傷に逆らう冬の風
MRI油断の陰が忍び寄る
旅先で情けをもらう老いの坂
明日の絵に梅を咲かせて春を待つ

木村 あきら

お早うと顔出して来るフキのトウ
窓開けて春の空気を誘い込む
卒寿にはチト赤すぎる寒紅梅
早起は三文の損タバコ吸う
ひたすらに海を目指している小川

黒川 紫香

病人の顔を笑顔で視かれる
毎日が葉葉で日が過ぎる
お便所に行くのも許可をとつてから
冗談で看護師急所ばかりつく
病室の向かいは工事の杭だらけ

小島 蘭 幸

宇宙遊泳は犬掻きでよろしいか
いつも何かに凭れて立っているいのち
故郷暮色池田勇人展終る
師の句碑に続く私の句碑そして
父のようにいつも黙っていることだ

小 西 雄 々

生き甲斐を掬う両手を派手に見せ
如月の暁やぶる兵に告ぐ
廃屋の屋根のかなしい詩を聞く
散骨へ海はいつしか朱に染まる
気まぐれな泡を頼りにした誤算

小 林 由 多 香

満月がゆらゆら池でおいでする
隣からおいしい匂いだけもらう
請求書渡してからは来なくなり
出直そう冷たい水で顔洗う
定量を飲んだそろそろ飯にする

齊 藤 焱

サッカ―の子等へ白鳥V飛行
満塁のチャンス代打が燃えてくる
温かいことばへそつと置く受話器
おにぎりがこんなに集うボランティア
一輪の梅が茶の間を和ませる

塩 満 敏

やめたのに一服して夢をみる
新年はパソコン相手に将棋する
九条を守ろうと年賀状来る
これからは川柳のふところ探ろうか
ハンナンの裁判おもしろくなりました

新 家 完 司

チンパンジーにまだ負けている満二歳
三輪車これから長い長い旅
舞い落ちる木の葉が見えるスピードで
寂しそうな背中と見られないように
本日もこの世に残りこの世の酒

川柳塔

(つづき)

美作市 福 原 悦 子

愚痴言える他人がいつも温かい
過去語る老母の瞳活きている
口惜しさを流す女にある蛇口
円高に手腕を見せる主婦でいる
世渡りに馴れて上手に聞き流す

水煙抄

板尾岳人選

神戸市 田中章子

グーチヨキパー紙は優しく石包む

心がけいい日化粧ののりがいい

透明な空気汚れている怖さ

折られつも生きる大根見習おう

非常時になると元気になるわたし

台所夫はチンからまず覚え

和歌山県 木村 徑子

心機一転詩人の貌で第二幕

ある日ふと脱皮している一行詩

夕映えの佳境に入る人生譜

そして今二人の愛は遠い過去

初春の空にストレス干しておく

新春に膨らむ夢をあたたためる

鳥取市 山口 千代子

控えめに地味に咲きたい老いの花

本物とさわって見れば造花なり

亡夫いれば夫婦喧嘩もして見たい

燃えつきた未練の糸をまたたぐる

松葉でも死んでも二人離れない

万札は私がいやかすく逃げる

大阪市 升成 好

手弁当作ってあげる人が出来

踏ん切りをつけ一服の茶がうまい

糠漬けの味を極める母の素手

極めれば道楽などとあなどれず

古希すぎて余命本気で指を折る

気づまりな空気にお茶を入れかえる

大阪市 三浦 千津子

空気まで昨日と違う十二月

おはようさん妻の笑顔で仲直り

ひと様の痛みやわらぐ嘘をつき

子沢山アンバランスな子が育つ

柔らかい口調で要突いて来る

指十本私が生きるためにある

宇部市 高山 清子

高知県 近森 功

押し通す嘘に背筋が冷えてくる
柔らかい言葉でおさえてる急所
隅っこの死角で待っているチャンス
だまされたふりしてあげる別れ際
燃えるもの秘めてる老いのネックレス

府中市 馬場 利子

耳鳴りを消す古里のせせらぎよ
無人駅送る親子の影も冬
突然の休息くれた風邪の神
風に乗る工夫が欲しい奴風
罪許す優しいようでもむずかしい

今治市 塩路 よしみ

指文字に心の丈の愛は燃え
恵まれた嫁に感謝の日を重ね
走らねば釣瓶落としの刑に遭う
自問自答ころ沈める化粧瓶
障子貼り妻の座守る雪月花

大洲市 花岡 順子

辛い日が続く何度も手を洗う
合鍵で開かぬ扉を持っている
人混みを歩くマスクの鬱深し
美人にはことさら弱み見せられぬ
頑固さを敬つてます親父殿

呆け始め柔和な父の顔となり
生きすぎて地球の悲劇見てしま
鬼瓦ローンの屋根であぐらかき
相合の傘が火種となつて燃え
アクセルを付けたい春の車椅子

高知県 桑名 孝雄

兵糧は三分経てば出来上がる
かしら右 小泉殿へチルドレン
往復ピントPTAが騒ぎ出す
ご謙遜なさるなあなたには負け
たかが命いやいや未練たつぷり

今治市 渡邊 伊津志

よく笑う達磨でいつもすぐこける
よく笑う母の笑窪が子にうつり
良い靴の音が笑いの波を呼び
エプロンが笑いを誘う顔にする
家中の笑顔集める初日の出

札幌市 三浦 強一

記憶力頭の中でかくれんぼ
同情はしますが金は貰います
この度も一番効いた玉子酒
長寿更新少子更新どうなるの
生前葬終えてこの世にまだ未練

茨城県 葛西 清

明けぬ夜があることわたし知ってます

聞き上手切り込むスキを狙ってる

キーボード五本の指を馬鹿にする

松剪定明日は雪だとひやかされ

知らぬ土地赤提灯をすぐ見付け

東京都 井上 つよし

立った歩いた臨時ニュースでメールする

正論の玉が支えるラムネびん

二人して撞いてるように除夜を聞き

ポケットに見果てぬ夢と空財布

さあ急げチャンスに後ろ髪は無い

東京都 長谷川 康子

柿ぶどう種ナシなんて可哀そう

歌舞伎座に芸の香りを嗅ぎに行く

つるし柿夜気が夕陽が甘くする

元気な日メニュー次々湧いてくる

じつくりと読書がしたい秋なのに

昭島市 野口 忠

女帝論歴史の舵を切る重さ

情報の津波が怖い溺れそう

アンコールもうそろそろと手を休め

遠望の富士を心の額に入れ

寸評はずばり急所を突いてくる

横浜市 川島 良子

叩いても揺すっても出ぬ記憶力

嬉しくて口のチャックが締まらない

人相の悪い順から疑われ

肝心なことは無口になる多弁

真実はやがて解かれる神の手で

横浜市 長島 亜希子

名人の作と聞かされヘエドこが(茶会3句)

茶人ならありがたがって飲む名器

落葉まで計算に入れ客を待つ

ほとんどは自分のための土産買う

デパートでもらった品の値を調べ

横浜市 金森 徳三

酔った目に赤い火星も酔って見え

良性のポリープ腸に感謝する

出す一方健康だから苦笑い

毎日が記録更新喜寿の日々

町医者夫婦一緒に脈をとり

横浜市 中尾 哲代

泥靴を洗って思う子の育ち

置き忘れしまい忘れて日が暮れる

無駄金を覚悟で子には投資する

寝言でも妻には負けてばかりいる

霜柱踏んで昨夜のうさばらし

浜松市 杉浦 えむ

よそゆきの顔をほどこいていく足湯
劣勢のアリを勝たせた我もアリ
携帯があつて会話になるふたり
日記にも書けない恋と書いておく
深呼吸わたしの森よ眼をさませ

岐阜市 平野 あずま

痛恨が土俵に残る勇み足
初旅へ飛び立つ虹の滑走路
空港の時計に合わず時差の旅
初めての国へ笑顔で仲間入り
少年の心に欲しいウォームビズ

犬山市 金子 美千代

ギアチェンジせねば一年駆けて過ぎ
本場に当たれば怖いジャンボくじ
繋がってたくて本は借りたまま
子を当てにしない老い方摸索中
魂胆があるんでしようと受ける猪口

犬山市 関本 かつ子

不揃いの袖子友からの温い風呂
玄関も別で同居という孤独
ひと声をかけて睨まれ通学路
女の子菜っ葉のような名がはやり
やさしさは煮物の好きな子の育ち

京都市 三宅 満子

人恋しコート衿立て立ち飲み屋
心まで風邪を引きそうあの言葉
一人居に男の下着干しておく
役割りをあべこべにして良い夫婦
出不精が大根焚いて無事祈願

京都市 清水 英旺

ロボットが終の頼りとなる時世
老人を軽んず国に生きている
女房の命令口調に無抵抗
商魂が見え隠れするウォームビズ
夫婦して反省ごっここの長い夜

大阪市 中井 萌

距離保ち家族わたしの包装紙
旅に出て昨日のわたし脱ぎすてる
紙を折るようにかいるくあしらわれ
違うんじゃないのと言える仲になり
目配せに気付かない振り憎らしい

大阪市 尾崎 黄紅

落葉掃く昔は藪が待っていた
定年の縮図めし屋に居酒屋に
下駄がないから天気予報が外れたよ
欺されていた親切に教えられ
遺言は三十一文字の中に秘め

大阪市 森田明子

地下に張る根の形して冬木立

静けさをさらに深めてオリオン座

子ら巢立ちあなた名前で呼びましょか

追いつかれやつと戻ったマイペース

カッパルの周りに反射する若さ

大阪市 伏見雅明

快方へ弾みのついた三分粥

美女一人まわりの空気薄くする

影となり夫支えた妻の自負

刺激みな都会へ去った過疎の里

仏さま相手に遊ぶ古都の秋

池田市 上嶋幸雀

誤字脱字直せぬままにもう師走

背伸びした付けが仕返しする師走

忙しい振りをしている十二月

日記にも笑顔見られぬ十二月

しきたりがカウントダウンに呑み込まれ

池田市 多田契子

不幸分け酒呑むリズム盛り上がり

もういいと積んだ歳月突き放す

若い気でお年寄りとか言う私

家族運薄い名前で友増やす

少子化に猿の進化を待つとする

池田市 北出北朗

霜月の落ち葉が焼いた芋の味

大根の味を丸めた秋の霜

霧雨に里は墨絵の中に居る

木枯しや堅気になれぬ紋次郎

猫ジャンプしても糞虫プーラプーラ

泉佐野市 備後三代子

寝ておれと心づくしの夫の粥

ちよつと良い話に耳もさくらいろ

間違わず飲みやと葉覗かれる

相好を崩しいただく古里みやげ

手をつなぎ幼な輪になり聞く民話

泉大津市 助川和美

ネクタイを正して今日もノルマ追う

雨降れど喜びのトラ御堂筋

すじ肉が旨いおでんの冬恋し

指輪買う妻は自分にご褒美と

窓ガラス今朝も結露に泣かされる

門真市 矢阪英雄

レントゲンかくれた影が顔を出す

フィルムに写った像で覚悟きめ

蓄積の肉体疲労捻子をしめ

今からは自重しますと声に出す

錠剤で幼い頃をなつかしむ

河内長野市 木太久 正一

一歩ずつ確かめ歩く老いなれば
この冬を越ゆれば見える春の空
家事に慣れスーパ―通いも板につき
成功は術に加えて心あり
百歳の夢に向かつて散歩する

岸和田市 中岡香代

無駄だとは言えない妻のダイエツト
迷惑は無理矢理入れたでかい尻
荒れた手が空しい夫のきれいな手
気短の夫待たせてメーキャップ
決心のショートカットも知らぬ夫

堺市 羽田野洋介

妻の留守何か空気の薄い部屋
じいちゃんのひっくり返すおもちゃ箱
はあちゃんの雲行きそつと孫に聞く
辛口のズバリにひとり合点する
物好きないずれはゴミをコレクション

堺市 大久保伸子

とんびにも軍用機にも同じ空
新聞紙トイレの紙であった日も
九条の揺れがはげしくなってきた
人間を消耗品にするいくさ
六十年過ぎてても日本に基地がある

堺市 荻野像山

油断して頭が禿げた訳でない
腸検査明日に控えて忙しない
弱点を庇いあつてく老いの坂
手拍子へ本気に乗ってくるマイク
冗談で煙草を止めたわけでない

堺市 奥時雄

口軽い人が縁談持ってきた
お互いに金婚式は遠いなあ
ホームには今朝も電車と同タイム
ふるさとの山は目を閉じても描ける
屈辱を抑えきれない手の震え

吹田市 二宮栄子

思い出がぐるぐるめぐる里帰り
お月見に亡夫も一緒に顔見せる
遠い日の下駄が私を呼び止める
亡き夫に思いを馳せる葉指
もつたいない貧乏性が口に出る

吹田市 早泉早人

〇しが株を着に盛り上がり
無雑作に拾った恋が命取り
路地裏に寂しさつのる琵琶の音
街角に季節の風を問うてみる
義理チヨコの数を競った絶頂期

高槻市 佐 甲 昭 二

枯葉踏み遠い昔の音を聞く

独り立ち出来てライバル見えてくる

自分史に罪の匂いがするページ

密談を盗み聞きする壁の耳

古日記 栞の落ち葉よく喋る

高槻市 杉 本 義 昭

かくれんぼやさしい母をすぐ見つけ

リストラでエプロン似合う人となり

ネクタイを解いて自由の音を聞く

初恋はふるさとにあり流れ星

暖簾閉めあなただけよとママはいい

高槻市 安 田 忠 子

バラ色の六十代も後少し

実年齢当てられショック受けている

無理矢理に詰めた知識は直ぐ忘れ

味方より相手にヒントもらってる

一年はあつと言う間の影法師

寝屋川市 森 田 れい子

堪忍の袋切らずに母は逝き

三猿で笑ってた母それも愛

泣き笑い十指を撫でて年を越す

友達に笑い上戸がいて平和

人並でいいのよと母無理言わず

羽曳野市 森 下 一 知

悪友が旬の情報提げてくる

結局はお茶を濁して言い出せず

ライバルに肝の違いを見せられる

アルバムを囲めば母が生き返る

胸元のピンクに老いの空元氣

羽曳野市 吉 村 久仁雄

子の罪を背負って母の腰曲る

遅咲きへまだ自画像は描かない

十二色だけで故郷を描き切れず

鮮やかに鍋をあおって主夫の悦

とげのないバラ抱きしめる恐妻家

羽曳野市 永 田 章 司

簡単にリセット出来ぬ過去の傷

当り前ミス認め合う老夫婦

古希近くあれこれもつれ赤い糸

顔に似ず心優しい夫でした

皮肉たつぷりライバルの誉め言葉

羽曳野市 福 田 悦 子

足なえて杖を頼りに踏む地球

バレンタインチョコに託した恋心

鍋焼きを頼んでからの長話

寒かろう地蔵にかけた綿帽子

老いらくの恋うどん屋で笑りかけ

枚方市 伊達郁夫

裏切りにガラスの割れた音がする
計報欄毎朝探す老眼鏡

お世辞言う影が大きな舌を出す
温かい嘘に許せる罪がある
深い傷跨いで深い仲となる

枚方市 小川良吉

一寸無理耐えてあでやか菊人形
無理に酒吞まされ吐いた青春期
美女に逢い三文の得朝散歩
木枯しに年金暮らし重ねてる
便秘症母に返せぬDNA

藤井寺市 吉田喜代子

近頃は妻が宴会多くなり
不意の客に偽の咳など二つ三つ
道草の思い出できぬ女の児
他人の子褒めも叱りもした昔
引退し古希は過ぎたが今が旬

藤井寺市 伊藤アヤ子

一枚の毛布が祖父を語り出す
表札に妻の名前を書き入れる
下駄箱に忘れられてた赤い靴
心底を覗かれています月灯り
ぬる好きも少し沸かして仕舞風呂

箕面市 寺井柳童

六十年ジーパンTシャツスニーカー
食べるだけ食べて秤に怨み言
ハリケーン黒い傷跡ジャズの町
惚け封じお寺の名前出て来ない
韓流のドラマにダブる真知子巻き

八尾市 松葉君江

緊張が右脳左脳に活を入れ
勘違い他人のせいにする頑固
年重ねテンポだんだんずれてくる
辛酸を嘗めて心に幅ができ
修羅の坂越えて第二のスタートに

八尾市 中島春江

人は人我が道を行く大つごもり
神様も耳なりするよ初詣で
頼みこむ神にも都合あるだろに
ランドセル道草出来ずさびしいよ
こわいこと歳聞きたがるセールスマン

大阪府 畑中節子

背のびする心の指針いつも揺れ
旅遍路鈴のひびきに無を語る
若き日の古い日記の腑甲斐なさ
心の目老いには老いの知恵もあり
里山の闇は濃くあり流れ星

大阪府 神野 千恵子

神戸市 両川 無限

如月の風は仄かに春を抱く
血が騒ぐなぜか二月という月に
自己責任安物買ひもその一つ
風船の中に隠れている不安
片思いばかりで前世鮑かも

大阪府 小栢 こずえ

神戸市 山田 婦美子

人生を見るよに枯葉光り散る
一枚になつた暦でよけ寒い
前後見ても自分は一人だけ
飲めないが豊かな気持ヌーボ買う
無農薬虫もおいしく穴だらけ

大阪府 高木 道子

神戸市 武田 恵美子

神妙に落葉ふみ行く万歩計
北風の私語が煩い鬼瓦
やさしさと見守る範囲ランドセル
むずかしい話さておく今朝の冷え
小走りで日々の流れに縫りつく

大阪府 若月 祐作

相生市 村木 信子

糸電話亡母の命日経とどけ
化粧水出来たへチマにキスをする
ボチボチと小まめにこなすスケジュール
手に触れる観音像は温かった
久方に肩触れあつて御堂筋

遺言にアイラブユーと書いておく
手の内を見抜かれていた置手紙
正面に金の成る木を植えておく
たつぷりの愛 水漏れに気付かない
聖書からマリアの吐息もれてくる

荒巻が北海道を背負てくる
高齢の身に後押しをする枯葉
月拝む姿が亡母によく似た子
山坂があつても扱ぶ細い道
流星はいつも詩人にしてくれる

恐山友はなにかをかんじたか
カラコロと下駄で過ぎた老いの夏
冬將軍やってくるなら予定あり
食事順呼んでくれずに虫がなく
あれもこれもみな人生とたたづける

冬木立生きざま晒し天を突く
こだわりが笑い袋の底で這い
愛憎の胸でもえてる冬蛭
歩みよる絆へ弾む手毬うた
円周の真ん中にみる妥協案

尼崎市 河津 正 治

篠山市 谷 田 多美子

小宇宙夢ふくりますシャボン玉
虹抱いて明日の奇跡を夢に見る

講演会居眠り出来る場所をきめ
裸木に半月仰ぐ師走風
のし袋吐息も入れる師走風

追伸にまたひと言の母の傘

回り寿司一人で安くつきました

スリコギのように動いた母想う
几帳面過ぎて疎遠の日々を悔い

北風に石焼芋の笛のびる

尼崎市 小 池 幸 子

宝塚市 丸 山 孔 一

杖をつく決心させた膝の老い

先ず思案優先席に坐る訳

孫のため付けた手摺りが二度の役

少し派手だけど似合うと言つて欲し

耐え忍ぶことのない世で住みにくい

同窓会いつもよりやや若作り

通帳は年金だけの年六回

それでいいそれでいいんだ過ぎたこと

切れそうな絆賀状が繋ぎ役

水河溶け大地軋んで警告す

三田市 堀 正 和

西宮市 片 山 忠

総論は性善説で纏めあげ

おしゃべりな男にいつも陽が当たる

お天気も景気も嫌な下り坂

自惚れのメガネばかりを取り換える

指揮棒を持つと疲れがどつと出る

風邪引くな親の願いはこんなもの

勉強になりましたなど負け惜しみ

蹴躓く様を笑つた自己嫌悪

スランプだ青春切符でも買うか

シンプルになろうと金を遣つてる

三田市 阪 本 藤 朗

奈良市 乾 春 雄

リフォームを近頃言つて来なくなり

道草で甘いも酸いも食べた靴

のんびりと歩いて風に追い越され

根回しがあつたと知らぬ多数決

土深く春を植え込むチューリップ

ブランコが風だけ乗せて寒い夜

公園からブランコ消えて子らも消え

夕焼けを明日の土産に帰る道

ドロップスの缶は昔と同じ音

拉致家族一緒に聞きたい除夜の鐘

奈良市 矢野良一

ピラカンサ真つ赤に燃えて秋がゆく
湯の街に旅愁覚える通り雨
八つつあんど熊さん居そう古長屋
はいチーズ真面目くさつた顔になる
寒い夜の人肌恋し旅の宿

奈良市 尾畑なを江

アルバムに貼れぬ写真の行きどころ
菜の花の語るに少し嘘があり
人並みの幸福というむずかしき
想い出をキュートな箱に詰め替える
同じ種蒔いてばらつく個性かな

橿原市 藤永実千代

挨拶から掛かる電話に身構える
同郷と言った途端に気に入られ
好きだった時効過ぎれば言い易し
出し惜しみせずに言おうよ有り難う
芽吹くまで蒔き続けよう善の種

和歌山市 柏原夕胡

寝たきりも起きてきそうな十二月
恋人をひとりくださいサンタさま
触れないでほしい私は鳳仙花
まだ泣ける だからたいしたことはない
手を伸ばしても君は笑って消えてゆく

和歌山市 たむら あきこ

わからないひとに白旗振っておく
推敲へひとりの夜を灯し切る
目覚めるといつもわたしがいる不思議
老いてゆく条件少しずつ減らし
わたくしと同じリズムで揺れる友

和歌山市 根田よしこ

長生きし愛子天皇拝みたい
曖昧に言葉を濁す生き上手
酒好きに警笛鳴らす下戸の医者
勇気出し席を譲ってもらった日
爽やかな笑顔にまたも騙される

和歌山市 山田侃太

背を向けて鬼と茶漬を食っている
サングラスかけてあなたを暗くする
クラクシオン後ろに僕の妻がいる
フライパン人を炒めてみたくなる
わたくしの容積を知るかけ流し

鳥取市 谷岡清子

耳学問 時には落とす事もある
目の彩で夫の心を読んでいる
浮雲に父母追うて仰ぐ空
運命としたがい歩く夜叉の道
感動の心広げて生きるとす

鳥取市 岡田 信恵

年賀状年に一度は筆をもつ
孫はペン私は毛筆意地くらべ
年男おぞうに炊いて家族まつ
餅ついて神よりさきに毒味する
いたわりの言葉に老いを意識する

鳥取市 山岡 紀子

初恋の思い出キラリさくらんば
時間給八百円の汗キラリ
指十本今日も弾んでありがとう
ライバルに聞こえぬようにありがとう
幸せがハミングしてる旅かばん

鳥取市 近藤 秋星

除夜の鐘新と旧とが握手する
新しい手帳に夢が盛つてある
本年もよろしく私のポロ体
紅葉も見たし逝く秋悔いはなし
十二月八日どんな日知っている

倉吉市 酒井 美美子

円高の旅行きたしテロ怖し
一円に泣いておどおどする株価
円卓で話し合ったら意気投合
月明かり別れづらくて遠回り
母さんの説教あとで効いてくる

米子市 小塩 智加恵

上品な人に方言向けられぬ
救急車お通りなさい無事祈る
元気です毎朝七時箸を持つ
受話器から風邪をもらって卵酒
便り無しきつと幸せゲーム中

米子市 猪森 スミエ

手を振って見送る母が点となる
釣り上げて逃げた魚の目がキラリ
体調は青信号だ靴を履く
大波小波越えて戌年七回り
くるくると回る水車の労働歌

鳥取県 橋谷 静江

お風呂の湯加減確かめ夫を呼ぶ
愚痴をいい気分整え意気合わす
我が仮な夫を見抜いてついて行く
手さぐりで老い行く自分見つめてる
転んでも夫婦でいるから耐えられる

鳥取県 大田 勝誉

とっさには嘘も方便使わせて
あくせくと生きたところで泡となる
上手すぎて本当の腹が判らない
いい訳をしたくないよと言ひ含め
原因が判らぬ内は手は出せぬ

鳥取県 岡村 孝明

捨て切れぬプライドに泣く時もある

署名して実印見詰め思案する

メイン皿届いて会は盛り上げる

年金はあちこち巡り古い楽し

京都から温度上げない風吹かす

鳥取県 岩崎 和子

皇室は未知で不思議で覗いてる

お月様未知の世界に夢あつた

気疲れでばうつとなるのに人の中

気疲れのしない人見て寄って行く

チラシ見て目ぼしいものに赤い丸

鳥取県 福光 京子

迎える年に溜まった垢捨てる

追憶の冬は手足の痒さから

万両の実が色づいて背を伸ばす

吹き降ろす風は大山雪模様

力無く落葉が動き野辺送る

松江市 山根 邦代

幸せが伝わって来そう良い笑顔

友が来るそわそわしてる炬燵板

枯すすき手招きしてる里の秋

何げない言葉に和む田舎道

膝小僧歩けるけと急き立てる

雲南市 武島 ちよえ

冬母やっぱり旬の味でなし

雪の下潜った大根舌に溶け

猫でさえ顔負けしてる冬籠り

銀行の預貯金よりも我が余生

今日という日はもう来ない寒椿

雲南市 菅田 かつ子

隣から煮物焦げたとちゃいますか

お陽さまへゆつくり蕩けてゆくつらら

みな剃って我流の眉が出来あがり

そしてまた嫁と仲良くして居ます

逞しい腕に縫った日もあつた

雲南市 福岡 博利

終点へ着くまでこの手はなさない

どの服で出ようか鏡見る若さ

原則にこだわりすぎてけつまずき

終章はああよかつたと笑いましょ

飽食か小鳥も南天食べにこぬ

島根県 柳樂 たえこ

ポケットの中で計算してる指

謎めいた言葉がグサリ突き刺さる

欲しい物があるが財布の許可がない

見渡せば自信ありげな顔ばかり

真実を知らぬ噂の独り旅

府中市 藤岡 ヒデコ

極楽と思う夜ごとに入る風呂
年の瀬で終ってくれぬドラマあり
病葉をふるい落して年の暮れ
新年へまだまだ続くさがしもの

府中市 岩本 雅代

Gパンが正座をさせぬヤングたち
善人も仮面の下は私利私欲
忘年会胃に逆らつて呑んで居る
師走月足引きずつても走らねば

唐津市 岩崎 實

鉛筆を研げば心が走り出す
きっかけでそしらぬ人とやりすごす
夢心地かなったことのその不思議
見直しに抜き打ち検査してやられ

シドニー 坂上 のり子

リストラをする高給の経営陣
どこに住んでいても故郷はただ一つ
金があり過ぎるからだろう威張る
外からは見えぬが意識するカーテン

シドニー 三谷 たん吉

憲法や年金よりも人の道
強度欠け三猿乱れなすり合い
日本のニュースで体調乱される
何故なんだ子供の他にいるだろう

東かがわ市 向山 治延

運だめし買ったが駄目だ宝くじ
海山を越えてよく来た渡り鳥
人生は重荷を背負い長の旅
玄関に梅一輪の薫りあり

高知県 百田 幸

満点でない友だからうまが合う
自己チェックそろりそろりと冬の音
語り継ぐほどの美談もない家系
結び目を解きたい時もあり夫婦

東京都 笠原 乃りこ

混浴にタオルが泳ぐ目が泳ぐ
お互いに無視して三日つまらない
見送りと出迎えだけのできた妻
大根が双肌脱いでおでん鍋

草加市 飯土井 健翁

戦傷の疼きを癒す山の風呂
信念で話す言葉にある魅力
誠実に努力重ねて神の庇護
目立たぬが一歩一歩と出る気力

国分寺市 野崎 勝

枯葉散る寂しい髪をそつと撫で
いいことも少しはあった年が暮れ
言いがかり妻の強気に助けられ
児童には道聞くことはばかられ

日立市 加藤 権悟

田の神は休耕田を見て黙り
晩学へ挑む火種を抱いて生き
サーチライトの視野に敵機のない平和
雪虫の乱舞をだれも気付かない

横浜市 巖田 かず枝

金平糖ロイヤル色に輝いて
三時間待つて名医に診てもらう
人災でホテルマンション揺れている
難ありも大根ならば許される

佐渡市 高野 不二

年金を読みたい本が待っている
目はかすんでも間違えぬゼロの数
晩酌の追加に理由つけている
平凡な夫婦を泣かす記事ばかり

静岡市 中西 雅

枯葉舞うワルツかタンゴ軽やかに
老いの身を若葉に託す大銀杏
名月は亡夫登った虹の里
なくなった消しゴム脳の隅にある

可児市 鶴留 百合

一円の株価ネットは通過させ
北風の客入り込む発車待ち
年末の家族集まる餅搗く日
エアコンの温度を上げる今朝の居間

犬山市 吉田 幸子

弱い者いじめで廢る引つたくり
マンションの偽装冷たい鬼の群れ
復興もまだテントへの冬の月
車椅子口は達者とカウンセラー

愛知県 八木 百合子

せつかくの個性を隠す厚化粧
病む父へお国訛りで語りかけ
便利さの陰で地球が蝕まれ
パソコンを覚え漢字が忘れられ

京都市 榊本 宏子

恋をするでんぐり返りやってみる
頭使えばよいと限らぬ宝くじ
ひとつ屋根右脳の人と住む左脳
わんぱくの奥の細道ひみつ基地

大阪市 寺井 弘子

人生はドラマと思う落し穴
あれも好きこれも大好き花の種
お米研ぐ死語にするのか無洗米
隠してもどこかくすぶる恋の風

大阪市 平嶋 美智子

自然美だけアピールしてる里寂し
鈴なりの柿挽ぐ人も居ぬ故郷
古里は名所に負けぬ紅葉です
最後の葉はらりと落とす春を待つ

大阪市 吉川弘泰

豆まきで親父も鬼と的にされ

盆梅展紅白うつる癒し酒

湯豆腐の敷いた昆布のあたたかさ

ふぐ刺しの盛った絵皿のキジツつき

大阪市 池上清治

災いも浮世を渡る授業料

新築のホテルうっかり泊れない

陰口は悪いことだがすぐ喋る

旅の夢書き込む戌のカレンダー

大阪市 中村忠敬

住む世界ちがう夫婦で五十年

絵馬見れば合否がわかる誤字脱字

二人部屋ナース批評でもり上がる

美人ナースあなた血圧高くする

大阪市 平井露芳

混浴も楽し足湯の嵐山

豊岡で元気なカバン見付けたり

合併もええけど利息上げてえな

何となく効いた気がするドリンク剤

大阪市 吉内タカ子

夢追えるラスト見えない日々至福

紅白の梅むつまじく香り合う

賀状にも一筆添える詫びごころ

安否問う賀状の友が多くなり

大阪市 福岡末吉

天上の母と草笛二重奏

二度の鐘静かに打って亡母を待つ

生命の連鎖に感謝箸をとる

日本語のあやなす魅力句に染めて

大阪市 吉田富美

仮名文字の墨のかすれにつなぐ過去

だんだんと母に似て来た手をなでる

氏神の甘酒うれし初詣で

未知の日を今純白の新日記

泉佐野市 稲葉洋

夏は冬 冬に夏恋う天の邪鬼

どたん場で無欲本音じゃないでしょう

本当の純粹無垢は呱呱の時

全部欲捨てて身軽で逝きたいな

生駒市 小西稔

ウイルスが狙う相手は世界中

大相撲狙う金星日本勢

生活の邪魔になるのは多い趣味

邪魔な事みんな引き受け奉仕する

河内長野市 内海綾乃

熱燗とおでん我が家のいやし場所

怪我病気入れ言ってるコマーシャル

淀川にアザラシ来てね待ってます

札入れは診察券で重いです

修繕をしながら生きる姥盛り

岸和田市 堤 楫代

女房に感謝のことばカラオケで

ほなまたな言うたあとから長電話

強面の顔も笑えばえびす顔

岸和田市 坂口英雄

防災訓練みんなあわてず避難する

嫌われてもいつかは上がる消費税

厚化粧心磨けと言う鏡

蹴とばした石だ今更拾わない

高槻市 大崎 侑子

隙の無いおしゃれを乱す咳くしゃみ

舞い上るほどの喜びととなし

他人様の災難を気にしておれず

お守りを買って帰りの車事故

豊中市 源田 啓生

着膨れの身体寄せ合う灯油高

冬の陽に猫と並んでストレッチ

柿の実が熟れても子供知らぬ顔

風船をまた膨らますくじを買う

富田林市 古田 千華

心からでる微笑みは美しい

若作りつくり笑いは見苦しい

雪解けに笈に託し呼んでみる

どの医者もストレスですと手抜きする

コップ酒呑む干すほどに愚痴るやつ

寝屋川市 岡本 勲

ちぐはぐな歩幅結構仲がいい

少子化で友達いないと泣くすすき

どの薬効いたか元氣とり戻し

寝屋川市 北田 ただよし

真実の空には夢と愛が在る

ヴラマンクの厳寒の冬真つ只中

恋文にときめくパリの郵便夫

諦めないでいる戦のない世界

寝屋川市 長濱 賢山

わが子よりよその子ほめる父と母

苦勞して育てた子どもそつぽ向き

箸もだめリングもむけぬ現代っ子

捨てるなら産むな子どもがかわいそう

羽曳野市 松本 静子

紅葉狩終れば冬がすぐそこに

冬支度植木屋さんが西東

玄関に葉牡丹植えてお正月

街路樹の銀杏並木が黄金色

羽曳野市 仲谷 真一

伝えようひとりひとりの持つ権利

大切にひとりひとりが違うこと

当事者の声から学び反映す

計画を伝えることも大切に

東大阪市 佐々木 満作

カタツムリ紅葉の錦這うてゆき

特産品 中国産と小さな字で

水琴窟心やすらぐ四分音符

木も岩も苔まつわりて古刹庭

東大阪市 大塚 サキ子

金木犀 何処の辺りか回り道

木枯しにボブラの並木凜と立ち

十六も離れた妹頼りにし

来世でも逢いましょうねと三回忌

東大阪市 今岡 貞人

紫陽花の見事に冴える雨一過

一生が終る日あしたかもしれず

ひたむきな愛に時効がありますか

そんなこと言うたかいなとしゃべり酒

藤井寺市 西村 栄一

大阪の空それなりに星の数

それなりに潮どきを知る年の功

良い妻でどこかちよつぱり抜けている

コンビニでおでんを買っている紳士

藤井寺市 増井 ヨシ枝

マンションでなくて良かった兎小屋

つわぶきが咲いて亡夫と午後のお茶

あの人の笑顔にパワーもらい受け

女人高野亡母慕って鎧坂

藤井寺市 俣野 登志子

菊十色部屋いっぱいにして喜悅

昔の恋天然色で夢に見る

富士山と月は遠くで見ているよう

ヘアースタイル後ろはぽっかり誉められる

枚方市 二宮 紫鳳

毎日の元気をくれる万歩計

癒されて友と語らうティータム

こだわりを捨ててストレス縁遠し

カレンダーあと一枚にせかされる

八尾市 田中 トシエ

ジョーカを二枚使って生き残る

思案する席へ茶柱立てて出す

馬が合う大風呂敷と小風呂敷

したたかに五年日記の余命表

八尾市 寺川 はじむ

焦る気を蹴飛ばし尚子甦る

気負いすぎうっかり塀を越す梢

セピア色した恋も顔出す大掃除

さあやるぞ これからやるぞ明日やるぞ

八尾市 田邊 浩三

定年後電話のベルは妻ばかり

外面の良い番犬で困ります

メモノート探してる間に佳句は消え

トラブルに上司は背中押すばかり

寿が薫るスタート清子さま

八尾市 西川 義明

スキライ女心の色は謎

逃げ足の早い諭吉をいつも追う

幸運のガラスの靴がびたり合う

八尾市 赤木 妙子

行く人が日暮れに溶けていく寒露

饒舌がすぎて本音が軋げ出る

手は届くけどこっそりと摘めぬ花

裏窓はストレス捨てる時開ける

八尾市 平川 幸枝

独り居て余韻が残る笑い声

まな板を叩いてつみれ裏返す

負けん気がスタートラインの指の先

これからはだんだん細る自己主張

八尾市 脇 俊子

心なか誰れも覗けぬ掟ある

親の歳越えて浮世を闊歩する

王手とは行かないまでも妻強し

気丈夫な振りして弱気溜めている

八尾市 笹倉 ひろし

古稀過ぎて昼行灯と言わせない

影を見て自分の過去にじれてる

設計士ビルの軋みに不眠症

兄弟はママのレシピの中にいる

熟年は時には惚けの演技する

大阪府 西川 冷子

気を抜かず老いに逆らい生きて行く

予定組む時にはじまる旅気分

ふる里を繋ぐケータイ故郷訛

尼崎市 古川 正子

カレンダーありあませんお正月

戎さんに旧いお札を納めます

今日も晴れ氏神さまにお参りを

年毎に早くなる気の年の暮れ

三田市 上垣 キヨミ

集金に孫の小銭をちよつと借る

国旗出す役は自分と決めてる

やれやれと乗った電車が逆を行く

嫁ぐ子へ行けと言つた親が泣く

三田市 辻 開子

命日はコーヒ供えて姉と会う

季節感知った体が朝寝する

旬の味作者の愛が味に出る

忘年会夜空も一緒千鳥足

三田市 白井 二英

石段を登る心を空にして

いっどこで握手になるか爪を切る

言いたい言わずにおいて事は過ぎ

他所ごとと言つてはおれん不仲説

三田市 石原 歳子

チッポケな悩みと笑い飛ばされる
嫁にゆく姉にもらった桜貝

イライラを胡麻といっしょに播りつぶす

心していたがうっかりミスをする

西宮市 石野 照代

スベアの胃ぶくろほしいバイキング

ためていた空箱する年のくれ

欲望の袋の大きさ無限大

隙のない人がときどきへんな隙

西脇市 七反田 順子

宝くじ買うて夢見る二週間

民営化 郵便ポスト赤いまま

孫が来て夫婦げんかはファイナレ

シナリオは妻が先にと書いてある

兵庫県 黒崎 美紗子

ミニドレス姿見付けた写真帳

打った球石にこすられるはず

あまりにもゆつたりしすぎ友離れ

なるようになるさ毎日あるがまま

兵庫県 安達 厚

居てほしい人は出て生き熊がくる

十年は無理と五年の日記買う

洋食も箸で食べてる老い二人

おしゃべりはおんなじ事を二度三度

兵庫県 永井 かほる

なり年の柿にカラスもあきて来ぬ
大安におとらぬカブラ漬けてみる

もう冬至ほのかに伸びる日が嬉し

冬野菜だんだん味も満ちてくる

兵庫県 岩本 美緒子

カレンダー予定一年ありがとう

凍る葉に土は大根太らせる

表情みな違う千支犬墨彩画

買収合併コンピュータの悲鳴

和歌山市 土屋 起世子

貸し借りもなくて晦日のうまいそば

物指しの目盛り微妙にちがう嫁

結論は言わず仲よく日向ぼこ

近道を教えていない子育て記

和歌山市 坂部 かずみ

パソコンの都市の迷路に入りこむ

パソコンの森の深さを覗き込む

株価欄朝のコーヒー文句無し

すき焼きの残りものからうどん好き

海南市 小谷 小雪

年の瀬の無縁仏に花添える

手向ければお地藏さんも笑い出す

ほかほかとした新米に母の笑み

ありふれた女ですけど芯光る

田辺市 大峠 可動

支え合う居場所があなたにありますか

風に吹かれて落葉に気付くのか日本

天空の密偵だらう隙間風

みぞおちへさらさら流す砂時計

和歌山県 森下 よりこ

夕月と帰る静かな晩ひとり

車窓から見える夕陽も久し振り

歳月が私にくれた今日の無事

雑巾を縫うだけの針錆びている

和歌山県 村中 悦男

嫁入りのつもりで包み解く歳暮

セピア色写真が整理邪魔をする

ためす気はないがしゃべりを聞いてみる

神信じ笑顔で弁解よしておく

和歌山県 辻内 次根

曖昧な記憶で友が夢に出る

転ぶたび故事諺が寄って来る

踏み台にちゃっかり借りている事典

二十年何所を踏んでも軋みだす

鳥取市 横田 春名

笑ってる瞳の奥をのぞき込む

出なおしの出来る若さをいとおしむ

どっぷりと過した平和ひび割れる

掌に願いを込めて肩さすり

倉吉市 前田 三津子

空っぽの皿で話に花が咲く

悲しみのはき出し口を広くする

雪かきもつかつに出来ぬ境界線

風向きはどうあれ竿は出しておく

境港市 遠藤 那珂子

なごり雪とけない心燃やそうと

せつないね なごり残して別の道

八分目食べているけどダイエツト

油断して私の恋は終りつげ

境港市 中井 虎尾

多機能を使用するほど能がなし

時止まれただ今月を恋してる

今留守よテレビドラマの中に居る

勝ち組の友との距離は遠くなり

松江市 相見 柳歩

君と僕エデンの園の共犯者

悲しみに暮れてさなぎは蝶になる

心地良さラクダの背中だけでない

純情な人が得することもあり

松江市 松浦 登志子

階段に体調不良気づかれる

まんまるい団子つくれぬ淋しさよ

願い事余白ないほど書き入れる

球根を植える哲学貫いて

出雲市 川島 和歌子

松茸を買って財布が拗ねている
シナリオにのらぬ我家にあるドラマ

寝転んで六帖一間の小宇宙
急流にもまれて転ぶ丸い石

出雲市 加藤 スズコ

節約で生きる哲学主婦の知恵
残り火に語りつがねばいくさ傷
背を流すふれる嫁の手温かい

初詣で弾む賽銭冴える鈴

出雲市 荒木 英子

早足に隙間風から寒さ知り
ガラクタの草木も迷い春を待つ

生き延びて会話絶やさず助け合い
深夜便眠れぬままの仲間入り

安来市 原 煩惱児

涙よし笑顔またよし女子バレー
限界の努力で挑む女子マラソン

耐え忍ぶ努力重ねて夫婦愛
可愛さに何時も負けてるお爺ちゃん

真庭市 矢谷 富士野

書き終えた賀状つきつき来る喪中
不揃いのミカンそれぞれある個性

食べて寝て飲んでまた酔う松の内
七転び八起余生はもう止そう

なにわ柳壇今年の10秀

— 17年12月23日朝日新聞発表 — (太字は本社同人)

川柳塔社副理事長 西出 楓葉選

最優秀句

さて今日の命のほうび番茶飲む

秀句

いい話扱い方がむずかしい

卓袱台を囲んだ頃の父の場所

労りの言葉どこかで傷に触れ

平成の老い手探りで生きてゆく

着せないで着るまで待つてやる介護

わいわいがやがややって来た老後

閻魔さん薄目でこつち見てござる

子のニュース同じ背丈になって聞く

抱き合つてことばなかなか出て来ない

番傘川柳本社幹事長 田中 新一選

最優秀句

この胸に絞りたい空の青

秀句

越えられぬ煩惱を切る花鏡

うっとりとするものがある生きられる

おめでとうやる気をくれてありがとう

ぜいたくな愚痴だ鱈のはらを裂く

夕餉の香漂う路地の豊かな日

唇を噛んでつぶやく飯の種

父さんに勝つてしまった腕相撲

時間給いつの間にやら影がない

鮮やかに馬鹿を演じて生き残る

吉村久仁雄

芹澤 清

品川 俊郎

富田 保子

吉田あずき

鈴木 栄子

太田扶美代

吉岡 修

積 加代子

嶋澤喜八郎

森岡 滋

水谷 正子

川端 六点

越智 幸

久井 富子

前田 勇

中川 実

前原 正美

上原 昭彦

酒井 一壺

■句集紹介

『父の一言』

正畑半覚 著

小島 蘭 幸

先日、正畑半覚さんのお家にお邪魔したとき一枚の写真が目についた。それは出来たばかりの川柳句集『父の一言』を手にした半覚さんが奥さんと一緒にVサインをしている写真だった。撮影されたのはきつと息子さんだらうなあとと思うと胸が熱くなった。

正畑半覚さんがこのたび約六年の集大成として川柳句集『父の一言』を発売された。このひらにずしりと重い句集である。その重さは半覚さんの作句、川柳活動をうしろからドーンと支えておられる奥さん、息子さん、そして亡きご両親のものだと思った。

半覚さんは平成十二年三月に竹原川柳会へ入会されている。その何か月いや何年前であっただろうか、新聞に川柳を投句されているのを見て私は何度か川柳をお誘いしたことがある。その都度「入会するときは私の方から

お願いに伺いますのでその時まで……」

そうして入会されると堰を切ったように次々と佳句を発表されたのである。「川柳マガジン」をはじめ各地大会への投句数は凄いだらうなと想像するばかりである。

川柳句集『父の一言』を開くと最初の頁に父正三氏の写真、その名前の下に半覚とある。

雅号半覚は父正三氏の俳号からとっておられるのだ。父正三氏と同じ教師の道を全うされた半覚さん。タイトルを『父の一言』にされた熱い思いが伝わってくる。

作品は、目次にかけて、1番目の句から100番、200番、1000番目の句まで作句順に解説もつけておられる。『おわりに』の項に「私の一句に光を当ててくださった選者のみなさんの名を列記させてもらい深甚の感謝を捧げる」とあるように、竹原川柳会、広島県、県外と選をされた柳人を紹介されておられる。このこと一つとっても一句一句をいかに大切にされておられるかがよく分ると思う。正に半覚さんにとって川柳は自分史なのである。

半覚さんの作品はスケールの大きな佳句が多い。人間としてのふところが深いのだ。

天と地の元気もらって今日がある
大樹一本あの天辺を的にする

水たまり天はこんなに深いんだ
新世紀きみにレモンの香をおくる
富士山のような総理は出てこぬか

父正三氏と同じ教師の道を歩まれた半覚さん、その足跡は大きくて深い。

先生不登校したことありますか
家族を詠んだ作品の中から

痛かった父の拳にあつた芯
父の部屋風もお辞儀をして入る
一つずつ実らせてきた母の樹よ
おふくろによく似た馬のやさしい瞳
妻がもつやさしさという木洩れ日よ

日々好日妻に学んでいるばかり
たくましくなった息子の眼がまぶし

作品には一句または何句かまとめて丁寧な解説がしてあるのだが、次の三句の解説が実にいい。竹原市長に是非読んでいただきたいほどだ。そして二番目はあなたに！

朝日山指さす旅の夫婦連れ
大番頭がでんと居そうな旧商家
蝶々に案内されて昭蓮寺

愛染帖

新家 完司 選

西宮市 牧瀬富喜子

廉いのはなんでだろうと裏返す

(評) 店主の心意気と思いたいが……。世知辛い昨今、すっかり疑う癖がついてしまった。

大阪市 小谷 集一

神主の拍手ブロの音がする

(評) 凜々と響く拍手。何事においても、年期を重ねたプロの技は瞠目すべきものがある。

香芝市 大内 朝子

自分流生きているのにふと迷う

(評) 他人は他人と割り切っているつもりだが、こころが疲れたときにはふと迷う。

枚方市 海老池 洋

格安のわが家の強度気にかかる

(評) 震度五で倒壊の恐れがある物件を販売するとは……。凶悪犯罪に匹敵する犯罪だ。

吹田市 岩屋 美明

おばちゃんの後ろ疲れるバスの旅

(評) バスに乗ったときからハイテンションで喋りっぱなし。えらい所に座ったものだ。

八尾市 生嶋ますみ

忘れられぬ人が夢に現れぬ
正座して夫婦で話すこともない
甘かった老後のプランひきなおす

羽曳野市 森下 一知

御礼の言葉震える退院日
独り居を気遣う妻の握りめし

和歌山市 桜井 千秀

ハナハトから鉛筆舐める癖のまま
一日ぐらい金と無縁で暮らしたい

藤井寺市 鴨谷瑠美子

度の合わぬめがねでひのころ読む
好きな名を挙げると猫は妬みそう

尼崎市 春城武庫坊

いつもの顔でいつものように朝起きる
ボジョレヌーボー異国の秋をてのひらに

大阪市 板東 倫子

震度五で崩れるビルの街に住む
のどしの良い言葉出るコップ酒

弘前市 高瀬 霜石

パートナー忘れ上手な人がいい
託び状と一緒に届く蟹の足

和歌山市 喜田 准一

気忙しい人の隣でマイペース
逃げ足が早くて今日も生き残る

京都市 高島 啓子

ジーンズの穴は息抜きなんだらう
御主人の名前を知った喪の葉書

鳥取市 土橋はるお

干し柿をかすかに挿する風がある
好きな物ばかり食べると出世せぬ

羽曳野市 徳山みつこ

いま電話鳴るな天ぶら揚げている
漬物が五種も豊かな朝の膳

藤井寺市 太田扶美代

還暦へ抜げるものと畳むもの
老母の知恵息子の知恵もよく借りの

横浜市 金森 徳三

行動のにおさを笑う砂時計
国思い日本の野菜買っている

富田林市 池 森子

日も耳も秋で雑音など聞かず
乗り継ぎのドラマ三幕目を探す

大阪府 澤田 和重

新刊書の葉にしたくなる紅葉
笑うのもご馳走にして夕ごはん

シドニー 坂上りのり

お互いにあらぬ方見て飲むコーヒー
温暖化やっぱり温いほうが好き

鳥取市 録沢 風花

使わないうちに古くなった頭
食べて寝る平均寿命越えそうだ

和歌山市 楠見 章子

通行人のままで舞台を知りつくし

海南市 三宅 保州

西宮市 門谷たず子
せつかくのケイタイ昼寝ばかりして

和歌山市 木本 朱夏
小笠原流でアンパン食べました

倉吉市 松本よしえ
胡麻和えもわたしが播いた渡後草

堺市 加島 由一
親を泣かせ子に泣かされて生きている

寝屋川市 籠島 恵子
政治家が教えてくれる悪だくみ

松江市 三島 松丘
大掃除道具そろえて一休み

大阪市 前 たもつ
収穫なくとほとぼ帰る蟻もいる

八尾市 村上ミツ子
これからという時おなか痛くなる

唐津市 仁部 四郎
サンデーはパパの出番でカツカレー

米子市 政岡日枝子
明日遊ぶためにも今夜まず呑もう

弘前市 福士 慕隆情
危険だと思えばどれも危険牌

三田市 上垣キヨミ
家中のお供を連れて七五三

富田田市 大橋 鐘造
夕焼けが軋む大地を慰める

倉吉市 山中 康子
目と腰の据わり具合で人をよむ

和歌山市 古久保和子
壊れたら分解掃除した昭和

堺市 志田 千代
うっかりとしていた株があがつてる

橿原市 居谷真理子
悪いことした日亡父が来て座る

西宮市 西口いわゑ
泣いてる灯映笑する灯大都会

武蔵野市 亀井 円女
孫達に乙女チックと冷やかされ

美作市 小林 妻子
リストラの崖つぶちです師走です

鳥取市 武田 帆雀
十二月聖書一冊捨てがたし

岸和田市 雪本 珠子
挨拶でお隣さんの機嫌知る

米子市 中井 ゆき
自分史にやっぱり書けぬこともある

羽曳野市 吉川 寿美
なくさめの言葉ゆたかに他人さま

鳥取市 福西 茶子
やっこさ財布にぎった真珠婚

堺市 村上 玄也
行間に未練が少し読み取れる

松江市 津川 紫晃
来年を着せられている伸びざかり

大阪市 三浦千津子
手拍子に浮かれ上手な足の裏

和歌山県 辻内 次根
売り切れていると読みたくなる雑誌

尼崎市 春城 年代
鏡の中に昔のおとめぼろと出る

鳥取市 岸本 宏章
発電の風車のんびり金稼ぐ

東かがわ市 川崎ひかり
淋しくてケイタイ何時も握つてる

和歌山市 福本 英子
孤独にはなりたくなくて二位にいる

奈良市 矢野 良一
焼酎をワインに替えてクリスマス

大阪府 柴本ばつは
ドッコイショ言うてる同士仲が良い

高知県 桑名 孝雄
平均寿命延びてやれやれ髭を剃る

三田市 堀 正和
せめてもと演歌の恋に酔っている

浜松市 杉浦 えむ
劇場で目覚めたら戦場だった

豊中市 水野 黒兎
朝食のけじめ梅干ひとつ嚙む

鳥取市 夏目 一粹
ふるさとに帰ると僕の箸がある

京都市 都倉 求芽
毒花もやはり日差しも水も要る

米子市 白根 ふみ
風がなくても花は散りたい時にちる

三田市 北野 哲男
宿題が出来るか孫に試される

大阪市 川原 章久
退院の妻の後から荷物持ち

奈良市 乾 春雄
奈良の古寺宗派を問わぬバスツアー

熊本県 高野 宵草
あらためて空の広さよ鬪雲

和歌山市 たむらあきこ
仏像よ亡父はいずこにおわします

鳥取県 石谷美恵子
腹のたつ世間へボケてなど居れぬ

豊中市 安藤寿美子
徒手空拳奥の手なんかありません

大和郡山市 坊農 柳弘
虚と実をミックスにして飲む湯割り

松江府 松本知恵子
転んでもバネがあります五十坂

尼崎市 山田 耕治
解らぬ絵芳名帳に義理をたて

寝屋川市 富山レイ子
こめかみの青筋我慢した証し

鳥取市 土橋 螢
屋白骨狂わす強度設計図

大阪市 神夏磯典子
袖風呂で昔の肌を探してる

大阪市 井丸 昌紀
芯のないリングはきつとつままない

鳥取県 竹信 照彦
初雪に乗ってタイヤが滑りだす

砂川市 大橋 政良
さよならで女の電話まだつづく

羽曳野市 永田 章司
偶然を天の啓示と言う策士

八王子市 播本 充子
真似てまねてマネて本物を超える

寝屋川市 北田ただし
満月に第九を歌う黄水仙

倉敷市 撰 喜子
喜寿迎え今年もおせち我が家流

鳥取県 佐伯 やえ
年金ぐらし歩幅をかえるのがこわい

堺市 奥 時雄
返済は大穴当てるから待つて

唐津市 岩崎 實
はじめての杖にたよった敵島

米子市 青戸 田鶴
芸のない犬で私が言いわけを

海南市 小谷 小雪
孫帰省いのち華やぐ年の暮れ

香川県 中塚寿々女
割喜着つける背中が丸くなり

唐津市 市丸 晴翠
残業の抜け殻癒す縄暖簾

吹田市 太田 昭
年賀状敵も味方もなかりけり

宇部市 平田 実男
妻は僕嫁は息子の棚卸し

尼崎市 田辺 鹿太
赤ちゃんがにつこり笑うから笑う

尼崎市 長浜 美籠
体調を挽回させた自然食

四條畷市 吉岡 修
鳥の目から見れば小さな縄張りだ

堺市 和田つづや
捨てられもせず亡き母の黄楊の櫛

鳥取県 谷口 次男
鍋囲む無言の行の顔になる

弘前市 宮崎ヒサ子
明け方の夢は正夢徒姉死す

和歌山市 榎原 公子
掌中に生んだ憶えない玉子

大阪市 岩崎 公誠
水を買ひ空気を買って都市砂漠

芦屋市 黒田 能子
手の込んだ料理普段の埋め合わせ

八尾市 吉村 一風
半年も知らぬ訃報を言うてくる

札幌市 三浦 強一
のし袋妻の意見を入れて行く

三田市 石原 歳子
厚着して暮らしています灯油高

鳥取市 田村 邦昭
しっかりと老いを見つめて老いを待つ

誹風柳多留一篇研究 6

稿者もついこの間まで、孫にこの句の通り。

子ほんのう手のこつぼうを摺て抱 傍三二

清 贊。

上下のまゝ、受テ取ル子ほんのふ

明八松 2

上下のひざへうけ取子ほんのふ 安五札 3

などは、侍の勤め帰りと子供句。子煩惱を詠んだ句は意外に多い。

36 飯たきを鴨に仕立る忝の内 桜木連吉舟

山田 鴨は黒鴨つまり従僕。正月の年礼には、「町人と雖も有徳な族は麻袴を着して脇差を佩び、年玉を入れたる挟箱などを担がせた供を連れた」(「川柳年中行事」)。そのお供に飯炊きを連れて行くというのだが、仕立りを守るのも大変なのである。

むく鳥を鴨に仕立る松の内

五六三

山田 贊。人を雇う余力がないのに見栄を張る。

清 年礼には供を伴うのが常識だったから、見栄を張るといふのではなく、礎稿の「仕立りを守る」という律儀さが面白いというのであろう。

34 夫婦して女郎を買ってはかゝ行

柳水連石斧

山田 この句も妙な句である。何が「はかが行き」だか分からないが、おそらく分散であろう。夫婦して女郎買いをすれば、たちどころに破産してしまふ。しかし夫婦して女郎を買うとは、普通は考え難い。ただ、

よし原へ夫婦して行つふれまへ 三〇〇

という句があるから、必ずしも皆無であるとは云えないかもしれない。しかしこれは、夫婦で吉原へ行つたというだけで、どら息子の後始末なども考えられる。また、新内「若木仇名草」で、蘭蝶の女房が客として登樓する場面があるが、これは夫の敵娼の此糸に縁

山田 昭夫 · 増田 忠彦
山口 由昭 · 小栗 清吾
伊吹 和男 ·
清 博美

切りを頼むのが目的だから、単なる遊びのためではない。だから、この句も、前の句同様、

「成る程ねえ、そりやそうだ」くらいに取っておけば良いのかも知れない。

山口 破産前とすれば例句は女房が吉原に身を沈めるケースとも考えられるが、肝心の主題句は不明。

清 破産を早めるのであろう。前の句と同様、「成る程ねえ、そりやそうだ」と理解すればいいのではなからうか。それだけの句かと思ふ。

35 てを打てお出〜と子ほんのふ

柳水連玉簾

山田 そのままの句で、説明もいるまい。礎

37 人先へちやん〜と濟△下戸の礼

山田 年始の挨拶廻り。酒を飲まない下戸は、挨拶のみで短くて済む。だから酒など飲んでいる人よりも先に「ちゃんちゃん」と「つまり」「きちんきちん」と「日国」済ますことにな

る。

下戸の礼かたつばしからた、きつつけ 五40

清 賛。時に餅網に掛かることもあるが……。

小生などはこの典型。

上下で旅程あるく下戸の礼 安二仁3

下戸の礼四谷赤坂かうじ町 安四信2

下戸の礼春のよふらハおもわれず 安六礼1

下戸の礼時々あみにかゝるなり 安四鶴3

餅を振る舞われる

38 御かいこにくるまつて居て富を付々

桜木連計志

山田 「御蚕にくるまつて居て」は御蚕織おかいこむの

ことで、「絹物の衣服ばかり身にまつて居ること。何不自由なく育てること。または、ぜいたくな生活をいう」(『日本国語大辞典』)。そんな裕福な人でも富札を買う。全く欲に限りがない。「江戸っ子の風上にも置けね

え奴」という、「ぼろにくるまつて居て」ばやいている奴の声が聞こえるようだ。

富は家を潤すものと儒者も買イ 八三五六

山口 賛。強欲。

清 賛。金は幾らあっても邪魔にはならぬものらしい。金持ちほど金銭に執着するようである。

39 もろ白髪を困レのふはたらき 鶴亀連松霍

山田 諸白髪は「②総白髪」。囲われは「めかけ。かこわれめ」。不働きは「働きのないこと。役に立つ行動ができないこと。また、そのさま」(『日国』)。

お妾の実態は、

ぬりたつて仕廻ふとめかけ用ハなし

安九礼1

御帰りの声てめかけハヤ、うこき

明七仁2

とこの上御妾神のごとくなり 安礼1
というものだから、一般人としたらおよそ「不働き」。そんな生活を過ごしている妾だから、仮に引退しても習性で、総白髪になるまで「不働き」となるのは必定。

なお、「囲われ」(『日国』)は、川柳では僧

侶の外妾と解するのが専らだが、それは江戸川柳にはそのように多く詠まれているだけで、「囲われ」即「僧侶の外妾」となるわけではないと思う。

主題句が「僧侶の外妾」として別解が得られるのなら別だが、「妾一般」の証拠の一句だと考えられるが如何であろうか。ご意見を賜りたい。

増田 よくわからない句です。跡継ぎを生む役目も果たさぬままに、ともあれ共白髪まで妾の位をつづけたというものか。誰か歴史にいませんか。

山口 増田説のように諸白髪は共白髪ととりたい。本妻は共白髪になるまで程々に働くのに、妾は共白髪になつてもものらくら。「囲われ」僧侶の妾説は一般の妾の場合もあつたのではないか。主題句はどちらでもよいのではないか。

小栗 諸白髪は①夫婦がそろつて白髪になるまで長生きすること(『日』)。山口説のようなことと思う。

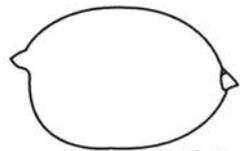
清 ちよつと分らないのは、白髪になるまで、妾奉公をつとめることが出来たかどうかだ。

一般の句で、詠史句ではないように思う。

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「油断」 仁部 四郎 選

あたたかい嘘も葉に聞いておく
甘言が油断をつれて攻めて来る
ママチャリの買物籠にある油断
うちの子に限ってなど高いびき
この話油断も隙もないですね
友と酌む油断のできる酒が好き
酒の出る席で油断はなりません
下腹のあたりに油断溜まつてる
天ぶらにやっぱりあった食い合わせ
バイキング真つ正直な体重計
足音も油断だらけの父の酒
母だけはいつも達者と思つてた
布袋様のお腹は油断かも知れぬ
油断から生まれたような恋でした
信じてるさかい化粧はせえへんの
お互いがあなたまかせの二人旅

鳥取市	福田	登美
宝塚市	丸山	孔一
高槻市	左右田泰雄	
羽曳野市	森下	一知
和歌山市	宮本三喜夫	
大阪府	初山	隆盛
東かがわ市	川崎ひかり	
大阪市	中井	萌
大阪市	川端	一步
寝屋川市	平松かずみ	
弘前市	相馬	銀波
藤井寺市	鈴木いさお	
大洲市	中居	善信
松江市	松浦登志子	
京都府	稲葉	冬楽
堺市	志田	千代

「油断」 藤田 泰子 選

うちの子に限ってなど高いびき
年金で悠悠自適のはずでした
検査した数字を信じ飲んで
二センチの段差を悔いているギブス
切り札の期限が切れていたなんて
凡人はリングの赤に油断する
白旗を持つているからつい油断
愛されていると信じていた積木
信号の青を信じたばっかりに
油断していたら小雪が舞いだした
布袋様のお腹は油断かも知れぬ
それからのウサギは昼寝などしない
雨上がり川の水位を甘くみる
まえ籠の油断は百も知りながら
飛車角を落とし見事に孫に負け
締め切りへまだ明日がある明日がある

羽曳野市	森下	一知
三田市	堀	正和
川西市	西内	朋月
羽曳野市	徳山みつこ	
池田市	上嶋	幸雀
尼崎市	田辺	鹿太
大和高田市	鍛原	千里
大山市	金子美千代	
松原市	玉置	重人
倉吉市	最上	和枝
大洲市	中居	善信
東京都	長谷川康子	
弘前市	福士	慕情
大阪市	津守	柳伸
八尾市	田邊	浩三
和歌山市	福本	英子

一寸した油断が顔に書いてある
 慢心のかすり傷から膿が出る
 握手した数に油断をしてしまふ
 ひとり言孫が返事を聞きに来る
 うっかりと背広の胸に花名刺
 焦げ癖のついたお鍋でまた焦がす
 ささくれた指のまるさに油断する
 昔取った杵柄などと軽く言い
 少しぐらいは油断をせねば生きたらぬ
 全部言う秘密は守る約束で
 二センチの段差を悔いているギブス
 ひったくり油断の方程式を解く
 具沢山の愛に油断をしてしまふ
 誰にでもあるさウサギの油断なら
 油断して上座で欠伸してしまふ
 油断しておくれを取った棒グラフ
 信じようあとで油断と言われても
 三点の驕りへ満塁ホームラン
 母さんの勘はずこいぞ油断すな

秀句

大阪市 伏見 雅明
 弘前市 高橋 岳水
 松原市 玉置 重人
 今治市 渡邊伊津志
 唐津市 市丸 晴翠
 和歌山市 福本 英子
 八尾市 宮西 弥生
 西宮市 秋元 てる
 米子市 野坂 なみ
 西宮市 片山 忠
 羽曳野市 徳山みつこ
 枚方市 丹後屋 肇
 寝屋川市 籠島 恵子
 大洲市 花岡 順子
 東かがわ市 池内かおり
 藤井寺市 若松 雅枝
 橿原市 居谷真理子
 佐倉市 岡井やすお
 今治市 塩路よしみ
 堺市 加島 由一
 堺市 石堂 潤子
 鳥取市 田村 邦昭

軸吟

中流に生きる油断の暇はない

大国の油断を衝いたハリケーン
 ボケットに油断が一個マツチ箱
 ときどきは銀行口座確かめる
 母だけはいつも達者と思つてた
 うっかりと干支の話をしてしまひ
 専用車乗つたとたんに眠くなる
 重箱の数の子だけが消えている
 無一文油断の出来るすばらしさ
 油断してたら熟年離婚しますわよ
 ドクターの死因はやはりガンでした
 ワクチンを打つたからとて風邪は引く
 年金を半分こして妻は去り
 知らぬ間に妻を抱いてた不発弾
 長生きのDNAを持つ油断
 冬用のタイヤに油断するなかれ
 一度目は油断二度目は実力差
 香水はホワイトローズ甘い罨
 この人に女が出来るはずがない
 油断していたら戦争始まるぞ

秀句

岐阜市 平野あずま
 鳥取市 鈴木 一弘
 吹田市 早泉 早人
 藤井寺市 鈴木いさお
 尼崎市 山田 耕治
 寝屋川市 太田とし子
 和歌山市 坂部かずみ
 羽曳野市 酒井 一壺
 東大阪市 北村 賢子
 愛知県 早川 盛夫
 三田市 久保田千代
 吹田市 穴吹 尚士
 唐津市 樋口 輝夫
 神戸市 田中 章子
 鳥取市 土橋 螢
 堺市 加島 由一
 東京都 岸野あやめ
 豊中市 安藤寿美子
 堺市 大久保伸子
 香芝市 大内 朝子
 堺市 和田つづや
 弘前市 高瀬 霜石

軸吟

飼い犬に腕を噛まれた事がある

天命の未知へ笑っているいのち
 油断しています信じていますから
 年金の手前で止まる観覧車

夜 寒

和田つづや選



寒い夜は電気毛布を一目盛り
いい人と逢えば夜寒も溶けてゆく
欠伸する夜寒方程式解けず
物業を温め直す寒い夜
将来の展望のない夜が寒い
湯タンポのような夫が有難い
夜寒予想して着込んでる厚手シャツ
夜寒には母のお鍋とちゃんちゃんこ
缶コーヒー抱いて夜寒の道帰る
かあさんの荷物ほどいている夜寒
残業へ追討ちかけてくる夜寒
冷気澄んで星がひとしお美しい
燃えるものもすこしほしい寒き夜
ほろ酔いの夜寒に月がついてくる
ほかほかのおでん夜寒にみな売れる
子の事件ばかり続いている夜寒
覚えないことせめられている夜寒
独り寝の夜寒に注ぐアルコール
拍子木の音が夜寒をかり立てる
居酒屋へ夜寒の足が吸い込まれ
夜寒には早寝にまざるものはない
夜寒だと妻にカイロを持たされる

狭 彦
松 丘
雄 々
末 々
あやめ
蜂 朗
玄 也
典 子
康 子
康 子
英 子
茂 代
ばっは
時 雄
公 誠
セツ子
正 雄
富 子
妻 子
知 子
千 代
風 代

居酒屋が関所に見えてくる夜寒
ひしひしと夜寒足から這い上がる
おもいきり泣いてはつこりする夜寒
ボカボカの一日だった日の夜寒
梁ちむ音の聞こえてくる夜寒
喪中欠礼 夜寒に拍車かけてくる
孫の手で独り背中を搔く夜寒
肩冷えてそっと蒲団を引き上げる
熱燗を多めにしたくなる夜寒
スパーの夜寒にレジを一つ閉め
仮設きつと肋の軋みほどの冷え
頁繰る指から忍び込む夜寒
休肝日夜寒に意志を揺さぶられ
老夫婦一部屋点す夜の寒さ
血迷うた夫婦らぬ夜の寒

住 四島を望む夜空が凍ててくる
朱に染まる余白残している夜寒
津軽夜寒りんごたわわになりけり
暖房を二度上げて寝ることにする
手の届くところに何でもある夜寒

人 火を足して今夜は賀状書き上げる
団欒に湯のみ茶碗を抱く夜寒

天 だいご煮をハフハフと食う夜寒
軸 裏切りを隠し通している夜寒

強 一
庸 佑
弥 生
悦 子
九 好
深 雪
徑 子
和 重
四 郎
扶美代
岳 水
寅次郎
水 笑
とし子

重 人
柳 弘
順 風
螢 和
美代子
英 旺

呼 吸

清川 玲子選



一呼吸置いて計報の低い声
もしやもしや母の寝息を確かめる
紅葉の見事にふっと息止まる
人工呼吸いつかのためにABC
呼吸困難愛が壊れてゆく予感
つまずきを重ねた呼吸美しい
初めてのババも一緒にヒーヒー
嘘のない自分に戻す一呼吸
酒蔵で米の呼吸を聴く杜氏
最後まで自分の意志でしたい息
大根もボクも朝日へ深呼吸
さあ出番ひとつ大きな深呼吸
まだ呼吸している生きてるんだね
仏像が静かに呼吸してる寺
ふるりの空気を腹一杯入れてくる
醒醐味は一瞬呼吸合う土俵
オムレツをひっくり返す呼吸の間
狐巻きの街路樹呼吸苦しく
ひっそりと呼吸を合わす竿の先
一瞬へ呼吸を合わす竿の先
直筆の賀状に友の息遣い
皮膚呼吸できないほどの厚化粧

公 誠
千 代
英 子
康 子
慕 情
弥 生
碧 生
盛 夫
セツ子
理 恵
みつこ
ひかり
螢 和
美 明
妻 子
あやめ
あすき
一 粋
典 子
裕 昌
恭 昌
英 旺

ひと呼吸置けぬゆとりのない若さ二十五時サンタの息が酒くさい
深呼吸今から妻の愚痴を聞く
博物館埴輪の呼吸を聞く夜警
自画像に呼吸つたえる筆を持つ
懐に合せて呼吸整える

息継ぎの下手な人魚のスイミング
草花の呼吸習った暮参の日
秒刻む呼吸している乾電池
陶工と土の呼吸が響き合う
歩を捨てる呼吸をちゃんと知っている
遠い日よ川の字の夜の息遣い
深呼吸してわたくしを取りもどす
弱点を晒すと楽になる呼吸
万歩計峻烈の朝深呼吸

人を恋う夜の呼吸は熱くなる
ため息のたびに幸せ一つ逃げ
裂帛の呼吸に合わず寒稽古
こころ一番ウサギも亀も眼鏡拭く
わたしにも真つ赤に燃えた日の呼吸

愛燦燦花の呼吸を聞いている
銀杏が過呼吸してる茶碗蒸し
呱呱の声呼吸はじめのブローグ
呼吸止めて次の言葉を待っている

准一
美代子
かおり
晴翠
雄々
修

俣子
四郎
徳三
茂代
善信
ヒサ子
扶美代
玄也
ルイ子

岳水
美千代
愛論
霜石
朝子

充子
登美代
樋口輝夫

じれる

高島 啓子選



デジタルに追われいら立つて古いふたり
片思い見かね手を貸すキュービッド
じれるたい心を捨てた日なたほこ
能力にじれるわが子がに詫びている
当確が選挙事務所に届かない
五分と五分じれたら負けと肚をすえ
波すこし引くまでじらす遺産分け
もう少し急いで欲しい砂時計
ATMじれる視線が背に刺さる
ままならぬ足にじれる旅プラン
点滴が働き蜂にもどかしい
じらすだけじらせて小さいフルムーン
踏切りの故障に遭った出前持ち
ポケットでじれる心を握り締め
折角のチャンスに三振ばかりする

まだこないじれて切ない救急車
我慢がまん自慢話がまだ続く
新幹線握手言葉が届かない
早よ行かな死んでしまおうと時代劇
みのもんたじらす目元にみんな湧き
写経してじれる心が溶けてゆく
私に似てる児だからじれたい
とてもいい若者なのに職がない
いらいらをそつと抑える年の功
じれたさ返上しますプロポーズ
あれこれと聞いて触って買わぬ客(奥)
菌痒くて見ちゃいられないジヤイアンツ
昼飯が出そうで出ないじれたい
伝言板じらされた文字躍ってる
酒の席下戸は何度も腕時計
金利ゼロ続く無策がじれたい
わたしの瞳見てもわからぬじれたい
レンジでは九時間煮ると言うカレー
少し焦らして貴方の愛を確かめる
じれるなと月が言うので待ってみる
ゆっくりめの孫を我慢の目でみつめ
ベテランのヘルパーじれず助言だけ

三代子
徳三
勝視
哲男
一風
方子
蜂朗
霜石
洋介
ふりこ
五月
盛夫
一壺
隆盛
藤朗
昌鼓
たず子
公誠
柳弘
ヒサ子
シマ子
猿杓

切り口とあるのに開かぬ菓子袋
引き止めたお客へ寿しがまだ来ない
残ってる時間思うと焦りだす
青空が見えているじれることも無い
沈黙という空間に焦れている

あせらないきつと出番はやってくる
じれるのはよそう相手の思う壺
モザイクの向こうに隠された事実
自宅待機未だに何の沙汰もない

(編) 洋
弥生
孝一
英旺
理恵
充子
恭昌
四郎
雅明
重人

哲代
あずま
ミツ子
雄々
扶美代

朝子

朝子

初歩教室

題一 プレゼント

三宅保州

作句の不心得十か条

私なりの「作句の心得十か条」というのを平成十五年一月号の当欄に掲げましたが、その反面教師とも言ふべき作句のタブーと思うことを「作句の不心得十か条」として掲げますので、少しでも参考になれば幸甚です。

- 一 盗作や真似をした句を作る
 - 二 誤字・脱字のある句を作る
 - 三 字余り・字足らずの句を作る
 - 四 説明句・報告句を作る
 - 五 あれもこれもと詰め込みすぎた句を作る
 - 六 ひとりよがりの句を作る
 - 七 差別、中傷・誹謗の句を作る
 - 八 推こうはほとんどしない
 - 九 投句締切日、句会日が迫ってから作句する
 - 十 投・出句数しか作句しない
- 番外 当たり前の句を作る

【同想句】

「クリスマス・サンタクロースを詠んだ句」

原 サンタのプレゼント孫は信じてる 利子

添 サンタ信じる孫へ今年もプレゼント

原 サンタさん私の家に来て欲しい 萌

添 私の家にも来てねサンタさん

原 プレゼントの予約に暮れるサンタさん 雅明

添 プレゼント今もサンタを待つている 柳歩

原 クリスマス急ぎ立てられて玩具店 はじむ

添 おもちや屋で下見しておくババサンタ 満子

原 サンタにも都合があるよプレゼント 道子

添 クリスマス町もにぎわうプレゼント 稔

原 クリスマス自分に少しプレゼント 真一

添 子の寝息待つてサンタに早変わり 徑子

原 クリスマス欲しいリストが貼つてある 章司

添 さり気なく何が欲しいか聞くサンタ 幸

原 ○印三句は佳句です。

添 「バレンタインデーのチョコレート」を詠んだ句」

原 義理チョコを妻と嫁から二個貰う 好

添 義理チョコは妻と嫁からだけくれる

原 倍返し狙つて贈るチョコレート 早人

添 チョコよりも手の温もりにときめいて

原 義理チョコが本気と思われる不覚 幸雀

添 ○義理薄れ義理チョコだけが生き残り 弘子

穿ちと風刺が利いています。

「孫が来るというプレゼントを詠んだ句」

原 孫が来て心なごますプレゼント 洋子

添 孫が来る何にも勝るプレゼント

原 孫が来る何よりもいいプレゼント 順子

【添削・批評句】

原 あれこれと迷う買物又今度 開子

添 「プレゼント」の題と分かる句に

添 何回も迷つて買えぬ贈り物

原 たのしみになっている孫にプレゼント 美恵子

原 有難う胸あつくなるプレゼント 智加恵

添 一句とも「それはよかつたですね」の報告

原 兄行つた恩賜の煙草と引き代えに 像山

添 中八は避けましょう。

添 逝つた兄恩賜の煙草だけ遺し

原 プレゼントこの予算では孫寄らず 寿々女

添 「寄らず」では淋しすぎませんか

添 やり繰りをしてでも孫へプレゼント

原 温泉に家事を任せてひとり旅 かずみ

添 「温泉に家事を任せる」意になっています。

添 家事忘れいで湯巡りのひとり旅

原 プレゼントビデオ絵本か孫の顔 賢山

添 あれこれと詰め込みすぎた句になりました。

添 孫の顔思い浮かべてプレゼント

原 祝金婚5才の孫は名のみかな 冷子

添 かな等の切れ字は必死性のあるときのみ

添 祝金婚ちさい孫にもチューをさ

原だしきつた嬉なみだのプレゼント タカ子
 添プレゼントに嬉し涙が止まらない
 原ポスト入る何にも優るプレゼント 燭節 子
 添入選の知らせ嬉しいプレゼント
 原素晴らしい朝だ最高プレゼント 清
 添清々しい朝を贈ってくれる神
 原プレゼント礼の握手で愛いよいよ 松風
 添プレゼントのお礼は愛を込め握手
 原成人式プレゼント着て自立ち過ぎ ミヨノ
 添成人式贈った晴れ着よく自立ち
 原CMが子らそそのかす年の暮れ 藤朗
 添コマリシャルのあれがほしいとねだる孫
 原贈りもの干柿作り送る例 こずえ
 添古里から今年もどく吊し柿
 原老健の親へ好物うれし泣き 孝明
 添施設の親へ今日も好物持つて行く
 原ばあちゃんへお手伝券届けられ 千代子
 添孫からのお手伝い券届けられ
 原何よりも気をつけてねとプレゼント 雅代
 添気をつけてというひと言が贈り物
 原安くても心のこもるプレゼント 忠子
 添安くても心を込めて贈りたい
 原プレゼント無事の便りがいよいよ みち代
 添無事という便り嬉しいプレゼント
 原父母のプレゼントからある命 映子
 添両親が贈ってくれたこの命

原祝電にたんと気持のプレゼント 俊子
 添祝電でせめて気持ちを贈りたい
 【少し工夫すれば佳くなる句】
 原プレゼント誰か松茸くれないか つよし
 「プレゼント」と「くれないか」が重複。
 添国産の松茸誰かくれないか
 原プレゼントしたいされたいい好きな人 サキ子
 少し演歌調、標語調なのが気になります。
 原錆びてゆく婚約指輪今小指 乃りこ
 添結婚指輪も今は小指で錆びている
 原迷い迷って去年と同じ歳暮品 幸
 添お歳暮に迷い今年も同じ物
 原プレゼント八割がたは裏がある たん吉
 添魂胆が見え隠れるプレゼント
 原贈り物開けて眺めて値踏みする 亜希子
 添贈り物つい値踏みしてしまう
 原あける迄が何か楽しむプレゼント 綾乃
 添開けるまで期待膨らむプレゼント
 原快晴がなによりうれしプレゼント 千華
 添快晴が何より初春のプレゼント
 原丹精の野菜が貰う地の恵み 百豆子
 添丹精の野菜がくれる地の恵み
 原プレゼント時に自分にドンと買う のり子
 添思い切つて自分にも買うプレゼント
 【佳句】
 異常なし無骨な医者プレゼント 寅次郎

手作りにあなたが好きを忍ばせる 和子
 プレゼントお金でいいと言えませず 時雄
 ネットタイに思いを結びプレゼント 那珂子
 プレゼント選ぶ楽しみもらつてる キヨミ
 お尻バシツ大事な子へのプレゼント 益子
 氏神の大吉孫へプレゼント みね代
 曾孫からはつべにキスの誕生日 燭節 子
 酒と蟹提げてひよっこり来る倅 昇
 天国の母から夢のプレゼント 孔一
 帰省するだけで親へのプレゼント 好
 驚いた妻を見たくてバラを買う エンゲージリングくちつた後遺症 正和
 モルモットになれと試食のプレゼント 起世子
 【今月の推せん句】
 あなたさえ居れば何にも要りません 末吉
 神さまが贈ってくれた夫です イセ
 これだけのおのろけを詠めるお二人に乾杯！
 プレゼント渡しそびれて持ち続け 水昇
 買ってから相手を捜すプレゼント 浩三
 今年こそマフラーあげる人探す 満子
 三句ともこれぞ川柳のペーソスとユーモア。
 タンポポの旅立ち風のプレゼント 信子
 発想が非凡で表現にメルヘンがある佳句。
 【私の句】
 難民に思いの丈を贈りたい
 皆様の善意流れている輸血

秀句鑑賞

同人吟 吉岡 修

—1月号から

啄啄同時という言葉があります。

雛が卵の中から出ようと殻を突っついているのを啖といひ、母鳥がそれと気づいてちょっと外から突っついて助けてやるのを啄といひうそです。親鳥と雛のまことに微妙な呼吸の見事さに唯々感心させられます。

会社勤めのころお客様との間に、また上司や部下との間にこんな気持ちの察し合いがあれば素晴らしいと思ひ心掛けていました。

句の鑑賞をさせていただくのに、句の心や叫びを「啖」とするならば、うまく「啄」でさるか少々心もたない思ひがしますが、とにかくやってみると一九八一句届いて、無我夢中の得難い数日でした。

結局、「呼吸」の合った句はたくさんありましたが二十句、遠慮もなくよそ様の冷蔵庫の中を覗かせて貰ったような気持ちで、鑑賞させていただきました。

犠牲になつていただいた作者には深くお詫び申し上げます。

果して「啄」たり得たでしょうか。

輝いてました熟女のフラダンス

長 浜 美 籠

第十一回川柳塔まつりの懇親宴。女性会員のフラダンスがあつた。いつも月子さんお一人なの当日は五人の熟女のご登場で大いに湧いた。

私達の心胆に響くいい句を作られるエネルギーなのだろう。(幸い私は遠い席だったのでもっと美しく拝見していました)

茶柱をひとりにつこり覗いてる

吉 村 一 風

努力して努力して成功した人生。自信に満ちた日ふと出会つた茶柱。こんな至福なひとときを味わえる余裕、安らぎを感じます。

笠智衆佇つただけで笠智衆

初 山 隆 盛

あの独特の語り、顔、皆、いっさいの味なまさに佇つただけで、他の誰でもない彼。

この句だけでも笠智衆を彷彿します。

隆盛節に唸つてしまいました。

からからと笑う私の蹴つた石

伊 藤 玲 子

高笑いされて腹立てているのか、なんとなくホツとしているのか実は微妙なことがあります。蹴られた経験から申しますと、からから笑うのはそれで終れるとき。深刻なのはそれから始まる苦しみです。打ちひしがれている私の方を、もう一度向いて欲しいです。

大笑いしたら尻尾が出てしまい

倉 益 一 瑤

笑つちゃいました。正直でいいですね。

二本目の尻尾を持つている人も全部出してしまいそうなの大笑いがなによりでした。

肩籠の中で推敲まだつづく

三 島 滋 丘

これで決めたと思つて清記する時、句作りの四苦八苦が吹つとんで一番楽しい時のように思いますが、もつと粘り強く推敲しなければと反省しました。

善人の集まり不味い酒になる

福 士 慕 情

むつつり、ちびちび、ひっそり飲んでるなんていやですね。ほんとの善人ならわつと吠えたり悪口いうたり、もつと正直でしょう。悪人ばかり密議している雰囲気です。いやだいやだの思ひがわかります。

この身まだジャズに陶醉したりして

鴨谷 瑠美子

最近、ニーナ・シモンのCDを六枚、たっぷり聴いて痺れました。私の歳でも同じ。すつきりして作句しようかと思えます。

独り者街の灯りに誘われる

雪本 珠子

これはネオンまじりの灯りかと読めましたが、名曲「町の灯り」のように、ちらちらと囁く灯りを、熟年が焦れている、そんな情景におきかえて拝誦しました。

バス停へ走らない日が遂に来た

野下 之男

当時を思い出させてくれました。おかげで川柳に出会えて今度は締切りに追われたいします。一生繰り返したと思います。

時々には割り勘負けの酒も飲む

森本 弘風

だいたい割り勘負けしないのが飲み助の根性です。飲み足りなかった分は大いに騒いだりして、楽しんでる飲み助を思います。

退屈でコタツの妻の手を握る

加島 由一

くすつと笑いました。「なにすんの」と言われたかも知れません。夜のひととき、時間の止まったような暖かさを感じました。

リモコンを僕の背中に向けている

北野 哲男

僕などと居直つてみてもこれは夫婦の絵。わかっているのついているらしい男のやさしさがいいですね。

ほほえましい暮しを見せていただきました。

世界中の天気予報をなにげなく

高田 美代子

テレビで見るアレです。これ必要な人いるのかと思いますが、今や世界に旅行し、製品も出る、親戚もできたなど、世界をネットに活躍している日本の当然のサービスかも知れんと、私もさりげなく見えています。

人間の驕り自然が屁でとぼす

柿花 和夫

屁で飛ばされてはたまりませんが、まだ自然の手心を感じます。「もったいない」を浸透したいものです。それにしても温暖化防止の国際決議に参加しない大国の身勝手には一発かましてやりたいものです。

フルムーンだけは一緒に出かけよう

江見 見清

ちがう趣味に追われて別々に出かけることばかりの熟年夫婦。旅行の話は出るのですが、なかなか実現出来ぬ我が家と同じやな、と安心させていただきました。

勿体ない勿体ないに陽が当たる

神保 坊太郎

日本で死語になりかけている「もったいない」が(消費削減、再利用、資源再利用、修理)の4Rを言い表わすのに一番ふさわしいと、ケニアのマータイ女史がこれを世界標準語にしようと呼びかけています。

死語にしたいくない言葉です。

胡弓の音あれは芒のすすり泣き

黒田 茂代

なるほどそう言えば、俺は河原の枯れ芒、同じお前も枯れ芒。森繁節の船頭小唄にそっくりだと、カラオケ派として賛成。

割り箸で愚痴のひとつを裏返す

松原 寿子

焼いて食べてしまえばなんてことない。生椎茸の網焼きのように、かあるくひっくり返した頃には胸のつかえもすつきり。

なるほど、いいヒントをいただきました。

ああ春闘死語の谷間を彷徨いぬ

川端 一步

ひところ「春闘」は死語にすべきだと思っていたことがあります。

組合と会社、闘つてもないのに始めから春闘なんて言うなど。

この句の通りなら我が意を得た思いです。

—水煙抄

秀句鑑賞

—1月号から

江見見清

春風に笑いころげるわたほこり

前田 三津子

窓を開け放ち春の陽の中。わたほこりの一つひとつが子供になり、あなたも一緒に笑いころげて踊っています。あなたはもうメルヘンの世界。楽しく優しく癒されます。

秋ナスが嫁から届く老いの膳

高山 清子

秋ナスにまつわる譬えをお嫁さんはご存知ないのでしようが、美味しいと送って下さりたいお嫁さん。素直に感謝しながらも若き日を思い出しての複雑な感慨。

晩秋に女はひとつ歳をとる

森田 明子

晩秋は春から秋までの決算を女に迫る時期です。一つの決心や転機は女をまた女に成長させる。今年はいい歳がとれました。他人には言えないけれど。

拾円をひろい神様までとどけ

向山 治延

拾った拾円の良い処分方法を知りました。私の賽銭を出すのも忘れないようにします。見たいのか見たくないのか計報欄

野口 忠

わが身の元気に安心する嫌な自分と、故人とあまりにも近い自分の年齢を思う、複雑な気持ち計報を見ることを躊躇させる。

右向けに左を向いた頃の檄

尾崎 黄紅

体制にも道徳慣習にも反抗した、若い頃の気概は今でも持っているのに、今は頭で思うだけ。時流にうまく乗って泳いできた自分への忸怩たる思いは、真剣に生きた者ほど強い。

今日もまた仮面をつけて家を出る

小川 良吉

人それぞれに生身を曝せる場所は少ない。TPOに合わせた仮面は必需品だ。うまく出た仮面は自分も他人も幸せに出来る。

自分史の仕上げは妻の手を借りて

羽田野 洋介

自分史に着手して、折々の妻の気持ちに全く無頓着だった自分に気付く。せめてここでは妻から見た自分への関わりを正確にして妻に感謝したい。心温まる静かな愛の句。

放つとけば息子は何も言つて来ず

白井 二英

出世して忙しくて連絡が出来ないならそれでいいんだと親は勝手に安心しながらも、それにしても、親の心配は絶えない。

神仏の目が怖いとは善人か

山口 千代子

善人の中にも神仏を畏れぬ者もいる。善人の定義も神仏のお許しの範囲もはっきりしない。問われているように永遠の課題でしょう。

秋空に男の嘘を見抜かれる

上嶋 幸雀

男の嘘は他愛なくてすぐバレる。ましてや澄みきった秋空にかかると口惜しいがひとたまりもない。ひよつとして変りやすい女心にさへ嘘がバレってしまったのかも。

ココア飲むおとこ何だか優しそう

田中 章子

言われてみればそうかもしれません。私はあまりそういう方を知りませんが、そう思えるあなたはもっと優しい方なのでしょう。

腹を立ててそしてゆつくり思案する

中宇地 秀四

感情に走る人は人間らしい。しかし最後の判断の仕方が人の器を決める。腹を立てる段階があつて初めて良い思案も生まれる。

第30回全日本川柳2006年岩手大会

日時 平成十八年六月十一日(日) 午前十時開場
 会場 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣
 〒020-3100 花巻市湯本第一地割一二五〇

交通機関 JR新花巻駅から車で25分
 JR花巻空港駅・花巻駅から車で20分

宿題 第一部(事前投句)

一般部門 四月十五日締切

- 「星」西瀛一郎選 「コイ」黒沢かかし選
- 「地」酒本田 智彦選 「高原」松岡恵美子選
- ジュニア部門小・中学生二月二十八日締切
- 「手作り」宮村 典子選 「童話」宇部 功選
- 「自由吟」岡崎 守選

2×16cmの句箋一枚に句宛記入・各題二句・無記名封筒の裏面に住所・氏名明記 投句料一〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛郵送のこと。ジュニア部門は投句料無料

投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北二一九〇五
 (社)全日本川柳協会 宛

TEL 06-6351-1111 FAX 06-6351-1143

郵便振替口座 〇〇九七〇一九一三五七五

宿題 第二部(当日投句、十一時十分締切)

「もてんす」ぶらり選 「鬼」森中恵美子選

「匠」大野 風柳選

各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者 磯野いさむ・植木利衛・塩見草映
 福岡雄雄・米島映子

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)
 表彰 (1)文学科学大臣奨励賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞 (4)大会賞
 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

(社)全日本川柳協会 大会委員長 磯野いさむ
 全日本川柳岩手大会実行委員長 佐藤 岳俊

△表彰式典・前夜祭のご案内

◎表彰式典 平成十八年六月十日(日) 午後六時
 (功労者・平成柳多留入賞者・大会十年連続出席者)
 ◎前夜祭 表彰式典後、同一会場に於いて
 会場 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣
 〒020-3104 花巻市湯本第一地割一二五〇

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
 大会・前夜祭のお問い合わせ先
 〒020-3133 岩手県紫波郡紫波町北日詰大日堂十八一
 熊谷岳間方 日川協岩手大会事務局 宛
 TEL FAX 〇一九(六七)三三七五

大会・前夜祭参加費の送金先 四月十五日締切
 郵便振替口座番号 〇三二一〇一一四四二六〇

△宿泊・観光ご案内

宿泊 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣
 宿泊料金 一泊朝食付・税込み
 五、五〇〇円/丸、〇〇〇円

観光 高村山荘・高村記念館・歴史民俗資料館 他
 六月十二日(月) AM 九時~PM 三時 八、五〇〇円
 (昼食+名物「わんこそば」)

申し込み二十名以下の場合には中止または料金変更にて実施します。宿泊・観光の申し込みは、別紙(ハガキ)申込書に記入し、ご送付下さい。四月十五日必着です。

宿泊・観光の問い合わせ先
 JTB東北花巻支店 担当者・平賀 聡
 TEL 〇一九八(二三)六三二一 FAX 〇一九八(二四)六三八二

第6回 春はくろぼこ川柳大会

日時 4月2日(日)10時~15時 開会13時
 会場 新日本海新聞社中部本社ホール
 (TEL 08558-26-8300)

(JR山陰本線「倉吉駅」下車・徒歩・直進12分左折3分)

宿題(欠席投句拝辞)

- 「蜂」天根 夢草選(茨木)
- 「スマート」河内 月子選(堺)
- 「ゆれる」岸 桂子選(松江)
- 「だんご」春木圭一郎選(鳥取)
- 「もろう」奥田 保子選(八頭)
- 「プライド」夏目 一粹選(鳥取)
- 「猫」田中 一眸選(鳥取)

出句 各題2句まで 締切り11時30分

会費 2000円(粗品・入選句集呈)

昼食 90個まで(昼食券500円)当日希望者着順

表彰 最優秀作品賞・優秀作品賞
 (川柳塔社主幹 河内天笑選)

秀句賞(各題3句)

懇親会 2500円(大会終了後・同ホール)
 16時30分終了

問い合わせ 鈴木公弘 〒689-1034 3
 鳥取市気高町飯里889-4
 TEL FAX 0857-84-2886

(主催)くろぼこ川柳社 (共催)川柳さーくる21
 (後援)新日本海新聞社 鳥取県川柳作家連盟
 (協賛)株いなばハウジング・鳥取市青谷町・山田硝子(布)

本社一月句会

一月七日(土) 午後一時
アウイーナ大坂

記録的な寒波で各地に雪害が報じられ大阪も粉雪舞う厳しい寒さの中、102名の熱氣溢れる新春句会は開催された。まず亀井皎月、本吉宗光、中後清史氏の計報に黙祷を捧げる。昨年度月間賞杯永久保持者は山本希久子さんに輝き、記念杯が授与された。

新春のお話は河内天笑主幹。一月号巻頭言中の川柳搭誌初代編集長、清水白柳氏の年頭句を引き合いに「川柳とは・」の基本的考え方を始め一句一文字の扱い方、何気なく交わす一言の重みを語る。96歳なお豊稔と活躍の長谷川春蘭さん等を称えながら、長寿に対する考え方に至る迄の幅広い示唆に富んだお話し、また川柳愛好者の発掘、誌友拡大に向けて地方大会等への積極的参加協力の依頼をした。その他好評の小冊子「川柳しませんか」の配布等、川柳搭誌発展へ向けての熱い思いと期待を述べた。(直樹記)

月間賞は山本希久子さんに輝く。
初参加は福岡末吉、伊達都夫、北田ただよし氏。

(司会 朝子、玄也) (記名 朱夏、直樹)
(受付 賢子、ルイ子) (清記 直樹)
席題「希望」 安土 理恵選

希望だけ申し上げます初詣で
希望言えば年はとりたくないものだ
凹む日もあるが希望は持ち続け
希望の観測ばかり楽道家
ジョギングで百まで生きてやる希望
偽装建築夢も希望も奪い去り
九条を活かして希望見えてくる
まだ女恋の希望は捨ててない
燃え尽きた希望ごろごろ都市砂漠
希望にはかなり足りない骨密度
酒二合生きる希望へ酔いでくれ
希望湧く年でありたし雪のんの
ご希望もここまでですと整形医
非常口近くの部屋を希望する
わたくしの希望に少しピンク足す
スランプの底でも捨てはせぬ希望
歳をとるたびに希望が痩せている
足音の若さ希望に燃えている
叩かれて転び希望で這い上がる
此の歳になつて希望を聞かれても
風雪へ希望を抱いている蕾
リベンジが叶い希望の春になる
希望みな捨てると度胸湧いてくる
希望まだ捨てぬ明日も陽が昇る
せっかくの命欲張る希望抱く

准一 比ろ志 萌
光久 萬の 玄也 正 富美子 富子 恵子 弘風 比ろ志 俣子 留美子 希久子 玄也 朱夏 能子 弥生 美代子 朝子 奮水 扶美代 孝一

その笑顔あなたに希望持つてよい
合わず掌の温さに湧いてくる希望
先輩に希望の星が一人居る
希望持て元氣を出せと陽の昇る
書き初めに爺も希望と書きました
老眼鏡希望という字追いかける
豪雪の下に希望の福寿草
佳
よそいきの希望取り出すお元日
夫婦して希望の違う初詣で
おもちゃ箱見事な希望つまつてる
遅咲きのぶんだけ希望枯らさない
健康で仲よく暮らすそれでよし
人
命残照いまだ希望に燃えている
地
欲張った希望をのせて始発駅
天
よく食べて元氣に暮らすのが希望
軸
産声に万の希望が託される
兼題「いよいよ」 吉村 一風選
小児科にいよいよ増える閑古鳥
新郎はそわそわ新婚はどっしり
免許更新いよいよこれが最後かな
いよいよと腹をくくった手術台
子が巣立ち夫婦いよいよ正念場
第三のビールに税の手が迫る

天笑 直樹 潤子 洋
千代 扶美代 奮水
真理子 シマ子 ばっは 弥生 能子 光久 洋
なぎさ

いよいよと思うやれやれとも思う
 いよいよの朝丹念に髭を剃る
 いよいよの時も笑っていられるか
 いよいよとなれば出てくるくそ度胸
 悪友の訃報いよいよやなあ俺も
 いよいよとなつても書かぬ遺言書
 改憲が組上あなたに来た出番
 いよいよのときへそくりが物を言う
 いよいよになれば鬼とも手を繋ぐ
 いよいよの時のセリフは決めてある
 隊から軍いよいよまわりきな臭い
 揉め事へいよいよ母の出番です
 いよいよの日まで豊んでいる翼
 いよいよ手術狙の鯉となる
 いよいよの時に持つる隠し球
 平静を装う女対おんな
 火をつけてよいよいよ身をかわす
 満を持し四コーナーでしなる鞭
 いよいよとなれば女装も致します
 いよいよの出番へ人を三度呑む
 熱卒離婚もう限界にきています
 いよいよとなると父より強い母
 今のうち家族を呼べとこわいこと
 増税の痛みいよいよしのび寄る
 いよいよと言う時何時も逃けている
 いよいよの時はあなたを捨てて行く

つづや 弘一 理恵 水昇 天笑 朋月 ダン吉 集一 楓 扶美代 千恵子 千里 扶美代 富美 富美 雅文 はじめ 幸雀 瑠美子 千里 理恵 はじめ 恭昌 東吉 弘風 房子 美代子 正坊

いよいよと決意燃えてる初日の出
 いよいよの時あわてないのは女性
 いよいよの時のせりふを稽古する
 人
 切り札の出番を握る懐手
 崖の縁妻の奥の好物を言う
 天
 いよいよの時はやっぱりお母ちゃん
 軸
 いよいよの覚悟ベッドで鯉になる
 兼題「生む」 平松かすみ選
 菟弱十個苦盪合わせて出来上がり
 音痴から生まれた美人ピアニスト
 指先でオアシスを生む点字の書
 疑心生む心は闇をさ迷えり
 純国産の網誕生はいつになる
 鮭の群れたんと卵を生んでくれ
 いい春を生んで頂戴コンバクト
 少子化へ僕も子供を生めたなら
 月光が生んだ豊の小宇宙
 新薬を生んで長寿の国となり
 七人を生んで百歳まで生きた
 歯に衣を着せない口が生む火種
 風紋の生まれる砂と風の恋
 千年のはつたりを生む考古学
 化粧品高いものほど夢を生む
 囲炉裏からほつこり生まれ出る民話

セツ子 正坊 真理子 潤子 光久 則彦 柳弘 房予 きよし 太郎 一風 たもつ 潤子 五月 柳弘 富美子 柳弘 富子

生み育て長い投資に悩む親
 山もあり川も流れて子が生まれ
 怪物を生んだ普通のお母さん
 ロボットに生んでもろたらどないです
 無口でも喋り過ぎて生む誤解
 逆境に耐えた心が強さ生む
 命誕生僕はとことん酔いました
 これからは女子を産みますお姑さま
 チルドレン名札をつけて話題生む
 望まれて生まれて来たと信じてる
 孫生まれ嫁の陣地が広くなり
 産声に男のみけん凜となる
 流す汗生み出すものは無限大
 正直に言うから妻の誤解生む
 ずぶ濡れになって生まれた恋でした
 澄みきった空は平和を生んでいる
 佳
 元気な子娘が産んでくれました
 アイデアを生むロボットを探してる
 呱呱の声廊下で神と待つ夫
 フラスコの泡ややこしいものを生む
 漫画家の描いた夢が技術生む
 人
 人の子を生もう人間なんだから
 一滴のしずく大河を生みおとす
 天

東吉 律子 幸雀 修 女也 賢子 ばっは 義子 公誠 つづや 萌 光久 ダン吉 修 ばっは 美花 たもつ みつ子 正雄 重人 律子 理恵 弥生 朝子

鉢かづき民話生まれた里に住み

兼題「来る」

岩佐丹吉選

来る人が来てまた乾杯のグラス持つ
食事時なぜかあの人よく来るの
妻の愚痴来る日来る日も聞いてやる
何をしに来たかうろろうして帰り
負担増痛む身に寒い春がくる
窓際に来て知らされた俺の位置
広くとる余白いい世が来るように
天災は忘れないでもやってくる
やっぱり来たか白状せにやならぬ
相談事あなたが来ると雨になる
来る友へ門を大きく開けておく
年賀状幸せそうな顔で来た
子や孫につけが来ますねこのままじゃ
羽振りよい時だけそばに来る勝手
崖つづち味方は来ると信じます
ロボットのヘルパーが来る近未来
やがて来る改憲風負けられぬ
増税が大手を振って来る気配
朝の音いつもの順にやってくる
年賀状狼を忘れた犬ばかり
九条を変えたらきつと来る戦
いずれ来るその日は君と二人だけ
ピンチですきつと母さん来てくれる
来るのなら来ればとそっけない誘い
こいこいと言うので来たが数の内

遠野 柳右子 則彦 三喜夫 直樹 郁夫 求芽 玄也 天笑 希久子 たもつ 比ろ志 たたよし 倅子 義子 楓楽 一步 富子 章久 哲男 太樹 直樹 能子 玄也 恵子

正座して来るべきものを待っている
来る時が来たぞ揮締めなおす
堅いこいわずに来たらええやんか
飲めぬのに三次会まで付いて来る
ひと言の断りもなく朝の雪
老いの坂見えないものが見えてくる
点滴が重湯に替わり春が来る
（奥）五月

朱夏 とし子 義 きよし 柳弘 正坊 集一 雅文 一風 求芽 弘一 楓楽 篤子 セツ子 七ツ子 美義 庸佑 直樹 准一 恵子 朋月

跳ね上がるタイミンク待つ消費税
絶好のタイミンク口アワワワ
定年後今が切り出すタイミンク
タイミンク考えすぎてヘマばかり
タイミンクはすしてからのわだかまり
けなしてたとこころへぬつとご本人
増税が禁煙とそうタイミンク
最高のムードへ着信音が鳴る
タイミンク外し外され今がある
阿と畔でわかる夫婦のタイミンク
タイミンク合わず三途の川に落ち
タイミンク逃して今も二人住む
露天風呂水平線に初日の出
託び言は妻の満腹どきにする
反逆のタイミンク待つ弥次郎兵衛
タイミンクの悪さよ今日は三りんほ
顔色を読んでお茶出すタイミンク
立ち際になってビールを出されても
終点にちよど仕上げる化粧術
団塊の世代で生きる運不運
うまいこい目を覚ましては降る駅
ここという時に蓋とる涙壺
ちよどよいところへ来たが使われる
深読みをすくとタイミンクがずれる
タイミンクきつちり合わす馬の足
タイミンク虎視眈々と下克上
タイミンク良すぎて裏がありそうだ
ほんやりとしてタイミンクはずさない

萌 冬葉 賢子 みつ子 柳右子 天笑 朋月 希久子 千恵子 三喜夫 きよし 賢子 哲男 つづや 昭 笛生 ふりこ 一步 直樹 幸雀 倅子 理恵 義久子 重人 柳弘 玄也 篤子

ノラになる潮時を待ち磨く鍋
神さんに遊ばれているタイミンク
タイミンク合えはバズルはすぐ解ける
富美子

タイミンクの悪いところに句読点
朱夏

運悪く社長になったタイミンク
尚士

寝て起きて咲いて散るにもタイミンク
千里

タイミンクずれた冗談から冬に
千里

兼題「玉」 板尾 岳人選

玉碎の島にカンナが咲き誇る
久峰

氷柱の先に溶けた露の玉
螢

シャボン玉あと追いかける童たち
雅明

ぼーんと地玉今日が生まれる白いめし
高栄

拉致問題火の玉になる遺族会
集一

生きている限り火の玉抱えている
正坊

本当はからつぽだった玉手箱
アキ

半熟の玉子が憎いことを言う
冬葉

ケン玉で兄を泣かせた末娘
冬葉

真ん中にいつも玉虫色がいる
五月

ウインドに目玉抜かれたゼロの数
五月

潮が満つ今母となる玉の汗
潤子

人間が好きで心の玉磨く
潤子

玉手箱今しばらくは開けません
富美

そろばんの玉が欠伸をしています
富美

玉一つ奪いあうのに命がけ
房子

サヨナラの美学と思うしゃぼん玉
またの名を鉄砲玉と呼ばれてる
玉の汗命を削る音がする
とまり木でかん開ける玉手箱
定年になったら開ける玉手箱
懐の癩癩玉がすぐ疼く
崖つ縁やっぱり母の肝つ玉
駄菓子屋のビー玉にある遠い恋
少年の夢七色のラムネ玉
エプロンの下にすっかり肝つ玉
火の玉という青春の宝物
サッカードを玉蹴りと言うおばあちゃん
磨いたら光ると石が主張する
玉になるあこがれだけは捨てぬ石
だんだんと玉虫色になる頑固
玉手箱一緒に開ける女を待つ
住

好きな人に飴玉なんかあげません
勾玉をいくつも持っていた卑弥呼
もうちょっと美人だったら玉の輿
古希ですがまだ大好きな玉子焼
揺れている男に投げる隠しだま
友達が次々消えるシャボン玉
地
飴玉の一つがボクを悩ませる
天
夫にはちらりと見せるかくしだま
山本希久子
玉碎が辞書から消えて六十年

洋
義
とし子
楓
楽
三喜夫
修
幸
雀
千里
希久子
郁夫
直樹
東吉
重人
朝子
恵子
きよし

たもつ
美代子
かすみ
弘一
ただよし
扶美代
一歩

川の字なりに

穴吹尚士

子が出来て川の字形カタマに寝る夫婦

川柳を志す人ならもちろん、一般常識としてこの川柳を愛する人は多い。

諷風柳多留は、前句付けの付け句だけでその意味の判りやすい句を抜き出して編集されたもので、正に川柳の源泉である。

しかし、この句の場合は前句を知っているともっと面白い。前句は「離れこそすれ離れこそすれ」で、子が出来るまでは若夫婦がしっかりと寄り添って「りの字」で寝ていたのに、子が出来て、子を挟んで離れて「川の字」に寝ざるを得なくなったと読めなくもない。真つ当には、初めての子に恵まれた若夫婦が可愛い子を夫婦の間に寝かせて、その寝顔を覗きながら、親子三人が並んで幸せな夜を過ごしていると読むのが妥当だろう。

この句の主人公の身分を推定すると、武士の主(あるじ)は余程の軽輩でもない限り親子三人では寝ないから、まず武士ではない。

句の意図するところは、「町人でそれも一間きりの裏長屋住い」ではないかと勝手に想像すると、お江戸の匂いがぶんぶんしてくる。

享保宝暦の頃の江戸の人口は百万人と言われ、世界でも有数の人口都市であった。武士が約五十万、町人も約五十万、寺社関係者が十万そこそこであったが、土地は武家と寺社で八割五分を占め、五十万人の町人は狭い土地に窮屈に住んでいた。大店(おおだな)や富裕者はともかく、庶民は長屋住まいである。それでも通りに面した表長屋なら間口二〜三間に奥行き四間で小商いをしており、一間きりということはなかった。

しかし、町人の大半は裏長屋住まいで、ドラマでよく見るように、通りに面して狭い木戸口があり、そこに名札が張っており、その路地を入るとその両側に長屋が並んでいた。路地の下はどぶ(下水溝)である。

「九尺二間の裏長屋」というが広さは六畳くらい、そこに土間があり、竈(かまど)があり、部屋は四畳半くらいになる。しかも押入れが無く行李やちよつとした家具を置くくと布団を敷けるのは三畳強くらいであろうか。好むと好まざるにかかわらず、川の字になって寝るしかない。子沢山になると寝るの

も大作業だったろう。十歳頃には住み込みの丁稚奉公が徒弟修業や下女奉公に出すのが世の習いであった。これは生活が苦しく口減らしをするという意味もあるが、弟や妹が増えてくると、一人分の居住スペースが狭くなることもその原因の一つではなかったか。

井戸、物後架(そうこうか・トイシ)、芥溜(こみため)は共同使用であった。風呂は湯屋(ゆうや)へ行くことになる。

ちなみに、「九尺二間」の家賃は、長屋のレベルで高低があったようだが、文化文政頃で並は月一千元前後だったらしい。現代の貨幣感覚では一万円強というところだろうか。

なおついでに書き加えると、この裏長屋の日常を管理し家賃を徴収するのが「大家」である。大家は家賃を所有している人から委嘱を受けたブロの管理人であり、持ち主ではない。大抵は近くに住み、借金の相談にも乗り、揉め事や夫婦喧嘩の仲裁まで面倒を見たそうだし、また、出産、死亡、結婚、転居の届けの受付など、人別帳にかかわる町奉行所の公用の末端も担っていた。まさに「大家といえは親も同然、店子といえは子も同然」のお付き合いだったようだ。

おぼろげな城

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会

山崎 君子報

余生幾許明るく生きなきや損せんソソ
やめときなはれプランささやく声がする
小犬のワルツ余生のプランまで踊る
プラン立て借金せよとテレビから
命日にちよつと気兼ねのさんま焼く
後悔は生き抜く知恵に変えなけりや
プランには無い寄り道にある波乱
反省もこめて新年へのプラン
結局はプラン倒れになった旅
園児の絵みんな明るい太陽が
鉛筆を尖らせている自己満足
明い窓だ子犬がのぞいてる
柿のれん明るく染める春日和

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

茶柱が余裕をくれた朝の顔
つい口が滑って重荷背負い込む
北風に踊って帰るランドセル
許さねば過去のハードル越えられぬ

てる
キク子
みつ子
哲子
トミエ
貴代子
孝一
美籠
いわゑ
武庫坊
年代
義子
君子

賢
かおり
あきら
ひかり

割草着つける背中が丸くなる
波風を立てず余生を送りたい
倅せな心を貰う誕生日
紅葉狩足の痛さをチト忘れ
もう一度リンゴ丸ごとかじりたい
お化粧が上手に出来たと妻を賞め
譲られた席はホノノリ温かい
新時代メールで行き来する時代
Uターン素種作る島に住む

高槻川柳サークルの花 瀧本きよし報

メルヘンの森のだるまは足がある
柿熟れて足の先から冬が来る
増税に触れると勝てぬ選挙戦
核心に触れると躓す調べ室
児の額触れば分るママの勘
特価の店おぼちゃんすぐに触れ回る
人情に触れて再起の屋台曳く
触れないで下さい熟れた桃だから
国会に野党は要らぬ多数決
正論も頭数にはかなわない
根回しを何回もして多数決
負けそうでも手を上げる多数決
居睡りも数の内かよ多数決
どん底の声は聞かない多数決
切り取り線の上で踊った多数決
せつかちたが気長な釣りが趣味である
旅支度三日前から枕元
せつかちなあの足音は父の靴

寿々女
よしみ
八重子
貞月
放任
いさむ
文仙
初恵
治延
砂輝守
活恵
宏章
庸佑
稲子
孝一
石舟
佐代子
義一
美籠
治三郎
勲弘
美義
尚士
郁郎
比ろ志
祐作
きよし

せつかちに秋が唇を剥いでゆく
風はせつかち木枯らし一号吹き抜ける
年金のアンケートには興味ある
満足だけと普通で○をつけておく
アンケートはじめに書いたことがない
合併の是非問う村のアンケート
ゴミの日を書けと鳥のアンケート
なにごとく修行と思う役どころ
古里を踏めば霜まで温かい
無理しても動けるうちが花ですよ
電話して受話器置いたら思い出し
飲み込みは早いけどどこか抜けている

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

頑固さも酒には弱く妥協する
刈り終えて天地に感謝酒を酌む
言い訳をしながらいふ今日も欲しい酒
秋夜長一人寝酒へ明日の夢
人生をくるわす時もあるお酒
晩酌を黙って飲んで寝てしま
忘年会飲み放題へ心浮く
居酒屋で師走の風にせかされる
忘年会何度でもできる酒の友
名目は反省会で酒が出る
一合へ耳朶のほてりが脈を打つ

川柳塔おとり

鈴木 一弘報

ヒトだもの思いきり泣きのち笑う
高らかに笑つてみたい秋の空

百合子
節子
輝子
公子
八斗
武史
晴美
重人
典子
求芽
佳一郎
泰雄
智恵子
久子
豊枝
弘子
鈴枝
信雄
和代
公美枝
静江
正光
雄々
真一
幸次郎

夫婦劇近くまでつづく泣き笑い
旅の宿業と水も持参する

パンフ見て予算弾いて旅気分
おほれないように彼屋へ渡る旅
恋慕う思いとどかぬはかなさは
はかないと湿気れば運も去ってゆく

退職し妻とはかない傘開き
自爆テロはかない命無駄にする
睡蓮の絵にはかなさを見せられる

ふくらんではかなく消えるシャボン玉
はかなくも火種は消さぬ趣味ひとつ
はかなさに沈むときには空仰ぐ
命とははかないものよ訃報聞く

川柳大坂

高木

信酔報

当てにした友の財布に金がない

秋風がせかせかせかす毛糸針
家元が免許一つでばる儲け

濡れ手に粟なんてこないバブル以後
はろい話探しあぐねる貧乏人

未知にいとむ若さままだ持っている
切り開く未知へごはんを食べている

少年の澄んだ眼にある未知の星
長生きをおまけと言つて芸達者

桐植えて嫁入り箆笥娘に持たす
森となる夢一本を植えている

はろい服着ても心は清い彼

咳一つまばたき一つ芸の鬼

はろいなあ一億知らぬと元総理

清子

道子

ヒロ子

艶子

知恵

国和子

小生

以和万津

若和子

一弘

登美

風花

由多香

五月

タカ子

東吉

美龍

孝一

利昭

朝子

一風

修

ひろゑ

ダン吉

いつわ

宏

秋の空雲は大きな芸術だ
未知数の貴男に賭けた夢一つ
青空が未知に飛び立つ背中を押し
盤上で歩の一枚が芸をする

一芸に秀でて米の値を知らず
善男の一人で有りたし神の前
人間国宝上方落語師の誉れ
こてこての大坂弁で売れている

無職にも勤労感謝という休み
尻向けた犬がにこにこ舞いどり
百葉の長は笑いかも知れぬ
柿一つ残して山里日が暮れる

未知なるが故に一緒にになりました
酔わないで日本酒乗せた宇宙船
一日中喋りまくるもすこい芸
人情に風向き変える芸がある

川柳塔なら

坊農

柳弘報

目も口も心臓までも達者です
佇んで帰らぬ日は夢の夢
佇んで仰ぐ夕日に慈悲をみる
成福院願いを込めて鐘ひとつ
鍵つ子の影が伸びてる夕茜

紅葉を巡る達者なスニーカー
警策に乱れる心ひとすじに
無口だがボツリ核心突いてくる
人として心あるのか北の国
繁昌のお寺でトラが吠えている
心とは別に妻には美味いと言う

美花

かよこ

柳昌

青道

重人

洛醉

柳弘

笑風

一歩

鉄心

三十四

功

彦太

喜楽

まつお

信酔

彰治

博一

美佐女

滴作

茂雄

ふりこ

むつみ

春雄

千梢

卓

弘風

佳句地十選

堂上泰女

心ない一言風船が割れる

片道のキップの中にある大志

聞き上手人の心もうまく読む

高らかに余生謳歌のファンファーレ

川の字の真ん中にある宝もの

良心のかけにかくれている獣

気負わずに生きる風花舞うように

沈黙黙考こめかみさえも動かさぬ

逆風に情けひとつを握らせる

深呼吸夢が破れていかぬよう

心から慕ったはずの離婚沙汰

心打つ言葉みつをの書を探す

達者でも骨の磨耗が気にかかる

君の色に染まりたがっている心

嫉妬する心鏡に覗かれる

心持つロボットと住む未来絵図

小春日にふんわり干している心

柿熟れてカラス思案の木がゆれる

苦勞してよるこびの手を合わす

山門に浮世の殻が落ちている

秋の寺祈りの刻が深くなる

秋がふと佇む定年後の枯野

ワニグチを叩く男の隙だらけ

見送りの老母竹みて点となる

邪心捨てよ神も仏もいます山

充子

重人

一風

求芽

芳郎

宏至

鐘造

いわゑ

芳香

隆

長生

良一

章久

理恵

和夫

富子

真理子

菜月

定男

六助

隆盛

秋雄

道子

朝子

國治

しばらくを佇む信貴山秋の色
歳月をゆるりと解く和のころ
土いじる達者な日に礼を言う
人生の岐路に佇む風の音

竹原川柳会

時広 一路報

ハードルを次々越えて行く愛た
愛妻と言うにはちよつとこそばゆし
コスモスが進行形の愛で揺れ
五十年愛してるなんていわずきた
好きなんだ親に背いて愛し合う
愛は欲ばり夫は一人しか持てぬ
水平線無限の力抱かれる
今日も無事停せでした手を洗う
ゆつくりと構えて明日を待っている
流れ星明日の幸せ連れてこい
うそ泣きの声も乾いて倦怠期
ハミングで昔の唄をなつかしむ
大声は命無言もまたいのち
留守電にどうやら馴れた母の声
鶴の一声いつも触先は父へ向く
どんな色出て来る窓に神がいる
ひと色をたして私の秋にする
一枚の紅葉豊かにする茶菓子
モノクロは優し万色包み込む
赤もある青もある今生きている
色紙のお部屋みの虫夢を見る
秋風の中で無色になる私
礼服のカラス行儀が悪いなあ

笛生 柳弘 寿美 蘭幸 菁居 節夫 笹舟 正宏 静風 汎美 規代 千枝 史子 敬子 房子 半覚 厚子 笑子 栄恵 慶子 輝恵 幸子 比呂子 淑子 万年

生人流転滝七色の夢を吐く
自娛礼賛全ての色を使いきる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

若返るつばさ下さいわたしにも
父祖の緑しみじみ想う誕生日
お隣になって不思議な縁がある
犬と猿不思議な縁だぞ露天風呂
縁あって向かい合わせの終電車
シナリオの所々に花を添え
さらさらと見る間に庭の雪景色
原爆忘赤いつばさで自爆した
老鶴の翼は夢を追いつづけ

京都塔の会

都倉 求芽報

杉苔の茂みの上に舞うもみじ
むしやくしゃを蹴上げてそっと見る疎水
雑踏をさけ紅葉撮るカメラアイ
五感研ぎ句作のペンを走らせる
植治の庭 難しい事考えぬ
秋の山小細工なしのシンフォニー
もみじ散る彼の世この世の境界に
乱筆でついでことわりを入れる癖
職のない若者の乱バリ燃ゆ
そのうちに地球が乱を起すかも
芯のある飯で気づいた妻の乱
乱読の豊かな海に揺られてる
乱読の知恵で窮地を切り抜ける
神代から女は乱を楽しみて

不 柳 一路 聖子 恵美子 好栄 かつ子 ちよえ 伸子 博利 清泉 光彦 則彦 萬的 百合子 シマ子 ろつば 朱夏 和子 啓子 正坊 尚士 葉子 求芽 義子

あべこべに孫から習うEメール
謝りに来て気づかないを勞られ
齡の差あべこべになる車椅子
病む友がりんご私の手へ渡す
あべこべもまたいいじゃないピカンの絵
フリーターの孫から届くお年玉
愛着を捨てると肩が軽くなる
愛着の二字が染みてぬむる服
愛着あるいのちを阻む鬼の面
屋号が好きあせた暖簾へ足が向く
この町が好きいやなことあるけれど
愛いまだ絵の中にあるベレー帽
老萬円 愛着感の暇もなし
三枚に下ろすと愛着が消える
病んでみていとおしくなる我が五体

岩美川柳会
石谷美恵子報

職さがいいつもチラシとにらめっこ
郵便受けがチラシのヘッドを吐いている
美人モデルのチラシで足の爪を切り
チラシ見て安物買いの油代
マンションのチラシ耐震には触れぬ
店じまいチラシに嘘が見え隠れ
気疲れた顔は見せない猿のボス
血の回り良くして気疲れには負けぬ
忘れない人で気疲れしてしまふ
疲れ気味ポタ餅七ツ食って寝る
マドンナのヒール気疲れしたようだ

満子 哲子 春 富喜子 すみ子 きよし 恭昌 典子 静枝 昌乃 寿美子 たず子 益子 義子 宏子 稔 はお 一 瑤 重忠 忠良 かつみ 季芳 和枝 圭一郎 石花菜 よしえ

気疲れの後のお酒が腹にしみて
 ざっと出た気疲れ夫に勞られ
 走るより疲れる人の海の中
 気疲れをさせぬ人柄みんな奇る
 面倒見よすぎ気疲れ抱え込み
 流されて本音が言えず疲れてる
 明日生きていくかどうかは分からない
 浄土とはあんな彩かな茜雲
 新人は未知の器よ頼母しい
 来年の忘年会はわかない
 天国行きの木戸銭は何ほです
 糸切つて未知の世界へ飛んだ風
 これなーにあれはなーにと三歳児
 余命未知だから楽しく生きられる
 産声は大きく未知へ宣誓す

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

一京 公子 克枝 たぬ アキ 幸枝 完司 (野)節子 孝男 蟹郎 公乃 節子 雅女 美恵子
 洋々 一京 秀四 富士雄 善夫 無限 志げ緒 義徳 美雪 美恵子 良子

デリケートな花です風にすぐ揺れる
 あの日から星条旗には逆らえぬ
 好きだけど嫌いと言つただけのこと
 菓子折りの中身菓子だと思ひ込む
 評価する人も評価におびえてる
 無免許の女の傘にある未練
 ヤミ選挙言じられんと巡査去る
 妻の膝無免許だけど乗つてやる
 もの言えば刺客が来ると言じれん
 夾竹桃まつ赤に燃えた敗戦日
 デリケートな肌で安物使えない
 あの日から日本元氣を取り戻す
 言じれん演説だった意味不明
 スタイルで蟹の値段がデリケート
 玉音を聞いたあの日は忘れぬ
 出来不出来微妙に違う匙かげん
 霜下りて花のつばみがデリケート
 あの世など言じれないよ知らぬから

川柳塔鹿野みか月句会 土橋

一瑠 昌鼓 春名 金祥 諷訪男 益子 茂登子 孝男 喜子 雅女 圭一郎 節子 蟹郎 章子 房江 はつ江 一粋 蟹報 宣子 睦子 彩子 節子 和子 菊乃 小鹿

顔を見て犬は話をジツと聞く
 番をするものなく犬が大欠伸
 犬かきで山河を越えてきた命
 ふうふうと犬の散歩はお爺さん
 粹筋の名を愛犬に呼ばせている
 盆暮れにちゃんとして戻つてくれる戌
 犬一匹飼つて毎月二万円
 真実の涙眩しいほどきれいな
 見定めて眩しいころ取り戻す
 全力で来た道光るものがある
 懐のふと男で眩しくて
 青春が眩しく熟し花盛り
 葬送の遺影まぶしく薄く涙
 愚痴いれて書いた手紙の世帯じみ
 今は亡き友の手紙を読みかえす
 暴露するタイミンク未だ男と女
 プラス思考いつも笑顔を忘れぬ
 人間の時間の中において番う
 嗜みをもすこし欲しい群雀
 合併をしたが番地は変わらない
 誰よりもその笑顔の女が好き

長柳会

村上

直樹報

久枝 はおくに子 保子 孔美子 諷人 きみ子 富久江 房子 富久江 茶子 みさ子 みどり 公子 八重 汲香 宝子 実満 本丸 幸枝 登

だんまりの術で朝から睨みあい
 らんらんと闇夜に猫の目が不気味
 処世術下手な男が夢を追う
 納豆は日本の食事和文化
 急がずにくこつ刻む古時計
 通帳も急いでいます預金ゼロ
 直樹 武男 佐久治 靖博 三和子 明子

世を渡る術しつかりと子に伝え
 戦術を変えて幸運こちら向く
 奥さんにシツポつかまれ術もなし
 毎日が日曜趣味に明けくれる
 なす術がなくて時節を待つてます
 野性の眼光夜の動物園

らんらんとつぶらな瞳絵本追う
 ロボットが見せる確かな護身術
 毒舌家とつても優しい人だけど
 急ぐこと無いが気になる年賀状
 居酒屋で毒か葉かその一杯
 手術せず喜寿まで来れた幸恵う
 魔術師は美女ひらりと心抜いてゆく
 師走です流れる雲も急いでる
 急ぐことないのに速く歩く癖
 海老と蟹目つきが変るゲルメ旅
 まだすこしららんらんごころ持ち媼
 クラス会幸せ芝居する彼女
 家計簿に魔術をかける妻がいる
 らんらん不惑の娘にも春の風
 らんらん目が冴えてくる遺産分け

川柳茶ばしら
 板山まみ子報

靖子 良男 不二雄 輝子 ひろし 淳司 敬二 和子 もこ 正一 マサ 幸雄 一慧 正子 けい子 たけし 芳野 正博 富美子 史 和代

一年があぶくのごとく消えて行き
 製造がわが町だった旅土産
 孫のこと聞かれ強面頼ゆるめ

川柳ささやま

遠山 可住報

反対を押し切った愛ひそやかに
 孫の伸びちんまり治まる老い写真
 支持率の伸びだけ狙う国の策
 乗り気ない仕事体をもてあます
 寿命まだのびる倅せ夫婦箸
 片意地も一件落着乗り気見え
 のびのびと育てた孫の初門出
 今日を終えのびのび入る終い風呂
 札状がのびのびになり出しそびれ
 セールの巧みな言葉つい乗り気
 伸びかけた髪もうれし夫復期
 彼女も来る急に乗り気の同期会
 気が乗ると男一途な仕事振り
 仮の世を拗ねて男の髭が伸び
 伸び盛り去年の服が臍を出す

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

カレンダー四季の風景旅情あり
 カレンダー瘦せて今年の子定表
 私にも残り福ほど未來ある
 見納めと思つた野ぼたん花一輪
 嫉妬心幾つになつても納まらぬ
 腹の虫納めて葛湯飲んでる
 からす瓜のいろあざやかに冬ざれる

盛夫 幸子 まみ子 純子 美緒子 文子 美智子 靖子 多美子 開子 照代 かほる つや子 二英 哲男 芳郎 可住 正子 紀乃 昭三 千恵 宏一 薫 年代

命より金の儲けを重視され
 国民に増税と言う付け届け
 夕焼けを掴み損ねたアドバルーン
 駅前広場そこにも冬が落ちている
 乾杯のグラスヌーパーは寡黙
 黙祷後やがて始める同期会

川柳塔唐津

仁部 四郎報

健やかな寝息に安堵夜半の床
 老いてゆく老妻に反論しなくなる
 三角の日より丸の日数を増し
 華やかな噂ワルツに乗ってくる
 旅支度妻の化粧が長すぎる
 脇役は顔ではなくて芸に生き
 満ちて欠け月が私に論すこと
 惚けるなよ傘寿が喜寿の肩たたく
 百万も貰えば一生忘れぬ
 何もかも妻に委せて釣に出る

西宮北口川柳会

黒田 能子報

海峡を渡り待つてた料金所
 次世代に繋げる橋が探せない
 ふる里へ帰るにつらい橋がある
 ふたつみつ橋を渡つて嫁いだ娘
 大地踏むやりがい今日元氣靴
 求職は先ずやりがいを確かめて
 主婦業も工夫次第で面白い
 仕事着の中にやりがい詰つてる
 パースデー手料理全部食べてくれ

幸子 守弘 芳子 武庫坊 久子 寛之 晴翠 勝視 正劍 實 水笑 輝夫 高明 虹汀 奮水 婦美子 江美 開子 一之 鹿太 章子 光久 哲男

やりがいに僕のいじめもあるらしい
 目が眩む平和を願う聖者の灯
 美しい淡い画となるフルムーン
 見惚れてる淡いベールの似合う女
 雷光に眩んだ後の闇の道
 淡雪へふと出稼ぎの父思う
 先生にただあこがれた淡い恋
 侘助がぼつんと淡い雪の上
 淡雪が春の訪れ告げにくる
 日も眩む思わず拝む大西
 予期しない言葉に軽い立ちくらみ
 書けそうでなかなか書けぬ遺言書
 老いるとや納得せぬに年は暮れ
 厳しい日日終えて値打ちのある救い
 手作りに言えない好きを詰めている
 良い幹事飲めない人にも気を配り
 しんどいと口にすまいとああしんど
 むくむくと部屋の中から紅葉狩
 言い足らず悔いが残ったままでいる
 お返しは笑顔でいいのボランティア
 あったかい人だ騙されそうになる

岸和田川柳会

原 さよ子報

忠 新太郎
 昭三 文
 嘉彦 石舟
 房 朋月
 美代子 美籠
 松煙 孝一
 和子 春蘭
 五月 歳子
 二英 正和
 千代 弘子
 和 美
 力子 基
 狸 房
 枝 村

証人台記憶にないと見苦しい
 本心をあらわに見せる遺産分け
 言訳で終る陳謝の見苦しさ
 無意味だと勉強しない反抗期
 ママさんの無意味な愛想おほほほ
 無意味だと知りつつ手相見て貰う
 他人から見ると無意味なコレクシオン
 意味のない買物をして憂さはらす
 珍らしく社長ニコニコ肩たたたく
 珍らしく妻が美人に見える夜
 煩惱は底無き欲を追い求め
 勝てそうな相手求めるへば将棋
 求められ嫁ぐ娘のいい笑顔
 愛想良く票を求めてうぐいす嬢
 青い鳥求める旅を続けている
 お薬師の救い求める墨をする
 求めにも誠意を見せぬ北の国
 珍らしい友から電話市長選
 S.Lを珍らしがってはしゃぐ孫
 靖国へ参らないでね小泉さん
 九条が求めたものを共存知か
 煩惱の答求めて鐘をつく
 若者に席譲られた阪和線

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

さよ子 小雪
 みよ子 大輪
 蛙 城 さつ子
 香代 精子
 笑司 紀久子
 ゆい よりこ
 幸子 朱夏
 植代 和子
 穰一 英子
 珠一 富美子
 洋 輝子
 守 怜
 岩夫 和香
 みね代 豊太
 寿海 裕美
 みつ江 三男
 東吉 正博
 清 准一
 野添 克子
 文夫 三喜夫
 ダン吉 よしこ
 仁 佐一
 呂万 保州
 緑良 夕胡
 あきこ 稚代
 寿子 順子
 泰女 緑骨

栄転に早送りするカレンダー
 生き延びて今年も掛けるカレンダー
 新しい命をもらうカレンダー
 花マーク私だけのカレンダー
 フルムーン大安の日にきめました
 掛け替える古い柱の農曆
 鐘の鳴る丘がわたしの原点に
 未知数の鐘へ元気をたくわえる
 長崎の鐘に涙がついてくる
 ビリオドを竊う鐘で年括る
 世直しをしてくれなにか鐘の音よ
 鐘を撞く恥も誇りも揺れて精
 千手観音すがる心に響く鐘
 入相の鐘へ母さんまだ来ない
 小泉をすばと斬った屋台酒
 屋台曳く章が光っている自伝
 老舗まで二人で引いて来た屋台
 きみとなら悪酔いしない屋台酒
 もう来ないあなた待ってる屋台酒
 行きつけの屋台で今日も吐く気炎
 同じ酒屋で飲むと違う味
 屋台酒呑めば苦業もシャボン玉
 処方箋あくせくしてもはじまらぬ
 本当の蟻はあくせくしていない
 あくせくしても飛べない水たまり
 あくせくと働いたって同じ明日

はたる川柳同好会

水野 黒兎報

疑惑の底は深くなかなか頭れぬ
 小 雪
 大 輪
 さつ子
 精子
 紀久子
 よりこ
 朱夏
 和子
 英子
 富美子
 輝子
 怜
 和香
 豊太
 裕美
 三男
 正博
 准一
 克子
 三喜夫
 よしこ
 佐一
 保州
 夕胡
 稚代
 順子
 緑骨

絵手紙はなかなかの出来子の便り
冷える世の愛ひと文字にはっとする
歳月をほめると私消えていく
記念樹を持ってあまして終の庭
形見分け狙った品をゲットする
分け前に不満口止め絞ひる
幸せになかなかなれず姉痴呆
あと五年生きるつもりで打つワクチン
走り行く歳月の日々早すぎる
歳月を重ねた皺の持つ深さ
歳月という汽車の旅駅僅か
歳月の重さを胸の底で知る
優しそうに見えてなかなかきつい人
なかなかの意見だけれどハイお次
隅にいてあれでなかなか食えぬ義母
歳月も時には待てと大あくび

三幸川柳教室

古久保和子報

勇氣出る言葉毎日言うている
ピリ走る倍の勇氣を出している
ノーと言う勇氣が変えてくれた道
戦争を語り継ぐにもいる勇氣
白旗をあげて時勢を読む勇氣
ちっばけな自分を曝け出す勇氣
告げるのも聞くのも勇氣いる告知
崖つぶちなたてば意外と出る勇氣
寝不足へ頭のねじを巻き直す
七十路へ巻き戻したい過去ばかり
赤い糸巻いた小指とする喜劇

雪子 桂子 契子 春代 正三郎 信男 勇治 柳童 長一 黒兎 よしろう 久子 昭子 見清 いさむ 勝 桂香 幹子 靖子 昇 町子 次根 保州 武 信子 イセ 宏夫

寂しいと包帯巻いてみたくなる
ネジ巻いた朝の音ですネギ刻む
六十年巻き戻したらケチになり
巻き爪に似て言い過ぎが痛みだす
新聞の隅に善意が少し載り
駅前で頭下げてる募金箱
献血の善意で生命取り戻す
一日一善先ず足元の拾う
トラウマになった善意と対峙する
お金出すことが善意という誤解
無人駅の一輪挿しも秋になる
好きだからみんな善意に受け止める
森を出てこの青空を何とせん
残照の森にユーモア弾ませる
森の耳真つ先に聞く月の愚痴
秋の森歩くなんでもないひとと
結果論ばかりで森を抜けられず
森を出て人は汚れた靴を履く
森を出て住所不定になるカラス

八尾市民川柳会

宮西 弥生報

枯れる日を決めて向き合う白い菊
覗き見たカルテにチェック多すぎる
コスモスの出合いが叶うまで歩く
叶うなら命百まで鶴を折る
無一物曇と遊んで青アセント
究極のグルメは母の炊くご飯
この殻を破ればきつと春がくる
チェックする者が世間にチェックされ

登美代 幸 一歩 起世子 かすみ 孝義 義男 当代 三千子 公子 朱夏 准一 みね 徑子 章子 智三 和子 千秀 シマ子 幸生 弥生 秋雄 ますみ 耀一 風 浩三

食後の菓飲むためご飯食べてます
釜飯のちよつとこげてる人情味
握りめし一番後で指を食べ
母さんがチェック魔になる年の暮れ
母のお百度願ひ叶うた退院日
看板にめし大阪の匂いする
手応えを求め余生の道歩く
パチンコ屋多忙なはずの人がいる
笑いじわ一つふやして年の暮れ
街が濁っている打ち水で鎮める
満足の客を笑顔で送り出す
まんまん和海を湛えている笑顔
納豆の粘りがとてもいい朝だ
一升を炊いた事ある釜がある

尼崎尾浜川柳会

山田 耕治報

いい嫁にされて自由を奪われる
気が合わぬ妻が親父と馬が合う
やぶ椿人目を避けてそつと落ち
息のあるうちに極楽見てみたい
冬の陽を無口な犬と日向ぼこ
形見分け椿の柄が生きている
極楽に行きたい今から何をしよう
貧しかった優しかった父母がいた
潔よく首から落花する椿
踏まないでまだ息している紅椿
シャイな椿見栄をはららない花言葉
極楽と母は天下の仕舞風呂
チルドレン女豹もいるぞ気をつけろ

直子 宏至 春蘭 加津子 貞雄 ダン吉 民 まつお 芳香 定男 柳伸 欣之 千里 美代子 晴美 五月 朋月 きよし 耕治 よしこ 昭三 美代子 亀与子 里江 孝一 正治 義芳

敵に吠え味方に吠える犬の性
威勢よい時は運勢気にしない
兄が居てふる里便がまだ届く
誕生日来てまた齡増すばかり
年金と病をネタに立話
落ち葉舞う過がとりまく待ち合わせ

はびきの市川柳會 徳山みつこ報

父ちゃんに似てる鏡と睨めっこ
核家族親父の居場所薄くなり

まあパイ位牌の父と分けて飲む
父の日がフロクのよと分けて飲む

くすのきが父の形で立つ故郷
一生を通して父の背に学ぶ

大きな岩だ父さんに似ているな
ミニールですサンダルなんて言わないで

サンダルを詰める南の旅かばん
サンダルを履いて女のクールビズ

貯金高主の僕は知りません
法の網巧みに抜けている主犯

あるじ無き山茶花伸びて咲き放題
あの部屋の主はニートであつたとか

主導権執つた男の面積え
一度だけ亭主閑白してみた

落とす主現れないであと三日
落とす主届けられない訳がある

家主さんと一度呼ばれてみたいもの
別姓の妻を主人と立てておく

若いので毛布にパッチいりません

鹿太 美籠 桃花 江美 全彦 求芽 吐來 一壺 悦子 敏 美代子 久仁子 一知 かつみ 喜久子 庸佑 猿杓 美喜 美喜 昭平 اياさお 志洋 惠勇 真一

いい夢を花の毛布で待つてます
被災地に生命の毛布行き渡る
暖かい電気毛布で寝過すわ
ひとり寝の毛布へ猫が添寝する
寒の入り毛布一枚増えている
犬小屋へ毛布を敷いた雪便り
毛布つけて小犬養子に出してやる
赤ちゃんの毛布楽しい熊二匹
老父母へ電気毛布の柄違い

川柳若葉の會

宮崎シマ子報

ポリシーを持つているから靡かない
靡かぬと青い小鳥に逃げられる

どんぐりに靡かお池のどじょう達
白旗を靡かせて行く老いの道

無理するなすなすなど言うが何せぬ
何もかも無くして命だけ残る

風に乗る風船もまた旅が好き
道徳のくすれ日本のせむらぐ

老いの役いちようの落葉掃き清め
合鍵を貰つてからの至近距離

うぶみ川柳會

小谷美ツ千報

大晦日どうせ紅白見つつ寝る
銀杏髪汗と油と血が滲む

空腹が健康診断してくれる
今の児に空腹などが分るかな

おもしろいどうせ駄目なら引いてみる
どうせ皆灰になるのに欲を出す

りつえ フジ 静子 泰子 章司 重人 ダン吉 ヨシ枝 六点 能子 シマ子 喜美子 あずき ますみ 欣史子 慶子 香住 弘直 加津子 くに お かつみ 黙光 天雀 芳江

私はどうせと言うの大キライ
空腹に流すご馳走突つ走る
どうせなら悔いの残らぬ介護する
アツシーは頸の動きを見逃さぬ
声援に応え頸から走りこむ
頸足の付いた招きがきな臭い
惚れ込んだ思いが滲む火の手紙
どうせビリいやもしかして紙一重
蒼天に頸を支えている独り
空腹になれる五体に感謝する

しし舞の頸に噛まれたやんちゃくれ
しみ出る喜怒哀楽でござんしょう

日和見が過ぎたか福が逃げ出した
空腹の子に届かない庭の柿

焦らされも焦らしもしない雲の上

高知川柳社

川竹 松風報

根回しの効いた好意に助けられ
募金箱入れる身銭が渋くなる

ご好意に甘えタダ酒飲んでる
ご近所の好意いつしか住み慣れる

石段の老いに手を貸す宮参り
好意とも思うが紐が見え隠れ

お誘いは老人会を待つていら
虫好きの掃省の孫に守りいらす

虫達に早くお逃げよ除草剤
夏休み終了虫籠開けてやり

ます虫が試し食いする無農薬
真夜中に知識を食べる本の虫

和子 京子 龍枝 節子 あづま 天人 季芳 美ツ千 きみ子 重忠 螢 ひろこ 完司 石花菜 愛宏 暖 孝雄 悦子 功 快風 幸 美々 京子 圭風 三郎 まき子

鈴虫よしつかりお鳴き冬はそのこ
やがて来る春へ養虫風にゆれ
人生の無常奏でる秋の虫
泣き虫も今では二児のパバになる

川柳塔打吹

大森 孝惠報

気ぜわしい師走の音があちこちに
雨の音夫婦話を聞いている
音なしは無事の知らせか怠げ者

善江 滋

ガサガサモソモソ私の生きる音
心音を聞いて桜の春を待つ
街角に立てば季節が変わる音

三津子 和枝

河川敷の不法投棄は許されぬ
許す許さぬ言っておれぬ歳である
ワンちゃんが上目遣いに許しこう

京子 完司

表向き怒って裏で許している
人間のエゴにも神のお許しを
気を許す友と今宵も縄のれん

克枝 美美子

許す気の海は静かに凪いで来る
年金の許す範囲でおしゃれする
徳久利が花瓶に化けて花一つ

節子 清

催促は徳久利寝かすコップ酒
入れ替えのできる脳ならお徳用
お徳用チラシの中をかき分ける

富恵 義人

徳久利の主は天国さみしいね
人のため世のため徳を叩き売り
御法話は短い方が徳がある

玲子 和子

徳のある柿は品よく木に残る
雪しんしん桃源郷は湯気の中

貴恵 和子

露天風呂湯気が邪魔する肉体美
美人の湯湯気でかすんで皆美人
かじか鳴く湯気立つ宿の喜寿の宴

美知江 照彦

豆腐屋は湯気の中から返事する
お茶の湯気仏に届くまで拝む
湯気立つ盥の中にデビューした

芳光 照彦

歳月が許してくれた親不孝
川柳塔まつえ吟社 三島 崧丘報

大金を抱いた財布の不眠症
財布には亡妻の写真をいつも入れ
年金が入り多弁になる財布

木枯しと戻る置き忘れた財布
良心を厚い財布が叩かせる
シナリオを立てて一人をもてあます

人生のシナリオ狂い蛇行する
木枯しが吹くとシナリオ宙に浮く
シナリオの船は密航船らしい

シナリオの中ではいつも主役です
シナリオが右へ右へとカーブする
坂道を転げて落ちるタンゴ虫

寝転んで六帖一間の小宇宙
転がって流れを少しずつ変える
転ぶ程そつと拾ってくれた人

ダルマさん転んだことが一度ある
酸素素きれ今日は屋台の灯に転ぶ
つくづくと今の世相を思い連る

生き延びてつくづく思う運不運

禎元 紀美恵

久芽代 重忠

睦子 石花菜

孝恵 蘭水

つくづくとふるさと恋し母恋し
太陽と月はつくづく仲がよい
つくづくとつかずはなれず来た八十路

つくづくと昨日を過去ににして仕舞う
残るのは真つ直く生きただけでよい
幸福は残すものなど無い呑気

聞き流す耳にそよ風だけ残す
カレンダー残る思いに丸じりし
年頭のプラン今年も積み残す

福などはないが残ると気にかかる
南大阪川柳会 吉川 寿美報

心ない人が噂の種をまく
慈しむ種はせつせと答出す
春時きの苗床作り夢みつ

キュービッド恋の火種を蒔いて行き
良く笑う子が幸せの種を蒔く
打ち明けて笑いの種にされている

種をまく楽しみ待ってる花の色
スキヤンダル種は尽きない週刊誌
争いの種はぼたんの掛け違い

話の種尽きぬ湯宿の夜が白む
愛になりそこねた恋が眼にしみる
残り火に女の性がくすぶって

燃え盛る恋に無粋な雨がふる
断ち切れぬ未練くすぶる火消壺
好奇心が一途になっていた頑固

慈悲いちぢ女医が渡った鳥は過疎
いちぢさに天狗の鼻が赤くなる

邦代 小鹿

房子 螢

長吉 幸子

知恵子 注湖

注湖 崧丘

崧丘 紅

千鹿 柳伸

柳伸 夕カ子

夕カ子 更紗

更紗 ひさ乃

ひさ乃 弘子

弘子 弘泰

弘泰 直子

直子 庸佑

庸佑 欣子

欣子 アキラ

アキラ 柳弘

柳弘 利昭

利昭 朝子

朝子 萬子

萬子 雅文

雅文 重人

重人

人形ひとすじ魂宿すジュサプロ

負け犬の理屈も筋は通つてる

理屈より効き目が早い鉛と鞭

理屈こねのらりくらりと村談会

理屈はきかずにあつさり出してやり

理屈屋の御隠居今は達磨さん

新旧の理屈が渡る丸木橋

赤ちゃんはちゃんとポーズ知つてゐる

だんじりの屋根でポーズのやり直し

どのポーズしても歳には勝てません

最高のポーズでポチのお出迎え

先輩のポーズをまねて酒タバコ

終章へ菊はいちずに匂い立つ

岬川柳会 八十田洞庵報

大根突き北風荒ぶ紀三井寺

年の瀬を一人鍋して乗り越える

北風に舞いつつ旅をする落葉

異状なし医者一言に蘇り

ふところも北風ビューと吹いてます

異状なくまだまだ弾む古時計

貧乏で育ててくれて有りがとう

歳重ね記念の品もお蔵入り

北風に耐えて山茶花咲いて散る

質問も鋭さ消える返り咲き

北風を受けて男のたのもしき

水仙の香り匂わす比翼塚

なりゆきで断り切れぬ役のくじ

当てにして何時も当らぬ宝くじ

寿美

集一

清成

千梢

日出子

とし子

修

章久

三男

なぎさ

たもつ

志華子

和香

富美子

倅子

みやこ

桜琴

令子

洋子

里子

年子

茂平

蛙城

洞庵

悦子

四郎

北風と輪唱して枯すすき

北風へ話はずむ困炬裏端

電線の鳴る夜は鍋と決めてゐる

北風の止むのを待てぬ私です

気配りのきく妻留守で背のびする

川柳ねやがわ 森

窓開けて手を振る妻が愛おしい

犬飼つて家族の愛が丸くなる

病床の夫へ黙つて手を握る

母さんの愛はまるくてあたたかい

代々の愛に応える長寿して

生まれてずっと死ぬ間際まで母が好き

とほけてるようで胸刺す父の喝

居てほしい嫁いでほしい親ごころ

子を生んではじめて親のありがたさ

雲に聞く棚田を守る親のこと

おこる時おこつてほしいお父さん

とびこんだ屋台で誤解を解いている

トレトレの噂を持つてくる屋台

いい匂いまた通せんぼする屋台

屋台では軽い話が似合いそう

マージャンの音へチャルメラ寄つてくる

この坂を越したらジャンプしてみよう

ハードルを下げてジャンプする余生

ジャンプして少年夢を膨らます

何時ジャンプしたか親を超えていく

ジャンプしかなないトンネルを抜けたから

仲直り野菊一輪あればいい

珠子

貞夫

和実

とみ

房枝

茜報

三郎

日出子

博泉

朝子

かすみ

弘一

勲

仁清

弘風

洋

たもつ

亜成

とし子

修

ルイ子

度

てまり

庸佑

いつふみ

利昭

西

ただよし

野心など持たぬ野菊のいい素顔

白菊は正論ばかり吐かされる

いつもいつも未来指向をもつ野菊

古き良き文化を繋ぐ困炬裏の火

靖国も文化の違いでは済まぬ

文化祭お好み焼きを食べました

本だけを読んで寝ころぶ文化の日

文化人と呼ばれ手酌の席になる

川柳塔のぞみ 播本 充子報

生き方を変える気はないカタツムリ

九条が変わることにはノーと言う

酒飲めば個性豊かな人ばかり

変人を天才にする評論家

誤発注臨時出費も桁はずれ

鉢巻の二浪の子にもやつと春

かけ軸を替えて心が洗われる

やれやれと振り返つたら定年日

戻つて来ない時間を追つて十二月

珍客に心を込めて茶を立てる

子が巣立ちやつと和らぐ妻の背な

一日のノルマ労る縄のれん

頂上のまだその上に展望所

湯気の立つ鍋を囲んだいい話

製造のシステム盗む臨時工

やれやれと戦い出ない男たち

お風呂場に暖房入れて同居する

変ですか父が洗濯しています

男子誕生女系にでかい虹が立つ

一風

恵子

弥生

集一

勇太郎

高栄

桂作

ダン吉

充子報

千里

一步

文子

つよし

勝

光久

那珂子

やすお

美代子

リツ

恭昌

権悟

保州

康子

順風

ダン吉

方子

妻子

桃葉

三億の臨時収入ある予定

九条が変るやなんてどないしよう

一桁の生さざま少し変えなさい

表札を息子に変えて荷をおろす

葉飲む義母に湯ざまし用意する

平凡に暮らし変装などしない

臨時でも良く知つている労基法

ぬるま湯にどっぷり未来図がふやけ

車椅子押しして押されて陽が沈む

川柳塔きやらばく

福代 天雀報

宴席の箸もしだいに酔うてくる

見上げては愚痴漏らすまい秋の月

自慢するものなく人生終りそう

肩なでる風の情けを真に受けて

亡き友の顔思い出す菊花展

良薬と聞いて苦さを飲んでいる

恥を知る帽子を神の樹に吊す

欲はつてまた遠くなる父の声

菊の花気品のよさは日本一

母さん元氣亡停の電話もう来ない

花の虫の中にもある命

熊さるもほんとは森が食べたくて

雨風にさらされやと辛を抱く

点滴の雲命の灯がともる

かくれんばすくに見つかる金木犀

消毒のおい身に染む医者通い

櫻紅葉ここから冬は足速に

どの雲もはなれて見れば美しい

由一

朝子

哲男

俣子

哲代

重人

慕情

充子

詠路

天雀報

なみ

恵子

天雀

てい子

蘭

すみえ

瑞枝

富美子

雪江

紫泉

ゆき

ふみ

玲子

やえ

寿々子

那珂子

日枝子

千春

白鳥が冬到来をつけにくる

他人様の手を借りながら永久の旅

影絵では指がきつねやとりになる

とりあえず昨日の釘を抜いてから

サークル檸檬

吉田あずき報

懇ろな地図をもろうてまだ迷う

懇ろになつても吃水線はある

木枯しの中山茶花にほほえまれ

ねんごろになる歳月をあたためる

ねんごろに葬つてやる犬の墓

妻が余した葉で治る風邪ですみ

究極のねんごろ思う土饅頭

無防備な顔寄せ合つて鍋囲む

お育ては懇ろなるや阿弥陀仏

匿名でねんごろ告げる怪文書

ねんごろな言葉で傷を撫でにくる

思い出し笑いに貰い笑いする

一期一会ねんごろに生きている

成行きにのつてみるのも悪くない

ねんごろな挨拶ねんごろに返す

近道の所どころに落とし穴

城北川柳会

吉岡

神無月それでも神社鈴を振る

音のない鈴を振つてる人生譜

真つ先に畑振る人に有る野心

秋風が尻を振りふり逃げてゆく

未練も振り切りました冬の薔薇

亜弥

春枝

章江

千代

義子

あずき

いわゑ

希久子

正坊

棲世

たもつ

千代

哲夫

遠野

楓楽

房子

扶美代

美籠

みつ子

光久

修報

高栄

千里

順三

朝昭

朝子

やけくそのように鈴振る神頼み

鈴を振る刻は素直な顔になる

誕生日笑いたいけど笑えない

笑い袋一杯にして今日暮れる

全身で笑える人はいい人だ

小言等笑つてよける嫁の技

ほっほっほ笑つてうまく過去を消し

笑い茸食べたつもりじゃないけれど

明らかな嫁が家風を変えてゆく

笑わずに聞いてくれると言つたはず

笑いにも死角が一つありそうだ

変なところで笑い誤解の種つくる

豪快に笑つて人を疑わず

合コンで僕一人だけ余つてる

身に余る借金背負う怖いビル

レジへ来て思い出しする買い忘れ

心まで抱いて下さい握手して

なんとなく用事が溜まる忙しい

恋人がころころ変るEメール

深い傷踏いで深い仲になる

民の声からずれている天の声

寒い日は俺の出番と鍋奉行

新しい家風は嫁がきて作る

鏡よ鏡嘘ついてくれないか

老夫婦だけかと思うゴミの嵩

川柳塔みちのく

小寺

飢えた国飢えた子が飲む天の水

酔い醒めの水で人間取り戻す

倫子

とし子

あやめ

春蘭

たもつ

美智子

桂作

昭子

ひさ乃

和夫

ただよし

萬的

集一

利昭

一步

達子

ルイ子

タカ子

志華子

郁夫

正弘

風

はじめ

典子

重人

花峯報

洋子

あすなろ

遠い日のスキー八甲田晴れていた

楽天に古希の監督期待され

急斜面狐疑逡巡をやつと越す

写経して煩惱一つ消して来る

ふるさとの思い出遠く竹スキー

納屋の隅遺品となつた子のスキー

やどかりの暮らし他人の宿に住み

ふつされた僕をシャンツェから翔ばす

風を得て今K点をクリアする

三分で僕の笑顔ができあがる

いつの間に一升瓶が昼寝する

兄ちゃんの乗つたスキーが馴染まない

雄一郎にあやかりたくてスキーする

極楽へとんばは飲みに行つたきり

夢売りと飲む珈琲の苦いこと

富柳会

池

森子報

五楽庵

彦次

仲雄

あかり

正典

冬虹

一慧

和代

淳子

浩子

深雪

台風の眼となる風の子がいない

ふる里も虎フアッションでたつ案山子

熟柿むさぼりて獣の貌になる

深みゆく秋ひたすらな木守柿

刺を抜くあと一本がままならぬ

ふと我にかえつた時の冬木立

台風一過そして残つたのは私

ふる里の森で昔の絵を探す

大空と握手してからよく熟れる

台風一過みんな元気で何よりだ

熟れ残る柿と明日の語をつなぐ

そのことに触れず裏木戸開けておく

君の森わたしの森も秋の中

それとなく気を遣つてる目に出遇う

金魚には金魚の掟尾を振つて

寺内町冬二露子が浴衣がけ

旅ひとり夢をふわりと着ています

裏切りのはじまり風が生臭い

人間の部品を試す朝歩き

覚め際に森は木漏れ日を与える

倉吉川柳会

竹信

照彦報

マンシヨンはキャンセル木質宿にする

マンシヨンの設計擬装なすり合

あれよあれよと増える欠陥マンシヨ

マンシヨで腰の据わらぬ日がつづく

息子たち今はマンシヨン買うでない

マンシヨが偽造行き場の無い不眠

手抜きしたマンシヨン知って住む恐怖

本当に腹がすいたら鬼となる

罪もない子殺したのは本当か

本当に一晚お湯に漬けて見る

より子

巳代一

扶美代

奏子

紅紫朗

信子

宏至

鬼焼

奈保美

アキ

萩乃

ひろこ

夕子

アキラ

初太郎

欣之

森子

石花菜

和子

龍枝

康子

勝誉

日出子

京子

重忠

次男

季芳

本当は心細いと老い二人

死ぬ時を追いかけている本当に

本当はせつない恋のストーカー

雀の果朝はにぎやか本当に

とこでと座り直してからのこと

やんわりととこであんた独身か

とこでと立ち上つたがまた座り

乾杯のところ逃げた自由席

欲張つたところで余命あとわずか

とこでと開き直つて母元氣

昏ドラを見たところで客が来る

ほろ酔いのところでもゆるよい父だ

嘘つぱち耐震データ国揺れる

築百年耐震データ自信あり

吾が脳にいらぬデータ詰まつてる

データに酒が好きだと書いてある

あぶないぞメディカルデータさやいた

町村の合併データ抱き合わせ

効能のデータ太い字で誘う

とこでと云つて予先俺に向く

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

風船を膨らましてはくじを買う

シナリオに味付けをする名演技

穴当てでからシナリオが寝いだす

大黒柱ふわふわ出来ぬ兒の寝顔

時刻まで逃げおおせても罪は罪

もう少しゆつくりさせたかった父

(前)喜美子

螢

悠子

修

よしえ

賀寿恵

萩江

睦子

茶子

秋草

風露

醉芙蓉

和枝

鬼一

泰輔

かつみ

玲坊

小生

祐子

照彦

啓生

庸佑

重人

春

和子

タミ

幸雀

廃校の樹にゆつくりと陽が沈む
 手間かけた料理素早く平らげる
 生きているのもしんどいね冬の蠅
 神さんのシナリオ通り生きてます
 極楽がまた近くなる除夜の鐘
 幾星霜時効は来ない敗戦忌
 たかが三億くらいと法螺をふいてみる
 仏壇もチンのご飯か年の暮れ
 冬の虹オーロラのように吸い込まれ
 ふり出しに戻るばかりの句読点
 幻想が恋のシナリオ連れてくる
 損をした話は皆が聞きたがる
 シナリオの通りならぬ暮れの銭
 時効だよ言うて握手の温かさ
 ゆつくりと歩けば風も凪いでくる
 生き下手でためらい傷のある時効
 独り居へ無事かと月が覗きこむ
 筋書がなくて弾んだ披露宴
 シナリオを外しアドリブ受け狙い

いずも川柳会

佐藤

萬の 寅次郎
 尚士 勇治
 求芽 尚士
 石舟 美義
 巴子 玲子
 早人 見清
 知香子 郁子
 正坊 隆
 満寿巳 則彦
 緑骨 則彦
 治代報 則彦

転がってもう戻れないガラス玉
 白を足し浮かび上つて気づかせる
 包帯の白さに毒が抜けてゆく
 玉手箱見えぬ所に置いてある
 真っ白な明日に何と綴ろうか
 悔い一つ流し私を白くする
 冷や汗の向こうに母のフラダンス
 計算が合わぬラーメン伸びている
 もう背伸びびしても掴めぬカタカナ語
 追伸にほろりとさせる文字がある
 蓮の葉の上で抱き合う露の玉
 箏太鼓下手で大蛇が踊られぬ
 空白のページ未来が伏せてある
 うっかりと心許した赤いばら
 液晶の玉は後ろを振り向かぬ
 白いこと白と言えずに五十年
 踊らせてやろうか僕の手の中で
 わたくしを晒すに残る白い骨
 赤い靴悲しい話語り出す
 核心に触れると赤い血が騒ぐ
 玉碎の鳥に可憐な花が咲く
 菊人形膝のあたりが伸びている

むらくも川柳会

毛利

歌子 徳子
 喜子 満江
 玲子 好子
 左余 蘭水
 富恵 寿美
 昌枝 多喜
 房子 文子
 美佐子 まこと
 きみえ ちかし
 多賀子 茂美
 章峰 幸報
 克子 信夫
 定子 英男
 彰

いらいらがストレス生んで流れ出す
 いらいらを隠して皮肉な言い回し
 待つ人をいらいらさせる臨時使
 茶柱が希望もたせてくれる朝
 七五三可愛い孫が客となる
 走り出せ運は後からついてくる
 川柳に命かけてる我が一生
 紅葉狩山路訪ねて湯の里へ
 さわやかな風をベダルに桜土手
 一言がやたら気になる日記帳
 香水もはるかな香りはればれと
 嬉しいと素直に言えた日の感謝
 孫二人何かにつけて大笑い

川柳クラブわたの花

井尻

女房の手の平泳ぐ定年後
 子育てへたとえ手心えなくっても
 長い坂あなた一人じゃありません
 掛け軸の汚点意外なアクセント
 背なを押す妻と人生泳ぎ切る
 もう何も贅沢言わぬローヒール
 ギンナンが底に隠れてませごはん
 星空に沈黙の声聴いている
 精進は手心え掴む夢がある
 金出せば買える四ツ葉のクローバー
 アスファルトから大根スイカド根性
 人恋し夜長に猫も腕枕
 欠点を隠してしまいうい笑顔
 年末に三億入る予定です

幸 美保
 安男 恵美子
 ます美 義良
 明朗 昭子
 昭子 喜美
 伊千子 伊千子
 ふさえ 節江
 民報 はじむ
 ミツ子 君江
 宏 一風
 欣子 幸枝
 晴美 俊子
 浩三 浩三
 (本)たえ子
 (赤)妙子
 ますみ
 いつふみ

寒い夜これから旨い鍋に酒
 カラフルな落ち葉浄土になぜ急ぐ
 これからの事は聞かずに信じよう
 飾らない素朴な人に気も許す
 やがて冬破れジーパンに掛かる
 スタートはいつでも妻はまだ化粧
 寒空に紅葉黄葉が暖かい
 弁解の口が味方を遠のける
 年老いて手心なしの喧嘩する
 チルドレン早くも大臣狙つてる

翠洋会 谷口

義明 正坊 捷也 集一 昭 満作 会美 さと美 千梢 すみ子 理恵 春 絹子 水昇 蕉子 志華子 桃花 久峰

年金がことわりもなく減つていく
 小包を解くと飛び出すくに詠り
 空襲下の愛の証の子も六十
 苦手には強気の言葉出てしまふ
 冷え込めば体が呼ぶよ鍋料理
 笑つてた人が突然御葬式
 戦いを終えた夫を待つおでん
 年の瀬にひっそり畳む小商い
 簡単に大事なことを決めている
 記憶力減退と書く日記帳
 マリア様祈る少女の目がきれい
 戻れない歳月があり旅続く

川柳工ス木 山本 三郎報

照子 正雄 恭昌 孝一 れんげ 舞夢 富子 尚士 義 美籠 みつ子 希久子

ほろ酔いのほほに木枯らし気持ち良い
 木枯らしも財布も寒い十二月
 木枯らしに落ち葉クルクル色の舞い
 給料日外は木枯らしキムチ鍋
 木枯らしを踏みしめてゆくひとり旅
 木枯らしに身をすくめてる青テント
 老いたとて顔は表札ヒゲを剃り

川柳さんだ 北野 哲男報

ゆき子 とし子 よねぞう 一幸 星花 ルイ子 団地 雅司 歳子 順子 キヨミ 朋月 忠 藤朗 哲男 開子 一之 二英 正和 かりん 好 朋月 なぎさ みつこ 半銭

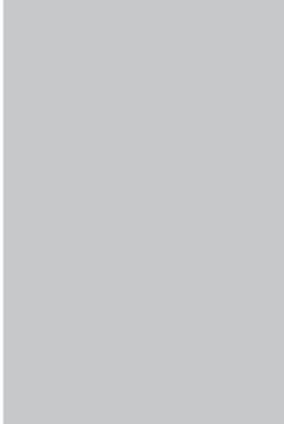
あか柳 つき会

日時 3月3日14時、国労会館
 兼題「激励」「背負う」「願ひ」
 投句先 〒599 阪南市箱作1586
 14-102 森村美花宛

職降りて脱力感の心地好さ
 仲の良い夫婦にもある持久力
 この力冷凍保存出来まいか
 仕事より力が入るタイガース
 力にはなれぬが笑顔なら貸そう
 ひと言を足したばかりに波が立ち
 人間を憎んだ時の集中力
 翔ぶ気ならいらん力はぬきなはれ
 波風が立ちそうなので鮎配る
 女手で五人育てたよいとまけ
 神棚へひとまず上げるのがルール
 強がりの裏で神様仏様
 仲の良さ神様だつて嫉妬する
 知恵比べ力競べはしない主義
 老優の背なでもの言う演技力
 陣痛に耐えた母にはかなわない
 肚の底明かせば手立であつたのに
 焦らずにバイオリズムの為すままに
 妻の居ぬ日には波立つこともなし
 政変の波に漂うチルドレン
 神殿の一番奥が見てみたい
 村人を癒す祠の中の石
 ライバルの直球肚に突きささる
 肚の中見えているから頼まない

惠勇 日の出
 蕨 時雄
 鐘造 鍾子
 俣子 扶美代
 つづや 五月
 潤子 潤子
 よりこ 梓
 文 公誠
 玄也 千代
 八千代 泰子
 像山 山
 りつえ 篤子
 深雪 冬虹
 さくら さら

せんりゅうくらぶ翔 3周年記念集会
 川柳句集「夢」宮村 典子
 「希望」倉田恵美子 発刊記念
 日時 4月8日(土) 10時半開場
 場所 亀山市「石水苑」(JR亀山駅5分)
 会費 2千円・昼食千円(別途要予約)
 事前投句(欠席投句拝辞) 3月10日迄
 (共選)「生きる」鬼 香・川上大輪・久野陽子
 植原富美子・本城恵美・前田照子・森勝子
 当日句 締切12時 披露13時半
 「燃える」 中川 正春選
 「ぐんぐん」 中山 恵子選
 「人間」 矢須岡 信選
 「薔薇」 木野由紀子選
 懇親宴 16時、4千円 要予約
 投句先 〒519 亀山市関町木崎1559
 倉田恵美子
 問い合わせ先 電話05955-82-0586
 宮村 典子



原稿募集
 薫風名誉主幹を偲ぶ
 平成十八年四月二十四日、一周忌を迎える薫風名誉主幹をあらためて四月号で偲びたいと思います。先生の思い出、エピソードなど同人のご応募をお待ちしています。
 締め切り 2月10日 本社事務所宛
 本文400字詰原稿用紙1枚半、2枚(600字、800字)タイトルは別につけて下さい。
 ただし原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。
 編集部

各地川柳会代表者会
 日時 2月18日(土)13~16時
 場所 アウイーナ大阪
 4Fマーガレット
 案件 誌友拡大プロジェクトチーム
 小冊子の活用・その他



本吉宗光さん さようなら

小西雄々

昨年十二月二十七日の午後、本吉宗光さんの家族から「父が亡くなりました」との電話を受け、「来るべき日が遂に来たか……」と、胸の詰まる思いであった。最後にお会いしたのは昨年の六月で、その後九月に二回お伺いしたが不在であった。

ところが九月二十二日、長女の洋子さんから、病状を知らせる書状が届いた。それによると「七月末から国立病院米子医療センターに入院、検査の結果肝臓癌で九月に入り、抗癌剤の治療を受けた後、寝たきり状態になった」とのことであった。

早速お見舞いに参上したが、思っていたより元気で、四階の病室でご迷惑にならぬ程度の時間に、川柳の話と激励の言葉を掛けて辞したが、これが残念なことに今生の別れとなつてしまった。

宗光さんは「反骨というほど勇ましくはないが、父に正直に生きよと教えられ、利己主

義的な人には無性に腹が立つ。社会のため、人のためなら、自分の生活・家庭をもちえり見ず行動することもあり、家族には物質的な幸福感を味あわせずにすこして参りました」と、昭和五十九年に発刊した川柳句集「道しるべ」で述べています。これに対し「私の見る限り同君は温和な人である。しかし、事川柳に関しては独自の一家言の持ち主で、信念の人ともいえる」と句集の序文に澤車薬氏が記している。

昭和四十二年「いずもからさで川柳会」の会員となり、鳥取、島根両県の句会に出席し、その入選句と句会の雰囲気を克明に記録してあるが「できることなら私もこんな川柳会の会員になりたい」と、孤独な心の一端を句集から知らされた。

神戸生まれの宗光さんは、熱烈な阪神タイガースのファンであった。

村山の力投鯨潮吹かず

この句は宗光さんの初入選の句で、トラが大洋ホエールズに勝った時の句である。平成五年四月には、七名の同志と共に「米子にしき川柳会」を創立し、月例句会のあとは、全員でカラオケを歌い、楽しかった思い出は今でも懐かしい。この頃から数年間が宗光さんの、絶頂期であったと思われる。

十数年前には、ご令室を痛で亡くしているが、一層川柳と取り組み、弱音や泣き事は聞いたことがなく、意志の強さを内面に秘めた人でした。

川柳塔十二月号（No九四二）に発表された句が、最後になってしまった。

4Fの窓に明るさ取り戻す

この句は、四階の病室から久し振りに伯耆大山を見た時の実感句でしょう。

十七文字追いかけている半世紀

闘病生活の中で、なおも川柳を追う心に共鳴し、全快をお祈りしていたのに残念至極の一言に尽きる。

葬儀は十二月三十日午後、沢山の参列者の中でしめやかに行われ、連日の雪も止んだ。

「生者必滅」と言うけれど「嗚呼、悲しいかな」の一言につきる。謹んでご冥福をお祈りいたします。

貞實宗然居士

享年八十二歳 合掌

柳界展望

雲 武本 碧

○第32回堺まつり協賛秋の誌上川柳大会は、堺川柳会

11月号句報で発表された。

〈天位〉

天才の努力は誰も見てい

ない 河内 月子

万人の力を借りて生きて

いる 岸本 宏章

どんぶらこお椀の舟にふ

たり乗る 高瀬 霜石

認知症波が寄せたり返し

たり 土橋 螢

神さまの臍は真横に付い

ている 高瀬 霜石

肚くる残り少ない日を

数え 山本希久子

心音もお祝いしてるプラ

イダル 最上 和枝

○第47文芸まつり(和歌山

文化協会主催)は、11月23

日開催された。

〈産経新聞社賞〉

生かされて夢を描き足す

未来地図 上地登美代

〈文化協会賞〉

挫折して見えないものが

見えてくる 澤田 和重

○第23回東北川柳連盟青森

県大会受賞句

〈東北川柳連盟大賞〉

少年に翼をくれたのは

涙 高瀬 霜石

☆第25回川柳塔鹿野みか月

川柳大会は、12月4日180名

の参加で山紫苑で開催され

た。当日の受賞者

〈新日本海新聞社賞〉

食べない物があるので

まだ生きる 森山 盛桜

〈鹿野郵便局長賞〉

揺れている心を見たの

は擬宝珠 徳田ひろこ

〈株ふるさと鹿野賞〉

びっくり箱にある三百六十

五のとびら 小島 蘭幸

〈へじげおこし奨励賞〉

中原 諷人

▽出 版△

○川柳ささ百合(出口セツ

子会長)では、合同句集

「川柳ささ百合」を発売。

会員9名各15句ずつを掲載。

A5判40頁。

△同人動向△

○園山多賀子さん(同人・

出雲市)は、文芸誌「山陰」

に「くずかご文庫」と題し

エッセイを発表。

○中村れんげさん(同人・

大阪市)は、財団法人大阪

国際平和センターから12月

4日、感謝状を贈られた。

句文集「えにしつれづれ」

により戦争の悲惨さを次の

世代に伝えた功績による。

○木本朱夏さん(常任理

事・和歌山市)は、「川柳

オホーツク」12月号に「寂

しいレモン」と題し最晩年

の橘高薫風論を執筆。

▽計 報▲

□亀井皎月氏(同人・岸和

田市)は、12月24日帰省中

に逝去。81歳。

□本吉宗光氏(同人・米子

市)は、12月27日肝臓癌の

ため逝去。30日の葬儀はビ

アデルで執り行われた。82

歳。(追悼記事は114頁)

□中後清史氏(同人・和歌

山県)は、1月1日肺癌の

ため逝去。葬儀は1月5日

ベルホール中本で執り行わ

れた。77歳。(追悼記事は

次号)

▽訂正と削除お詫び△

12月号119頁下段2行目、

伊藤郁夫→伊達郁夫

1月号1121頁下段8行目、

朝三時津軽の… 11行目、

お隣の葬式… 12行目、妻

の留守…の3句を削除

114頁中段18行目、続編を持

つ→続編を待つ

常任理事会11月7日 出

席18名 ①950号誌上大会、

参加用紙の件その他 ②プ

ロジェクトチーム経過報告

(同人誌友部) ③各地代

表者会案件 ④規定改正

規則追加の件 ⑤その他

次回常任理事会11月7日

各地川柳会代表者会議113頁

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	14日(火)午後1時から 郵便・塗る・どっしり	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
高槻川柳サークル卯の花	16日(木) 正午から 大袈裟・信頼・いけず 余る・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸和田川柳会	18日(土)午後1時半から 赤字・活かす・伺い・絵馬	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳ねやがわ	19日(日) 正午から 拙い・地味・夢中・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳藤井寺	19日(日)午後2時15分締め切り 荷・ふわり	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
もくせい川柳会	20日(月)午後1時から 始める・お世辞・パワー 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳塔みぞくち	20日(月)午後7時半から おでん・昼・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
尾崎尾浜川柳会	21日(火)午後1時から 苦勞・ダンス・自由吟	尾崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尾崎市潮江5-2-47 田尻鹿太
川柳クラブわたの花	24日(金)午前9時半から 宝・誓う・誕生日 それっきり	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	25日(土)午後6時から 雪・ベン・本気・十手	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市民会川柳会	26日(日)午後1時から おどおど・蟻・池 「ホルモン」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	26日(日)午後1時から 戦場・ゼロ・一途	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	27日(月)午後2時締め切り 髪・冷える・悲劇	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
南大阪川柳会	28日(火)午後6時半締め切り 現金・ぎくしゃく・握る 人相	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などに変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	2日(木)午後1時から 間引く・社・活気	奈良市立中央公民館4F(近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼　　崎 いくしま	3日(金)午後2時締め切り 喉・油断・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	4日(土)午後1時から 誠・ペット・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉　　吉 川柳会	4日(土)午後1時から 講座・乱れる・地	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
城　北 川柳会	4日(土)午後1時半締め切り 財布・断る・わくわく・自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳塔 唐　　津	6日(月)午後1時半から 望・ともだち・花びら	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	9日(木)午後1時から 料理(共選)・立つ か・え・で(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打　　吹	11日(土)午後1時から 筆・耐える・鳴く	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 ま　　つ　　え	11日(土)午後2時締め切り 氷・渡り鳥・派手・はしゃぐ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川柳塔 みちのく	11日(土)午後4時から 面倒・告げる・びっくり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	12日(日)午後1時から コーヒー・地図・沈む・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 丁寧・豆・ウエスト 「飲み物」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
岬川柳会	12日(日)午後1時半から 独身・相性・溜息	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から しんしん・言う・恥・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ

編集後記

☆12月号から募集している原稿のご応募お待ちしています。一人でも多くの方に、薫風名譽主幹を偲んでいただきたいと思えます。(113頁に要項を掲載)

☆私ごとで申し訳ないが、最近「背中が丸くなってきてるよ」と二人から言われた。密かに気にしてはいたが、はつきり指摘されると些かショックだった。

☆そうなる年頃でもあるし、一日中机に向かう日も多く、骨粗鬆症の症状がぼちぼち出てきてもいるのだろう。しかし、背の曲りは内臓や脳に悪影響を及ぼすから「仕方ない」の一言では片づけられない。

☆昨年観た映画「ヒトラー 最期の12日間」で印象に残ったのは、側近ゲッペ

ルス夫人の姿勢のよさであった。彼女は「ナチ以外の社会で子供を育てたくない」と、敗戦直前に六人の子供を連れて地下要塞に入る。子供達を毒殺し、自らも夫と自殺するためである。

☆欧州では幼い頃から厳しく姿勢を躰けられるというから、そんな状況下にあっても背筋を正して居たのかも知れない。尾羽打ち枯らし、なお自己を正当化しようとするヒトラーの丸い背とは対照的であった。考え方の善し悪しは別として、信念を貫く人の美しさが極立って見えた。

☆何はともあれ、姿勢は本人の心掛けに負うところが大きい。情け容赦なくおし寄せる老いに負けぬよう、背筋をしっかり伸ばそう。☆昨年末から籠島恵子さんが、編集部を手伝って下さっています。(ふ)

太陽おどり

石の上にも三年目、東京に立ち上げた「川柳塔のぞみ」は、皆様方の熱いエールに支えられ、ペテランから初心者まで吟社の枠を越えた川柳好きが集まり、和気藹々と走行中。

偶数月は句会、奇数月は勉強会も定着。集会前の人形町の美味探索「ランチを楽しむ会」も魅力の一つか。

ひとつこと

○若い頃から変な性格で、二十歳の頃は早く三十になりたいと思ひ、三十の頃は早く四十にと思ひ、さすが五十では六十になりたいと思ひなかつたが、おもわなかつた六十に今年はなつてしまふ。

○なぜそのように、生き急いだのか自分ではちゃんと理由をつけていた。その時その時の自分がなんとも厭で、歳さえとれば、少しはましな人間になれそうな気がしたものだ。なんにもしないで変れるものではないと分かつたのも、歳をとつてから、随分時間がかかつてしまった。

○ある方が、六十になつて宗教を持てていないのは、不幸なことだと言つてい

た。以前、宗教にも気をつけてみたが、貴方は宗教に向いていないと匙をなげられた。今思い出してもさぞ

物は勢いとはかりに、初歩教室の形で「のぞみ八王子支部」を2月16日スタートさせます。川柳を詠む楽しさを一人でも多くの方に知って頂くことを尽しています。近い将来、のぞみ軍団として、へあしたをみつめて大行進、ハア太陽の街八王子、という「太陽おどり」を塔まつりでご披露したいと思つています。ご期待下さい。

種を播く天運地運信しきり
(播本 充子)

かし強情だった気がする。

○六十を前に宗教が持てていない私にとつて今では川柳が道しるべになつてい

る。相変わらず自分嫌いは続いているので、自分の句より人様の句の方が好きだ。人生の機微に触れるたび勉強させられる。

(恵)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(4月号)地名

都府道市
県
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「机」(2月15日締切)

4月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会のご案内

川柳塔社では『川柳塔』九五〇号を記念して誌上川柳大会を左記の要領により実施いたします。同人、誌友にかかわらず広く皆様のご応募をお待ちしております。

題・選者（各題2句）

「途中」

田中新一（一番傘） 共選
西出楓楽（川柳塔） 共選

「カード」

平山繁夫（時の川柳） 共選
高瀬霜石（川柳塔） 共選

「ひびく」

福島直球（ふあうすと） 共選
小島蘭幸（川柳塔） 共選

「魚」

今川乱魚（一番傘） 共選
政岡日枝子（川柳塔） 共選

締め切り 四月二十五日

発表表 『川柳塔』七月号誌上。同人、誌友以外の参加者には発表誌送付

投句料 一〇〇〇円（定額小為替）

賞 各選者秀句に呈賞

用紙 『川柳塔』一、三、四月号に添付。他にご希望の方は川柳塔事務所へご請求下さい。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二一〇一―一六―二〇二

川柳塔社誌上大会係

電話〇六―六六二九―六九一四

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)